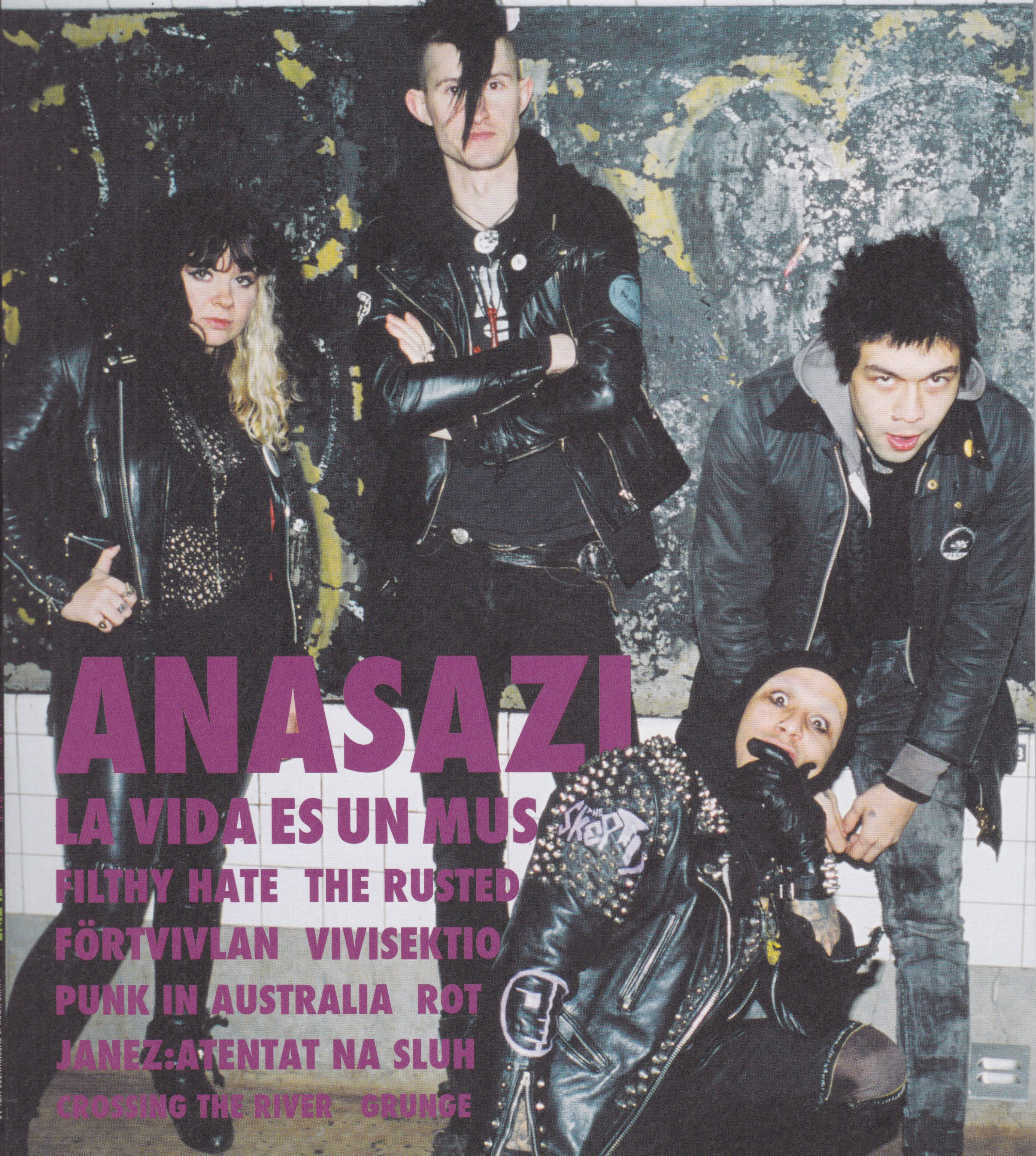
NUKE YORK IS EVERYWHERE VOL.18

EL ZINE

the [international] kvlt conspiracy



ANASAZI

LA VIDA ES UN MUS

FILTHY HATE THE RUSTED

FÖRTVIVLAN VIVISEKTIO

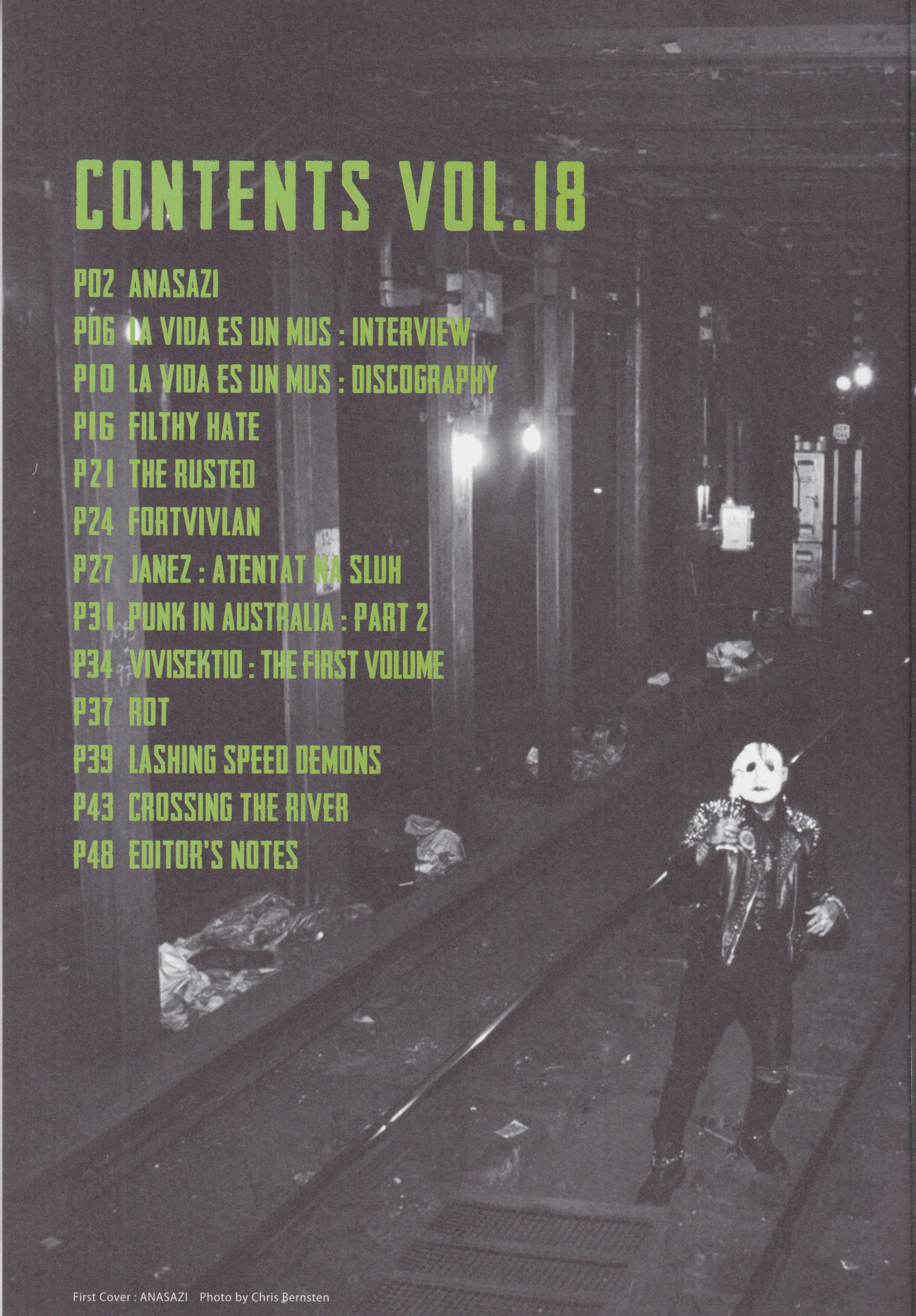
PUNK IN AUSTRALIA ROT

JANEZ:ATENTAT NA SLUH

CROSSING THE RIVER GRUNGE

the [international] kvlt conspiracy EL ZINE NUKE YORK IS EVERYWHERE VOL.18

CONTENTS VOL.18



First Cover : ANASAZI Photo by Chris Bernsten



Photo by Chris Bernsten

ANASAZI

世界各地でムーヴメントとなっている、ハードコア/パンク・シーンの人間によるポスト・パンクへのアプローチ。今号の表紙を飾ってもらったNuke York(≒ニューヨーク)のANASAZIもまた、その範疇で語られることが多いバンドです。…が、しかし。

ポスト・パンクと言い切るにはあまりにも粗暴で、ゴス・パンクと呼ぶにはあまりにも血生臭く、ダーク・パンクと評するにはあまりにも禍々しいそのサウンド。

そんな彼らの待望の1stアルバムが今年、アメリカ盤はToxic Stateから、ヨーロッパ盤はLa Vida Es Un Musからリリースされました。ウルトラ・ヴァイオレンスな楽曲の数々に、彼らの魅力を遺憾なく発揮するアナログな音質。

カルトなホラー・ムーヴィーを見ているような、悪夢と眩暈が渦巻く混沌の世界へと誘う儀式的な一枚で、真にコンセプチュアルな作品でもあります。

インターネット上でメンバーの写真やライヴをチェックする限り、どう見ても"フレンドリー"な人たちではないですし、そもそもアルバムに連絡先も載せていなければ、ウェブ上で"自己(自慰)アピール"の類いをするバンドでもないので、現地の人づてに頼み込んで、今回のインタヴューにこぎつけました。

ヴォーカルのChiなんてほとんど発言していないのですが、こんなナリの人が親切丁寧だったら逆にカリスマ性がダダ下がりなので、これで良いのです!メンバーはChi(C/Vo)、Keegan(K/Gu)、Brett(B/Dr)、Jess(J/Ba)の4人。音楽に対する真摯な意識もうかがえる内容となりました。

■ANASAZIの結成について教えてください。当時、あなたたちをバンドへと駆り立てたものは何だったのですか?

K「俺たちがANASAZIを始めたのは2010年のことだ。Chiがヴォーカル、俺がギター、友達のMikey Cがベース、そしてPSYCHIC TVのドラマーのEddieがドラムを叩いていた。Brettが加入するまでの短期間だったけどな。活動の初期にはちょっとしたメンバー・チェンジがあった。最初のデモと2枚の7インチではJasperがベースを、Christianがシンセを弾いていたんだ。現在の完璧なANASAZIのラインナップ、Chi、俺、Brett、そしてベースのJessが揃うまでの話しだけどね。当時、俺たちは、"俺たち"が聴きたいタイプの音楽を作り、言いたいことを言っていただけさ。あの頃のニューヨークにはあまり存在しなかった類いのね」

C「ジェントリフィケーションだ(※貧困層が住む地域に富裕層が流入する人口移動現象)」

■ANASAZIを始めた頃に、影響を受けていたバンドは?

C「ポスト・パンクと地下鉄のトンネル」

K「始めたときに目標としていたものなんてまるでなかったな。当初、俺たちは"デス・ロック、ゴス、ポスト・パンク"を聴いていたから、そのせいで、俺たちはいつもそんな風に記述されるんだろうよ」

B「最初、僕はADOLESCENTSやSOUTHERN DEATH CULTスタイルだと思っていたよ。ドラム・プレイに関して、僕はいつも集中力が不足していた。反復構造を習得したかったし、フィル・インを入れたりタム回しでもっと攻撃的且つトライバルなサウンドを出したかったんだ。Chiに敬意を表すためにもね。それで、僕はChiと会ったときに、(※CHRISTIAN DEATHの)『Only Theatre of Pain』を聴けって言われたんだ。それが始まりだった。KeeganからはCROW PEOPLEやNOCTURNAL PROJECTIONS、PARALISIS PERMANENTEを思い起こしたな。あと、僕はドラム・マシンやSAMHAINで見せたDanzigのドラムにもすごく興味があったんだ」

■ANASAZIというのは、アメリカの原住民のことを意味しているのですか?

C「古代の敵だ」

B「失われた民族につけられた呼称をバンド名にしようと思ってね。今となっては、彼らのことを何て呼べばよいのか分からなくなってしまった民族のね。"古代の敵"と名づけたのは、彼らの敵対者たちだった。そして彼らの敵の敵が、その呼称を語り継いでいった。物語は常に、勝者の総意をもとにして語られるものさ。どんな文化だろうが民族だろうが、消し去ることができるんだ」

K「米国南西部に過去に存在し、そして突然消滅したAnasazi族の人々と、現在のニューヨーク・シティに暮らす住民及びその文化に、お前は相関関係を見出すことだってできるぜ。そんなことしなくてもいいけどよ、ハハハ」

■これまでどんなバンドでプレイしてきましたか?また、どんなバンドやアーティストを聴いてきましたか?

K「俺が初めてプレイしたパンク・バンドはニューヨークのTHRILLERというバンドだった。あと、DAWN OF HUMANSの初期にも在籍していた。それにBORTGANGってニューヨークのバンドでもギターを弾いていた。近頃はCHEENA、SLENDER、VAMPIRE BUMZZ、SUCKATASHでもプレイしている」

B「僕は色んなバンドで12年間ドラムを叩いてきたんだ。そのほとんどがニュージャージーの無名のバンドだけどね。キャリアの前半ではVULTURESとRARE KILLSってのをやっていて、その次がANASAZIだよ。今はCREEPING DOSEというバンドでもプレイしている。昔はCRAMPSをよく聴いてたね、まぁ、今でも聴いているけどさ。あとは(※SIOUXSIE & THE BANSHEESなどの)BudgieとSiouxsieもね」

J「私は子供のころから音楽を演奏したり歌ったりしていたわね。ニューヨーク・シティで初めて真剣に取り組んだのはAMERICAN SUNというオール・ガールズ・サイケ・バンドで5年くらい前のこと。この3〜4年はANASAZIでベースを弾いてて、もう一つのバンド、SURVIVALではヴォーカルとエレクトリック・パートの作曲もしているわ」

■『Nasty Witch Rock』LPは素晴らしい作品で、過去の音源よりもヴァイオレンス且つカオティックなサウンドになっていると思います。どうしてこの変化が起こったのでしょうか?

K「『Nasty Witch Rock』は現メンバー、俺は最終的なANASAZIのラインナップだとも思っているけど、による初のレコーディングの機会だったからな。俺たちのエナジーは明らかに強烈さを増している。それに俺たちのこの数年間のライヴ・ショーの雰囲気を、初期



Photo by Darryl Reid

Photo by Martin Sorrendeguy



の音源では捉えられていなかったし。このLPは初のANASAZIのレコードだ。俺にとってはね」

B「バンドにJessが加入したことによって、僕たちの進化は促されたんだよ。ソング・ライティングもより自然なものになった。ライヴでのパフォーマンスもお互いが刺激になっているしね。まさに進歩さ」

J「私が加入する以前のソング・ライティングがどんなものだったか、私は何とも言えないけどね。ただ、このレコードに収められている曲は全て協同的に書かれたものだと感じている。曲の一つ一つにたくさんの手を加えていったし、ライヴ・パフォーマンスによって曲の構成も変化していったわ。作曲した一つ一つの曲にエナジーを注いでいるのよ。そして多くの曲に取り組んだことによって、私たちは新たな段階へと進むことができた。独立した曲が続くような作品とは真逆で、私たちのLPは結合していて、全体で一つの曲として読み解くことができる。それってメンバーにとっても重要なことだったのよね。曲が解体されたおかげで、細部にまでこだわれて、そうして全てが真に強烈なものとなったわ。私たちがとても意識したこと、それは初期の音源においてこのバンドが頼っていた手段やパターンをブチ壊し、台なしにするってことだったのよ。別の観点からすれば、多分ひどくカオティックなことよね。だって私たち全員、ニューヨークでの秩序だった生活のおかげで神経症にかかっていてストレスもたまりまくり。おまけに集中力欠乏症で精神も限界に追いやられているからね」

■デジタルっぽくない、アナログなサウンドも素晴らしいです。どのようにしてLPはレコーディングされたのでしょう?

B「僕らのライヴを見ているときのようなサウンドにしたかった。この姿勢があったからこそ、やりすぎずに済んだんだよ。偽りのない、かなり自然なサウンドだね。ライヴのまんま、それが最もラウドに響くのさ」

K「スタジオでライヴをやってアルバム全体、そのほぼ全てをレコーディングしたからな」

J「Ben Greenberg(※Python Patrol Recording Studioの運営者)とレコーディング作業をしたの。全てアナログでの録音よ。そのスタジオ・セッションのあとにデジタルな編集をかけたけど、私たちは極力ありのままになるよう心掛けたわ。セッティングもエフェクトも、あなたが私たちのライヴを見たとしたら、そのままに聴こえるようにね。だからそれほど編集作業はしていないわ。レベルと音の透明度を調整しただけね」

■僕はLa Vida Es Un MusがリリースしたLPを買ったのですが、Toxic State盤とは違いがあるのですか?

J「唯一の違いはジャケットの色のわずかな変化だけよ。Pacoは限定盤としてパープル・ヴィニールを作ったみたいだけど、アメリカでは通常のブラック・ヴィニールだけね」

■Toxic Stateからは過去にシングルを出していますが、LVEUMからもリリースしたのはどうして?

J「アメリカ盤はToxic Stateから、ヨーロッパ盤はLVEUMからリリースされているわ。Toxic StateのJohnはこの数年、Pacoと一緒にやっているのよ。Toxic Stateのリリース作のうち、いくつかをヨーロッパ盤でPacoが出しているからね。HANK WOOD AND THE HAMMERHEADSが昨年、DAWN OF HUMANSとLA MISMAが今年、LVEUMからヨーロッパ盤をリリースするわね」

■ANASAZIのアートワークはいつも素晴らしいです。特にLPに付属している大きなポスターは最高ですが、これはKeeganとChiがデザインしたのですか?このデザインのコンセプトは?

K「ありがとう!あぁ、Chiと俺とでポスターのデザインをやったんだ。ポスターは歌詞の鏡だ



Photo by Alex Heir

Photo by Martin Sorrendeguy



と俺は思っているよ。アルバムで言っていることのヴィジュアル・ガイドみたいなもんだな。単刀直入でありつつも、恐らく少しばかり不明瞭なデザイン。そう、アルバムのメッセージと同様さ」

■基本的に作曲はどのように?その過程を教えてください。

B「常に異なっていると僕は思う。時々、それはリフから始まるし、またはドラム・パートだったり、あとはChiが持ってきたメロディーからだったりね。最初は自然発生的な感じかな、それから、メンバーそれぞれに任せて発展させていくんだ。曲が完成したと思っても、6ヵ月経ってからその曲の本当の演奏の仕方に気づかされることもある。練習しまくることによって、ベストな曲の状態に到達できる感じかな」

K「俺たちはいつだって、どう作曲すべきか、そしてその曲をどうやって発展させるかに取り組んでいるんだよ。一つのパートから始まることもあれば、リフから始まることもある。そうすることによって、完璧に異なる何かへと、進化していくかもしれないからな。多くの場合、完全な白紙状態から曲へと成形されていく。そして俺たちの曲の多くは未だに変化し続けているし、一つとして似たようなものはないね」

J「そうね、大抵は誰かがリフかアイデアの断片を持ってくる。そしてメンバー全員が、各自のパートで納得するまでやり続ける。Chiのヴォーカルがリードする楽曲じゃない限り、私たちがしっかりとした曲の構造を構築する。その後からChiは基本的に加わって来るのよ。曲がうまくできたと感じる前に、少なくとも2、3回はライヴで演奏するようにしている。ライヴのエナジーは、私たちに伸るか反るかの膨大な影響を及ぼしてくるからね。2週間で済むときもあれば、6ヵ月に及ぶときもある」

■歌詞のテーマとしているものは?

C「メッセージは自由になる」

J「Chiが書く歌詞のテーマは多岐に渡るわ。ジェントリフィケーション、スピリチュアリティ、肉体の健全と病、人種差別的な法律、そして深慮、愛、貪欲、重圧、自己嫌悪、自己破壊、軍国主義、都市の衰退、宗教組織、組織化された混沌…」

■ANASAZIの音楽はデス・ロックやゴス・パンク、ポスト・パンクなんて記述されることもありますが、自分たちの音楽を自身ではどのように説明しますか?

C「屋根裏部屋の雑音だ」

■ANASAZIのキーワードの一つに"Nuke York"という言葉があると思います。この言葉に込めた意図を聞かせてください。

C「Nuke Yorkとは、あらゆる場所だ。ニューヨークに限った話しじゃない。窮民は貧民街に押し込められるんだ」

■最近のお気に入りのバンドや、映画、小説やアーティストを教えてください。

B「僕が今、気に入っているバンドはCONGOS、KUUDES TUNTI、CURSEDだね。映画だと『ニア・ダーク/月夜の出来事』、『マッドマックス2』、『ジャッジ・ドレッド』。本だと『吸血鬼ドラキュラ』にアーティストならMike Mignola(※『ヘルボーイ』などで知られる漫画家)かな」

J「私はたくさんのサイケを聴いてきたわ。それにDETROIT HOUSE、Anna Domino、Townes Van Zandt、それにDolly Partonも好きよ、ハハハ。アメリカのパンク・バンドならCONEHEADSとTOZCOSが大好き。ニューヨークならLOTIONとDAWN OF HUMANSも最高ね!最近はたくさんのアーティストやミュージシャンの自叙伝を読んでいるかな…。たとえ実話だとしても、私はそれらをフィクションとして読んでいるのよ。Octavia Butler、Bohumil Hrbal、Audre Lorde、それにEileen Mylesは何度も読み返している作家ね」

K「Joe Bataanだ」

C「Vinnie Stigma(※AGNOSTIC FRONTのギタリスト)とTHE ASTRONAUTS(※LVEUMが再発したUKのアナーキスト・ヒッピー・バンドのことだと思われる)」

■多分、あなたたちはBandcampもFacebookもInstagramもやっていないですよね。SNSが嫌いなのですか?パンクスがそんなことをやるなんて馬鹿げている?Myspaceが流行ったときには、逆にボイコットするアナーコ・パンク・バンドがいたりしましたが。

B「僕はその手のものが好きじゃないね。馬鹿げているよ」

K「ボイコット、ボイコット、ボイコット」

■くだらない質問ですが、メジャー・レーベルがあなたたちと契約したがったらどうしますか?オーヴァーグラウンドのミュージック・シーンでプレイしたいですか?

B「Chiも含めた契約で、彼が望むなら僕もついていくよ」

K「俺たちはアンダーグラウンドに留まる。だけど金を積まれちまうかな?!そしたら分からねえな、ハハハハハハハ」

J「ハハハ、メジャーが私たちと契約したがる前に、世界は藻屑と化して海へと消えるでしょうね」

■バンドとしてのゴールは?

K「日本へのツアー!」

C「アポロでライヴやりてぇーな」

B「もっとレコードが欲しい。もっと旅行がしたい」

■インタヴューさせてくれてありがとう。日本の読者にメッセージをお願いします。

C「Bootleg the bootleggers」

K「One luv」

B「Ten men, ten colors」



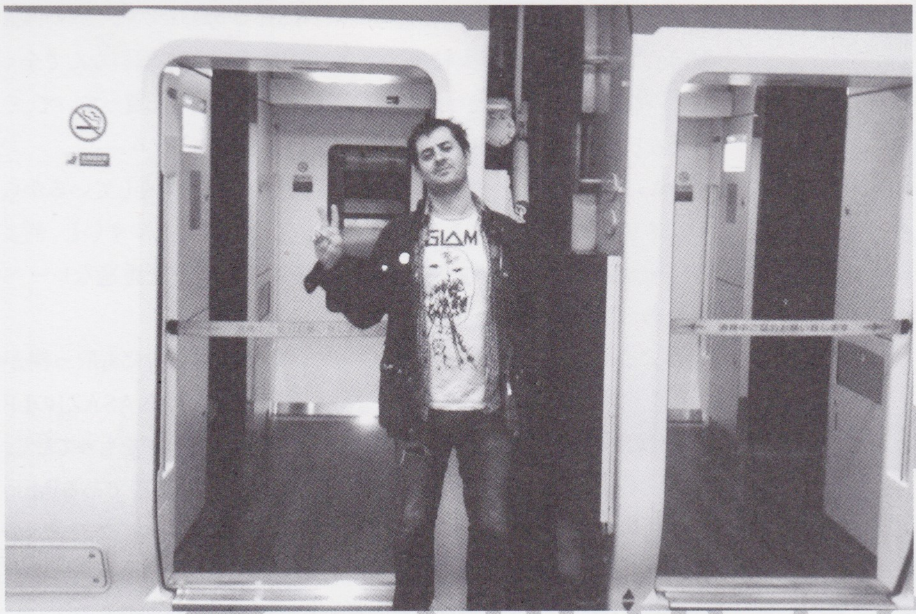
Photo by Nikki Sneakers

INTERVIEW with PACO
LA VIDA ES UN MUS
DISCOS PUNK

ANASAZIのインタヴューに続いては、ロンドンのパンク・レーベルLa Vida Es Un Musの大特集です!意識的なレーベル買いなんて全くしていなかったのですが、何気にLVEUMの作品はよく買っていて、そうなると自然、EL ZINEで取り上げる機会も多々あったり——。
細かいジャンルやシーン/地域性を超越したリリースをしているからマンネリ感はゼロ。流通もしっかりしているので入手しやすいし、何より、その時々の"旬"なバンドを嗅ぎ分けるセンスが大変秀逸なレーベルなのです。
常々、"インタヴューしたい!"とは思っていましたが、どうにも取っ掛かりがなく現在までズルズルきてしまいました。しかし!ANASAZIのLPが最高だったこと、そしてDAWN OF HUMANSのLPをもってして、リリースが100タイトルを迎えたこともあり、今回、主宰者であるPacoにインタヴューを申し込みました。絶え間のないリリースにツアーへの同行と、大忙しであるにも関わらず(だからこそ?)メールの返信がメッチャ速い(ほぼチャット状態)。締め切りもキッチリ守る(非常に珍しい)。デキル人間はやっぱり違うな〜、と改めて思ったのでした。

■まず、あなたはスペイン出身ですよね?どんな子供でしたか?いつ、どうしてイギリスに引っ越したのですか?
「僕はスペイン南部の田舎の出身なんだ。とても小さな町で子供時代を過ごしたよ。ハエン県のアルキージョスってところさ。スペインの中でも本当に貧しいところで、町自体も物凄く狭くて、1000人くらいいた住民たちも、どうにか生きながらえている感じだった。だから、僕はこの町から出られるようになると、すぐさま実行したよ。最初は3年間ほどグラナダ(※スペイン南部の都市)で暮らした。1997年になると、イギリスのロンドンに引っ越したんだ。あの頃の僕には、自分の人生を好転させるものなんて何もなかった。ただ、パンクに夢中なだけだった。だからロンドンは移住するには最適な場所に思えたんだよ」
■初めて聴いたパンク/ハードコア・バンドは何でしたか?あなたは何歳でした?
「初めて聴いたパンク・バンドが何だったかなんて、思い出すのは難しいな。でも、SINIESTRO TOTALかKORTATU、もしくはLA POLLA RECORDSだったよ。休日になると祖父母にゲームセンターへ連れて行ってもらってたんだ。ビデオ・ゲームをしにね。そこでかかっていた。音楽も大好きだったし、年上のパンク・キッズの見た目も大好きだったから、あっという間にのめり込んだよ。たしか、1986年だったと思うから、僕は11歳だったね」
■La Vida Es Un Musを始めた理由は?LVEUM以前にレーベルやディストロはやっていましたか?
「LVEUMは1994年か1995年頃に始めたんだ。元々は3人でやっていたんだよ。あの頃、僕は音楽やカウンター・カルチャー、そしてアナーキストの政治観に夢中だったし(今でもそうだけどね)、僕たち3人はグラナダの地元のスクワットに関わっていて、パンクのショーを企画していた。だから、レコードやテープ、ファンジンのディストロを始めるのはごく自然なことに感じられたんだ。レーベルとして初めてちゃんとしたリリースをしたのはもっと後、1997年のことだね。レーベルやディストロをそれまで運営したことはなかったんだけど、テープのトレードなんかで周辺のレーベルやディストロとはずっと繋がってはいたんだ。それに、ショーのブッキングや軍国主義に対抗する政治活動、スクワットにも携わっていたしね」
■"La Vida Es Un Mus"と名づけたのはどうして?
「そのことについてはみんな質問してくるね。どういう意味にでもとれると思うんだ。とても意味深長な言葉だからね。字義通りの意味なら、"Life is a Mus(Musは物凄く古いスペインのカード・ゲームで、理解するのも遊ぶのも、とても難しいんだ)"。ある晩、キメていたときに思いついてね。それ以来この名前にしているんだ。本当、人それぞれに色んな意味にとれる言葉で、まぁ、実際のところちょっとダダ





イストっぽいよね」

■レーベル・ロゴのカプセルが意味しているところは？

「レーベルを始めた当初は、リリース毎に異なるレーベル・ロゴにしようとしていたんだ。だけど、しばらくしたら毎月新しいロゴを作るなんて無理だって分かった。それでSpansuls(※主に80年代に活動していたスペインのパンク・レーベル)からデザインを拝借して今の錠剤のロゴになったんだ。Spansulsもデキセドリン(※中枢神経刺激剤として用いられるアンフェタミンの異性体)の製薬会社からその名を拝借しているんだけどね。まぁ、昔のスパニッシュ・パンクに対するオマージュだよ。それにこのデザインは想像力を物凄く掻き立てるよね。僕にとって音楽はドラッグみたいなものであって、そしてレーベルによって僕は音楽中毒にさせられたってわけ。そんなコンセプトもあったんだ。それに見た目も格好良いだろ」

■あなたのリリースは国際色豊かだしヴァラエティに富んでいますよね。リリースする際に重要視していることは？

「僕は迎合したサウンドや特定のシーンのバンドだけを出すといった、ありがちなリリースをしないようにしているんだ。だから僕のリリースはバンド毎にかなり異なっているんだよ。でも、すべてパンクと言うことができるけどね。それに僕は子供だった頃、パンクがインターナショナルなムーヴメントであるところにも魅了されたんだ。だからこそ僕は世界中のバンドのレコードをリリースしているし、蒐集してもいる。明白な選択でしょ。僕は世界各地のバンドをリリースしたい。だからやっているまでさ。

僕は熱心なレコード・コレクターでもあるから、どんなバンドをリリースするにせよ、事前に重大な分析を自分に課すんだ。もし僕がこのレコードをレコード屋で見かけたら、果たして自分は買うだろうか、ってね。物凄く感情的な人間だから、いつもリリースするかどうかの決断には一分しかかからないんだけどさ。

決まりごとはないよ。僕はどんな類いの音楽も好きだし、大抵の場合、バンドにレコードを出さないかとアプローチする時点で、既に僕はそのバンドのファンになっているからね。時には、バンドのライヴを見ていると、突発的にそのバンドをリリースしたくなることもある。またある時は、送られてきた一本のデモを作業中に繰り返し千回も聴くことがある。そういう場合、大抵僕はそのバンドを気に入っているってことだから、バンドにレコードを出さないか連絡するんだ。

それにルールは作らないようにしているんだよ。バンドが創造性を100パーセント発揮して、作品を最後まで仕上げるというのが僕の好みなんだ。音質やデザインに関しては提案をするかもしれないけど、それでも最終的な決定をくだすのはいつだってバンドだよ」

■DISASTERやCRISIS、ASTRONAUTS、ULTIMO RESORTE、MG 15等といった昔のバンドの再発は、基本的にあなたがバンドにオファーを出しているのですか？あと、実現できなかった再発というのもありますか？

「昔の音楽も大好きだから、自分が好きではあるけれど、レコードを見つけるのが難しいようなバンドをチョイスして、声をかけている。時には困難もつきまとうけれど、できるだけ再発よりも新しいバンドをリリースしようとはしているよ。新しいバンドとの作業が容易にいかないこともある一方、昔のバンドとの作業はスムーズにいったりするからね。

若い世代が僕のお気に入りのバンドを発見して、レコードを入手できるっていうのはいいことだよね。オンライン・サイトで何百ドルも払って手に入れるんじゃなくてさ。

再発したかったけど、実現できなかったのもいくつかあるよ。思いつく限りでは、QLOAQA LETALにSADO NATION、あとはTWELVE CUBIC FEETかな」

■この数年、パンク/ハードコア・シーン発のポスト・パンク・ムーヴメントが起こっていると思うのですが、何か注目している音楽スタイルというのはありますか？

「色んな音楽に耳を傾けるようにしているから、一つの音楽スタイルだけを聴くってことはしないんだ。多分、君を驚かせてしまうだろうけど今、僕は新しいスペインのラップを聴きまくっているところさ」

■それは意外ですね。スペインのラップってどんなのですか？パンクとの共通項を感じたりしますか？僕は全然詳しくないのですが、基本的にラップも反権威主義ですよね。

「パンクとラップの間には直接的な関連性があると思うよ。少なくとも、両者にはメッセージがある。僕もラップは専門じゃないけど、ちょっとしたワケがあって、ここ最近は色々と聴いているんだ。色んな音楽に対してオープンであるべきだよね。

気に入っているのは、LOS CHIKOS DEL MAIZという共産主義のラップ・バンド。でも僕は共産主義団体をサポートしてはいないよ。歴史的に見ても、彼らは自発的な運動を搾取してきたし、信用に値しないからね。それでも、LOS CHIKOS DEL MAIZのメッセージはすごく力強いし、僕たちが生きるこの複雑に入り組んだ時代において、若者が政治に関わることは大切なことだと思うんだ。パンクはゲットーみたいなものだから、外側に向けてその声を届けるのは困難でもある。だからこそ、車や女、それに銃やドラッグなんかじゃなく、政治について歌うラップ・バンドというのは重要なのさ。他にオススメのバンドはARMA X、KRONSTADT(INVASIONのドラマーのOtanが在籍)、あとは(政治的ではないけれど)JARFAITERにEL COLETAかな、僕が夢中なのは」

■シンパシーを感じるレーベルはありますか？

「今のお気に入りのレーベルはCintas Pepe、Toxic State、Lengua Armada、Alta Intensidaz、Sangre Azulだね。どのレーベルも素晴らしい作品をリリースしているよ」

■では逆に、気に喰わないレーベルは？Fat Wreckみたいな大手のパンク・レーベルはどうです？

「好きじゃないレーベルなんてメチャクチャあるよ。僕はFat Wreckが近頃何をしているかすら知らないけどね。そもそもまだ存在しているのかい？レーベルの規模が小さくても大きくても、僕は全然気にしないよ。インディペン

デントに運営されていて、自分たちのすることに情熱を傾け、そしてバンドに対し敬意を持って接しているならね。企業を支持したり、気にかけたりする暇なんて僕にはないしさ」

■これまでのリリースで印象深いものは?

「そんなの答えられないよ。100タイトルのうち、どれか一枚を選べって言われているようなものだからね。でも、家族のような親密さを感じているという点においては、きっとバルセロナのバンドになるだろうね。INVASIONにDESTINO FINAL、OTAN、UNA BESTIA INCONTROLABLE、GLAM、BARCELONA、そしてBELGRADO。レーベルを始めた当初から一緒にやってきた、そして一緒に成長してきたバンドだからさ。彼らなしに今の僕はなかったよ(それは他のバンドにも言えることだけどね)」

■先日、DAWN OF HUMANSのLPを"MUS100"として、100タイトル目のリリースにしましたよね。これは計画していたのですか?たまたま?

「計画された偶然ってところかな、ハハハ!MUS100にあたって、何か違ったことをしたかったんだ。実際、そのタイミングで前々から心に描いていたことを色々やってみようとはしたんだけど、うまいこといかなくてね。ただ、幸運にもDOHのLPとヨーロッパ・ツアーがその頃同時に計画されていたから、最終的にこのLPは完璧なリリースになったんだ。大好きなバンドで、メンバーとも本当に仲がいいから、100タイトルを祝うには相応しいリリースだったと思うよ」

■6月に敢行されたDOHのヨーロッパ・ツアーに同行しましたよね。順調でしたか?

「ツアーは数日前に終わったんだ。正直に言って、最高だったね。近頃の標準的なツアーと比べれば、5週間にも及ぶ長期間のツアーだったからかなりハードでもあったけどさ。それでも素晴らしい場所で素晴らしいショーを行い、素晴らしい時間を過ごせたよ。数多くの国を訪れて、たくさんの人々と会った。メチャクチャ楽しかったけど、帰宅して日常を取り戻すのに2日間かかったよ」

■最も刺激的だった国は?良い思い出はできましたか?

「マヨルカと、ロンドンでの2回のショー、あとはバルセロナが僕好みのベストなラインナップだったね。だけど、ザグレブ(※クロアチア)やブダペスト(※ハンガリー)、ポストイナ(※スロベニア)、クラクフ(※ポーランド)、ワルシャワに行けたのは本当に楽しかったね。初めて訪れたり、久しぶりに行けた場所だったからさ。一番の思い出は、3時間ほど休憩をとってイタリアで泳いだこと、ポストイナの広大な洞窟を見に行ったこと、ローザンヌのアール・ブリュット美術館を訪れジュネーブ湖で泳いだこと、ブダペストの温泉に行ったこと、ポストイナの都心から離れた手作りのスケート・パークで演奏できたこと、かな。DOHとのツアーは退屈とは無縁だったね。愉快な最高の仲間だし、彼らのショーは毎晩素晴らしかったからさ」

■では、注視している"シーン"てありますか?僕はウメアのシーンだったり、あと今はニューヨークが最高に面白いと思っていますが。

「イカれた愛国主義者みたいに思われるかもしれないけど、今のバルセロナとロンドンは素晴らしいよ。数え切れないほどの最高のバンドにレーベル、ジンを作っている人たち、そしてショーがあるんだ。評価せずにはいられないよ。僕も今のNYCが生み出すものが大好きだね。数多くの素晴らしいバンドが活動しているから、注目せずにはいられないな。あとはメキシコ・シティも興味深いバンドを輩出しているね」

■精力的に動き続けていますが、その原動力になっているものは?

「自分のやっていることに熱中できなくなったら、もう僕は自分が何をすればいいのか分からなくなってしまうよ。僕はほとんど眠れないし、始終ストレスにまみれている。ロンドンで生活するのにはメチャクチャお金がかかるから、ずっと働き続けていないといけない。でも、新しいレコードを出したり、リリースしたバンドがツアーでやって来たりして、みんながそれを気に入ってくれたら、それは僕にとって計り知れないことなんだ。僕のしていることによって、みんなが自分自身の人生を手に入れたり、より良くあるための影響を与えているとしたら、って考えるのが、僕の原動力になっているんだ。僕たちが生きている、このクソみたいな人生を変えるんだよ」

■今のロンドンのシーンはどうですか?

「前述したように、僕が覚えている限り、今のロンドンは暮らすには最高のときを迎えているよ。1997年から暮らしているけど、こんなにも日々の出来事が刺激的だったことはないね。新しいバンドがたくさん出てきて、そりゃ好きなバンドもいればそうでもないバンドもいるけど、少なくとも活動している人たちがここにはいる。僕の好きで、そしてみんながチェックすべきバンドも数多く存在している。FRAUにNO、GOOD THROB、KICHIGAI、SNOB、EFIALTIS、それとCULT SYNDROME。素晴らしいレーベルとジンもいくつかあるし、もうすぐパンクスが運営するDIYセンターもオープンするんだ」

■たしかにFRAUやNO、GOOD THROBといった良いバンドが沢山いますよね。では、古くからいる有名なUKパンク/ハードコア・バンドってどうですか?DISCHARGEだったりCOCKNEY REJECTS、999、ANGELIC UPSTARTS、THE VIBRATORSとか。こういうバンドはまだ活動していて、ツアーやフェスに出演していますよね。あなたは見に行ったりします?

「僕にはそういったバンドを見に行く時間はないな。DISCHARGEは僕にとって常にお気に入りのバンドの一つではある。遥か昔に、凄まじい衝撃を僕に与えたからね。僕はDISCHARGEが大好きさ。彼らのライヴを見に行かないくらいにね。そう、彼らは自分たちの遺産に対して小便をかけているんだよ。

個人的に思うのは、再結成バンドたちの巡業はおしなべてサーカスみたいなものってこと。救いようがないね。とは言え、彼らのライヴに



オフィス



with Jesus/Me Saco Un Ojo Records

ついてこんなことを言っている僕は一体何様だよって話しだけどさ。30年前にやったのと同じ曲をやり続けたいのなら、それは格好良いことだと思うよ。彼らのライヴを見に行く人たちがたくさんいるってことも承知している。ただ、僕にはそんな時間はないってだけだよ。チケット代の高い大規模なフェスティヴァルに行って、大勢の年寄りパンクスが、彼らの青春期を再現している姿を見るよりも、僕はデモ・テープをリリースしたばかりのバンドとか、小規模なショーで演奏しているバンドをサポートしたいからね。ただ言っておきたいのは、CHAOS UKは今でも最高だってこと、ハハハ」

■あなたのバンド、THE LOWEST FORMはどうなっているんですか?過去にもバンドをやっていたのですか?

「THE LOWEST FORMはゆっくりだけど、新しいLPの曲作りをしているんだ。ギタリストはグラスゴーに引っ越して自身のソロ・プロジェクトに忙しいし、ベーシストもソロ・プロジェクトをやっていて忙殺されている。おかげで練習するのも一苦労なんだけど、新しいLPは必ず作るよ。8月にはロサンゼルスでショーをやるんだ。他にも何ヵ所かを予定している。僕はティーンエージャーの頃にいくつかのバンドでドラムを叩いていたよ。1991年から1992年頃だね。けどわざわざ言及する価値はないな。僕のキャリアなんてそんなところさ、ハハハ!」

■何度も来日していますが、日本のどこに惹かれるのでしょう?

「何度か日本を訪れることができてラッキーだったし、近々また訪れる予定でいるよ。もう単純に日本が好きなんだ。パンクを通じて知り合った仲の良い友人もいるし、彼らともずっと付き合っていきたいからね。それに訪れるたびに、もっと友人を作りたいんだ。僕は旅行すること自体大好きなんだけど、訪れるたび、異なる場所で異なる発見をしたい人間にとって、日本はその全てを兼ね備えたところなんだよ。日本のレコード屋、パンク、ショー、居酒屋でのパーティーなどといったことも大好きだし、高野山や沖縄、日光を旅するのも、見知らぬ土地で迷子になることも大好きなんだ。日本を旅する、その最も重要な理由がパンクであるのは明らかだよ。だけど日本の人たちのエクストリームなライフ・スタイルにも興味があるんだ。何軒ものお店を廻って、レコードを延々と探しまくるようなね。

僕が日本で出会った人たちはとても誠実且つ友好的で、それでいてユーモラスなんだ。だから日本の人たちとの対話は、いつもすごくポジティヴだよ。いつか友人たちが僕の国を訪れた際には、同じように迎えられたらと思っている。みんなが日々をどう過ごしているかを知るのも好きなんだ。何を食べ、権威や自然環境に対してどう考えているのか。強烈な環境の中で、どうやってパンクスであることとの折り合いをつけているのか。みんな長時間働いているように見えるけど、どうやってバンドのための時間を見つけているのか、いつも驚かされているよ。それにショーやツアーを企画することがいかに大変なことか、そして、年齢を重ねてもパンクスでい続けることがいかに大変なことかってこともね」

■それでは、好きな日本のバンドは?

「書き記すにはとてもじゃないけど多すぎるよ。でも、どうしてもと言うならば、FRAMTIDにISTERISMO、KRIEGSHÖG、VOCO PROTESTAといった僕がリリースしたことのあるバンドは、自分にとって大切な存在だね。それにLIFEとBAKASU(馬鹿衆)も好きだよ」

■今後の予定を聞かせてください。

「今後のリリース予定はまず、昔のオランダのパンクで、レアな7インチの再発が2枚(THE SQUATSとTHE VULTURES)。それにDISCLOSEの再発(『TRAGEDY』LPと『YESTERDAY'S FAIRYTALE TOMORROW'S NIGHTMARE』MLP)、それからオークランドのPIG DNAのLP、WOOLFの2nd LP、L.O.T.I.O.N.のLPにLA MISMAのLP。他にもいくつかあるけど、まだ固まっていないんだ」

■インタヴューさせてくれてありがとう。日本の読者にメッセージをお願いします。

「読んでくれてどうもありがとう。ここで僕が言ったことには、何の意味もないんだ。君自身であること、僕自身であることが大切なんだ。独断的な意見になんか惑わされるなよ。それと…もしかしたら誰か持っているかもしれないから、ここに僕のジャパニーズ・パンクのウォント・リストを記しておくね。トレードするか、または購入したいと思っている」

A-BOMB - Hell's story 7" flexi
ASBESTOS - The Final Solution LP
EXECUTE - A to Z 7" flexi
G-SPOT - Radical and shout 7" flexi
HOG-ISH - 8" flexi
HUMAN GAS / STALI NISM - Split 7"
IKKASHINJU - Dead Section 7" flexi
KA-RA-SS - 7" flexi
LAVATORY - World War III 8" flexi
SO WHAT - Bloodwash the city 7"
TETSUARREY - 1st LP
TOXOVOMIT - Crisis of life 7" flexi
TRANQUILIZER - 1st 7" flexi
V/A - ADK Omnibus Vol.1 2x7"
V/A - Super Gimmick Special '82 LP
V/A - 突撃!パルチザンロッカーズ 7"



with モーリー /Overthrow Records

LA VIDA ES UN MUS DISCOS PUNK DISCOGRAPHY and REVIEW

音源紹介

Pacoへのインタヴューのお次は、LVEUMのディスコグラフィー&ピックアップ・レヴューです。どうしてもPacoの出身地であるスペイン及びスペイン語圏、あとイギリスのバンドが目立ちますが、それでもLVEUMの作品を追うことによってある程度は、近年のアンダーグラウンド・パンク/ハードコア・シーンの遍歴が追えるなぁ〜と、書いてみて改めて思いました。他レーベルとの共同リリースも多いので、"この作品にも噛んでいたのか!"と新たな発見もあったり。お楽しみ頂ければ幸甚に存じますです。

MUS01 INCONTINENCIA + ESCUELA DE ODIO (Split Cassette Tape)

MUS02 LOS CRUDOS/1991-1995 Los Primeros Gritos (12")

50以上ものヨーロッパのDIYパンク/ハードコア・レーベルによる共同リリースで、LVEUMも参加。他に名を連ねているのがTrujaca Fala(ポーランド)、Distortion(スウェーデン)、Agipunk(イタリア)、Flat Earth(イギリス)等々お馴染みのレーベルから無名なレーベルまで。これだけの数のレーベル間で、作業や資金をどう割り当てたのかが気になりますが、サウンドはもちろん言わずもがな、怒りのラティーノ・ハードコアで不変の格好良さ!

MUS03 MG15/Derecho A La Vida (7")

MG15の85年にリリースされた1stシングルの再発盤。原初の衝動にまみれたスパニッシュ・ロウD-Beatが炸裂!彼らの遺伝子が今尚引き継がれて



MUS01



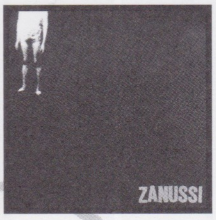
MUS02



MUS03



MUS04



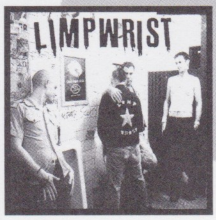
MUS05



MUS06



MUS07



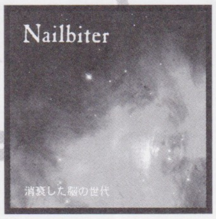
MUS08



MUS09



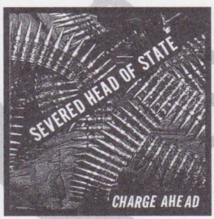
MUS10



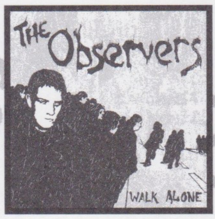
MUS10


MUS11


MUS12



MUS13



MUS14



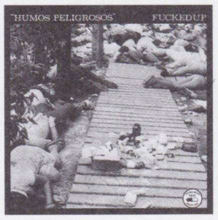
MUS15



MUS16



MUS17



MUS18

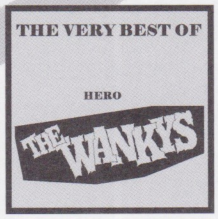


MUS19



MUS20


MUS21

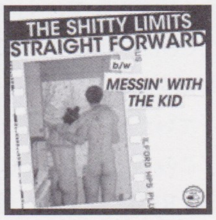


MUS22



MUS23

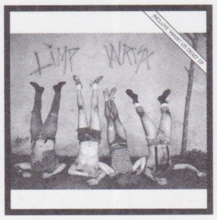

MUS24

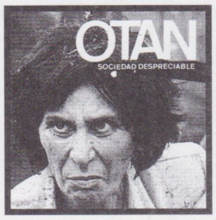


MUS25

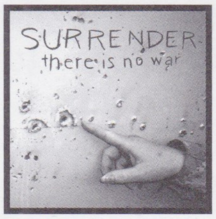

MUS26


MUS27


MUS28



MUS29



MUS30

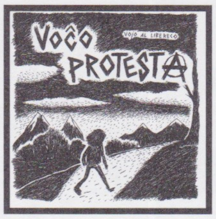


MUS31


MUS32



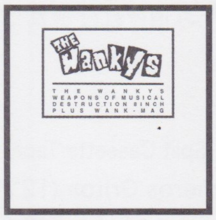
MUS33



MUS34



MUS35



MUS36



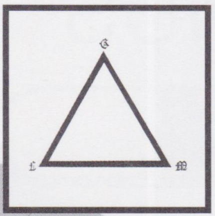
MUS37



MUS38



MUS39


MUS40

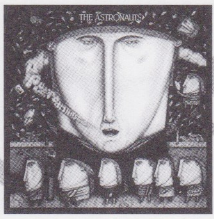


MUS41


MUS42



MUS43



MUS44



MUS45



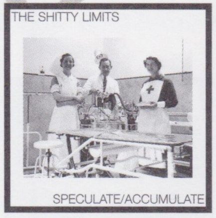
MUS46



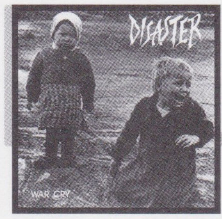
MUS47



MUS47



MUS48



MUS49



MUS50

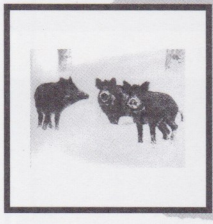


MUS51


MUS52



MUS53


MUS54


MUS55



MUS56


MUS57



MUS58

いるせいで、スペインのDis系は異常なまでにロウなのだろうか…。オリジナルはイタリアのAttack Punkからリリースされたというのも興味深い一枚。

MUS04 EL FARY REVENGE (7"/※テスト・プレスのみ)

MUS05 ZANUSSI/ST (7")

MUS06 E-150 + ZANUSSI (Split 7")

MUS07 MG15/Caos Final (7")

MUS08 LIMP WRIST/ST (12")

LOS CRUDOSのMartinが率いるQUEERハードコアの雄(!!)、LIMP WRISTの1stアルバム。"I Love Hardcore Boys/I Love Boys Hardcore"が全てを物語る怒涛のブチ切れスラッシュ・パンク！US盤はもちろんMartinのレーベルLengua Armadaから発売された。

MUS09 DESTRUCCION + SIDA (Split 7" with Fanzine)

MUS10 DESTRUCCION + NAILBITER/ Makineros Hijos De Puta + Faded Brain Age (Split 12")

MUS11 ESKUPITAJO/Demo 86 (7")

スペインのガキンチョが残した86年のデモをアナログ化。"Kaos Y Destruccion"(Chaos And Destruction)で幕を開けるこれぞロウ・パンクの必殺盤！ドイツのADOLF HITLER KLANしかり、この手のスノッティー&ポンコツで、勢いしか感じられないサウンドってやっぱサイコーですわ。

MUS12 DIR YASSIN/Hitpakchut (7")

イスラエルのファスト・スラッシュ・ハードコア・バンドの14曲入り7インチ。カオティック・ハードコア的な曲展開も孕んでいるから、単調なそれとは違い飽きさせない。尚、DIR YASSINというバンド名は、1948年に起こったユダヤ人武装組織によるデイル・ヤシーン村(Deir Yassin)でのアラブ人虐殺事件から命名されたようだ。それまでスパニッシュ系がメインだったLVEUMのリリースも、この頃から国際色が強まっていくことに。

MUS13 SEVERED HEAD OF STATE/ Charge Ahead (7")

WORLD BURNS TO DEATHのJackがヴォーカル、TRAGEDY等々のToddがギター、DEFIANCE等々のKellyがベース、J CHURCH等々のChrisがドラムという強力なメンツによるバンドの、APPENDIXのカヴァー含む3曲入り。クラスト〜ジャパニーズ・ハードコアの影響を前面に出したドス黒いサウンドで、2000年代半ばのこういう音を踏まえた上で、更にエクストリーム化させたのが現行のヤングなUSクラスト勢なのかな？とちょっと思ったり。

MUS14 THE OBSERVERS/Walk Alone (7")

ヨーロッパ各地でTHE VICIOUS、GORILLA ANGREB、NO HOPE FOR THE KIDS、COLA FREAKSらが哀愁パンク・ロックの猛威をふるっていた頃、アメリカでは何が胎動していたのか？真っ先に思い浮かぶのはやはりこのバンド、THE OBSERVERSでしょう。後にRED DONSへ発展し、更にNO MORE

ARTへと派生もしていく流れが面白い。メランコリックに煌めく珠玉のパンク・ロック!

MUS15 HUMAN BASTARD/
War Of The Lords (7")

MUS16 FAMILIA REAL/Demos (12"/※実現せず)

MUS17 BURIAL/
Never Give Up... Never Give In (12")
ドイツのバーニング・ハードコア・バンドの1stアルバム。ジャパニーズ・ハードコア影響下のバンドは世界中に数あれど、頭一つ抜け出た存在だったと思います。後にちょっぴりメタル化しますが、この頃の情熱&熱情オンリーのスタイルが一番シンプルで好きでした。メンバーもすごく良い人たちだったな〜、と思い出いっぱいで懐かしい。

MUS18 FUCKED UP/Humos Peligrosos (7")
来日もしたカナダのCAREER SUICIDEのメンバーも在籍しているバンド。僕は本作とシングル「Two Snakes」しか聴いたことがないのですが、速さに頼らないフックの効いたスラッシュ・パンクで、曲によってはPOISON IDEAを彷彿とさせるところもあり格好良い。数年前には突如、原宿での単独来日公演が行われて"ナゼ?"となりましたが、以降フジ・ロックに出演したりと"洋楽リスナー"も巻き込んでメジャー・フィールドで大人気のようです。

MUS19 GRUPO SUB-1/
Tercer Grado En Leningrado (12")
LVEUMというレーベルを初めて意識したのはこのリリース辺りからだったような…。シンセが飛び交うレトロ・フューチャーな雰囲気をまとった、スペインの女性ヴォーカル・パンク・ロック〜ガレージ・パンクの1stアルバム。今では目新しくもないですが、当時(2007年頃)、海外のレーベルのリリースなのに帯がついているってちょっと新鮮でしたよね。

MUS20 DELIRIUM TREMENS/
Presagio De Muerte (7")

MUS21 INVASION/ST (12")
後にDESTINO FINALへと発展し来日も果たした、スパニッシュ・ハードコア・バンドの1stアルバム。強烈なリヴァーブをかけたヴォーカルに、緊張感みなぎるスカンジ・クラスト的楽曲。その完成度の高さも相まって人気を博し、2000年代半ばの欧州ハードコア・シーンを代表するバンドの一つにまで登りつめた(気がする)。今にして思えば、TRAGEDY以降、世界各地で爆発的に流行した叙情系クラストからエモーショナルな要素を抜いて、ハードコアが本来持っていた凶暴性を取り戻そうとしたのがこの手のスタイルだったのではないだろうか。

MUS22 THE WANKYS/
The Very Best Of Hero (12")

MUS23 ANGER BURNING/Warcharge (7")
スカンジD-Beat!バンド名はDISCHARGEですが、DISCHARGEよりもANTI CIMEXやSHITLICKERS寄りの荒々しいロウ&プリミティヴなハードコア。近年のスウェーデンにはDISCOVERやGIFTGASATTACKといった、D-Takt & Råpunk〜Rawmantic Disasters系のDisバンドが群雄割拠しているように思えますが、正直僕にはもうどれがどれだかサッパリで…。この周辺に詳しい方がいたら、ぜひご教示頂きたい。

MUS24 INVASION/La Caza (12")

MUS25 THE SHITTY LIMITS/Straight Forward + Messin' With The Kid (7")
KBDフリークスからガレージ・マニアックスまでを魅了するUKパンク・ロックの、必然にして必殺の2曲入り円盤。ササクレだったギターがハートを切り裂く、ギミック皆無の純血のパンク・サウンドで、アナログな音質含めて最高です。こういうバンドにまでアンテナを張っているところに、LVEUMの懐の広さとセンスを感じるのでした。

MUS26 ULTIMO RESORTE/
La Larga Sombra Del Punk (12")
79年にバルセロナで結成された女性ヴォーカル・パンク/ハードコア・バンドの編集盤LP。捲し立てまくるスペイン語の歌唱とVICE SQUADバリのアタック感で攻めるポゴ・アンセム!キメキメのパンク・ファッション含め、当時から何十年の時を経ようとも色褪せることのないスパニッシュ・パンクのクラシック!Barcelona Es Diferente!

MUS27 GRUPO SUB-1/Rebelde Wave (7")

MUS28 LIMP WRIST/ST (12")

MUS29 OTAN/Sociedad Despreciable (7")

MUS30 SURRENDER/There Is No War (7")
カリフォルニアのアナーコ・パンク・バンドのセカンド・シングル。切々と、それでいて力強く訴えかけてくる女性ヴォーカルが特徴なのだが、メッセージありきの楽曲でちょっと退屈…と思っていたら、B面の最後の"Who Cares?"は、スポークン・ワードからの流れで一気に駆け出すトリッキーなパンク・ロック!これにはヤられた。CRASS〜CHUMBAWAMBA好きはゼヒ!本作のリリース後には、昨年来日したフィンランドの1981とのスプリットも発表しています。

MUS31 THE SHITTY LIMITS/Beware The Limits (12")

MUS32 DESTINO FINAL/Atrapados (12")

MUS33 GOVERNMENT WARNING/
Paranoid Mess (12")
伝統あるUSHCの正統な後継者と評したくなるリッチモンドのスラッシュ・ハードコア・パンク・バンドの2ndアルバム。タイトな演奏だけど、ちゃんと遊びを感じさせるツボも押さえていて、よくあるサウンドだけれど凡百のそれとはレベルが決定的に違いました。メンバーのBrandon(vol.5に掲載)はGWの他にDIRECT CONTROLやSOUTHSIDE STRANGLERS、そしてNo Way Recordsを主宰したりと非常に多彩で多才な人。最近音沙汰ないけれど、今は何をやっているんでしょ?

MUS34 VOCO PROTESTA/
Vojo Al Libereco (12")

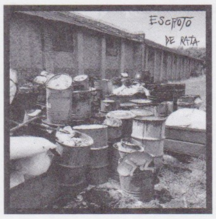
MUS35 GERIATRIC UNIT/Permethrin Blues (12")
ex HERESYのKalvとSteveが在籍するUKスラッシュ・ハードコア・バンドなわけですが、何せ"速い"。数値化できるスピードではなく、体感速度としてのこの速さは、やはり人間離れしたSteveのドラムのなせる業か。そして腹に響いてくるKalvのベース・ラインの格好良さ!2度の来日を果たしています。

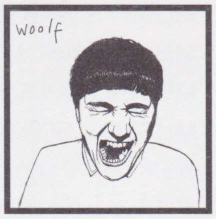
MUS36 THE WANKYS/
Weapons Of Musical Destruction 8

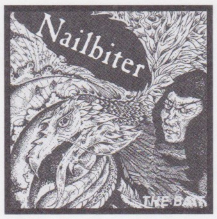


Photos by Fidel Gutiérrez

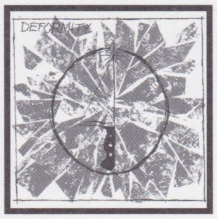
FIX ME / THE WANKYS / RAKTA / BARCELONA / E150




MUS59 MUS60



MUS61


MUS62

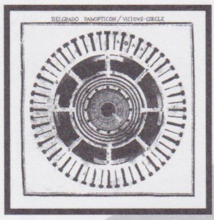

MUS63

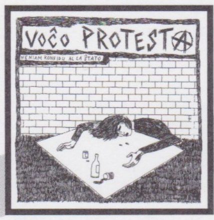


MUS64



MUS65


MUS66



MUS67



MUS68


MUS69


MUS70



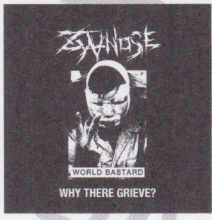
MUS71


MUS72



MUS73


MUS74



MUS75


MUS76


MUS77



MUS78

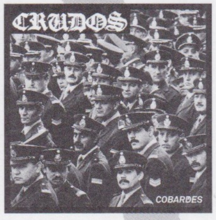


MUS79


MUS80



MUS81



MUS82

Inch Plus Wank – Mag (8" with Fanzine)
MUS37 FIX ME/
Ni Una Sola Puta Lágrima (12")
MUS38 HYGIENE/
Things That Dreams Are Made Of + Fixed Odds Betting Terminal (7")
MUS39 THE SHITTY LIMITS/Last Orders (7")
MUS40 GLAM/ST (7")
バルセロナのニューカマーによるデビューEP!プリミティヴなスパニッシュ・ハードコアとUKノイズコア勢が正面衝突した挙句、崖を転がり落ちながら爆発したような(?!)、四の五の言わずに喰らっとけ!サウンド。ノー・ガードでひたすら顔面を殴りつけてくる、狂気と狂乱のShort Sharp Shock劇場、全6曲入り。グレート!
MUS41 CRISIS/Hymns Of Faith (12")
スペインのCROSTA(vol.12に掲載)もフェイヴァリットに挙げるなど、現行のアナーコ・バンドからの支持も熱い、UKピース・パンクスの80年発表のLPの再発盤。独特のポップ・センスに彩られたアンニュイなパンク・ロック〜ポスト・パンクで、聴きこむ程に深みにはまるディープな一枚。解散後、メンバーはTHEATRE OF HATEなどへと発展していくことに。
MUS42 KRIEGSHÖG/ST (12")
新世代の東京クラスト/ハードコアを象徴する存在だったKRIEGSHÖGの1stアルバム。Blackenedなアプローチが強すぎた印象も発売当時はあったが、改めてデモ・テープから順繰りに聴き直してみると、音楽的な深化を追い求めた結果の当然の到達点に思えてきた。HG Factとの共同リリース。
MUS43 HYGIENE/Public Sector (12")
MUS44 THE ASTRONAUTS/
Peter Pan Hits The Suburbs (12")
MUS45 NAILBITER/
Faded Brain Age + Abused (12")
MUS46 COLLAPSE SOCIETY/
Demo 93 (12"/※実現せず)
MUS47 WARHEAD/
Acceleration + This World Of Confusion (7")
MUS48 THE SHITTY LIMITS/
Speculate + Accumulate (12")
MUS49 DISASTER/War Cry (12" with Flexi)
"DISCHARGEよりもDISCHARGEしている!"という名文句でもお馴染みの、英国Disコア・バンドDISASTER。その90年発表のLPの再発盤に、ボーナス・トラックを収録したソノシートが付属しているのが本作。数多のDisバンドと大きく異なるのが、やはりCalそっくりのヴォーカルと、あくまでもDISCHARGEに則し、決してDISCHARGEから逸脱しないという頑なな姿勢ではないでしょうか。安易な独自性なんていらんのです!
MUS50 SKANDALU!/Demo (7"/※未発売)
MUS51 ESCROTO DE RATA/
Punk Rock Sex Basura (12")
MUS52 INSERVIBLES/ST (12")
Vol.9にインタヴューを掲載した、メキシコNo1のキ印バンド。KBDパンクとクラスト・コアとブラック・メタルの乱交の如き怪電波が炸裂して頭が痛い…。無軌道なようでその実、異様に練り込まれている楽曲のクオリティも素晴らしく、当時、彼らを中心としたメキシコ勢の躍進には目を見張るものがありました。インタヴューで、ヴォーカルがあぶらだこをフェイヴァリットに挙げていたのも印象深かった。
MUS53 THE ASTRONAUTS/Survivors (12")
MUS54 BURIAL/
Naked Pigs + Warfare Orgasm (7")
MUS55 MAUSER/Isolation (12")
来日ツアーやD-CLONE、FOLKEIISとの3Wayスプリットもリリースしたフロリダのスカンジ・クラスト・バンドの7曲入り12インチ・シングル。語弊はあるが、非常に現代的な(作り込まれた)ロウ・サウンドで、昨今の米国地下で主流となりつつあるスタイルではないでしょうか。
MUS56 VIXENS/


MUS83

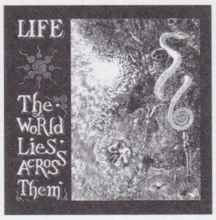


MUS84


MUS85



MUS86



MUS87


MUS88

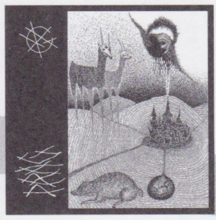


MUS89



MUS90


MUS91


MUS92

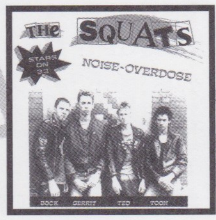

MUS93


MUS94

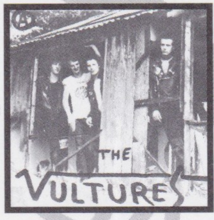

MUS95


MUS96

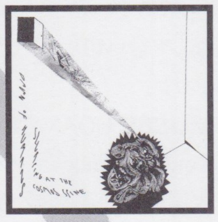

MUS97

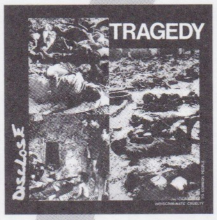


MUS98



MUS99


MUS100



MUS101


MUS102

Baptism Demo 2011 (Cassette Tape)

MUS57 ATENTADO/Dias De Rabia (12")

MUS58 GLAM/
Veneno En Sus Flechas (12")

MUS59 ESCROTO DE RATA/
Neber Main De Bollos (12")

MUS60 WOOLF/The Right Way To Play (12")

メンバーが全員女性のロンドン発のQueer(性的マイノリティ)パンク・バンド。CRASS及びその周辺を彷彿とさせるフリーキーなアナーコ・サウンドにヤラれてVol.12でインタヴューしてみました。音楽性のみならず、アートもメッセージも込みで刺激的な、今のロンドンを体現しているバンドの一つでしょう。恥ずかしながらこのバンドを通して、僕は初めてパンク/ハードコアにおけるQueerシーンの存在に気づかされたのでした。

MUS61 NAILBITER/The Bait (12")

16号のセンレコのコーナーで紹介したばかりですが、改めて。まずはヴォーカルの発声までジャパニーズ・ハードコアのソレなのが素晴らしい。安易な"ニッポンダイスキー"なアンチャンたちとは積み上げてきたキャリアが違います。泣きの旋律にメタリックなギターも盤石の、ドライヴィング・カミカゼ・ハードコアfromロンドン!ANTI CIMEXのカヴァー含む6曲入り。

MUS62 DEFORMITY/Shards (7")

STOOGESを聴いて頭がブッ飛んだ状態で弾いていそうなギターにまず耳が持っていかれますが、各パートがしのぎを削る軋轢がノイズ化しているかの、渾然一体のハード・パンクは唯一無二。限界突破のトラッシュ感に痺れます。画一的になりえない、種々雑多なNYCからこのバンドが生まれ出たのは宿命か。あ、本作は14号でもレヴューしていますね。

MUS63 ILEGAL/El Aire Libre Fuera De Los Dientes Del Monstruo Tirano Y Canibal (12")

Lengua ArmadaやTodo Destruidoなどからシングルのリリースもある、カナダ拠点のバンドのデビュー・アルバムがこちら。この手のバンドにしては長尺の曲も多く、ありがちなスパニッシュ・ロウ・ハードコアとは次元の異なる丁寧なソング・ライティングに魅了される。力強く捲し立てるスペイン語のヴォーカルは、不法移民としてカナダで暮らす現状についてを、訴えかけてくるのであった。

MUS64 ISTERISMO/Follia Verso L'Interno (12")

MUS65 INSERVIBLES/Una Vida De Tristeza (7")

MUS66 BELGRADO/
Panopticon + Vicious Circle (7")

パンク/ハードコア・シーンのメンバーが、ポスト・パンクへと進出/転向する昨今の世界的な動き。その起爆剤となった重要バンドの一つ



Photos by Ela Cambra Fosca

として、ex DESTINO FINALなどのメンバーを擁するバルセロナのBELGRADOが挙げられるはずです。冷然とした女性ヴォーカルとメランコリックな旋律、そして力強いリズムが合わさった無上のダーク/コールド・サウンド!

MUS67 VOCO PROTESTA/
Neniam Konfidu Al La Ŝtato (12")

MUS68 VIXENS/ST (12")
カナダのハスッパなネーチャン4人組による、やっぱりハスッパなデタラメ・ハードコア・パンク9発入り(2013年発表)。ほとんどが1分未満の出たとこ勝負!なアティテュードが勇ましくも格好良い!多分もうとっくに解散してて、"パンク?あー、面白かったわね!いい思い出よ!"なんて言い切りそうですが、そんな姿勢もまたヨロシ!

MUS69 HOAX/Caged + Sick Punk (7")
Youth Attackからのリリースも納得の、現代米国最凶の一角をなすマサチューセッツのバンドの両A面2曲入りEP。何せ音が悪い。音質の話しではなく音そのものが悪党。スタイルどうこうではなく、ただムカついているから(バンドを)ヤッている感がスゴイのです。インターネットで見られる彼らのライヴも必見(大抵、ヴォーカルが流血するか喧嘩している)。頭おかしいです(褒め言葉)。Vol.14の表2(表紙をめくった裏ページ)を飾って頂きました。

MUS70 UNA BESTIA INCONTROLABLE/
Observant Com El Mon Es Destrueix (12")

MUS71 FRAMTID/Under The Ashes (12")

MUS72 DHK/La Krudeza No Muere (12")
これぞ南米!なガビガビD-Beatロウ・パンクを放つペルーはリマのバンドの1st LP。お勉強したソレとは決定的に違う、天然無垢の破壊衝動が歪な騒音と化して鼓膜を襲う全13曲。Vol.14でBASEの南さんがオススメされていた一枚でもあります!

MUS73 FRAMTID/Defeat Of Civilization (12")

MUS74 FLESH WORLD/ST (12")

MUS75 ZYANOSE/Why There Grieve? (12")

MUS76 PUBLIC EXECUTION/ST (12")

MUS77 BELGRADO/Siglo XXI (12")

MUS78 ARCHAIC/Noise In Your Head (7")

MUS79 NEO-PUNKZ/Fascist Fuckerz (7")
オランダのNEO PUNKZが唯一残した、1980年発表の7インチを再発したのが本作。やろうとしたorやりたいことの6割5分くらいしか出来ていない、極上のスカスカ感が微笑みと哀愁を誘うガキ・パンク・ロックのマスターピース。ヘッポコ万歳!Young Punks Go For Itを地で行く永遠のポゴ・アンセム!

MUS80 SUSPENSE/Murder With The Axe (7")

MUS81 CRISIS/Kollectiv (12" x 2)

MUS82 LOS CRUDOS/Cobardes (7")

MUS83 JUANITA Y LOS FEOS/
Nueva Numancia (12")

MUS84 ORDEN MUNDIAL/
Obediencia Debida (12")
スペインのマヨルカ島(Vol.14で特集)を代表するバンドの一つ、ORDEN MUNDIALの10曲入り12インチ。全開(全壊)のテンションで突っ込んでくるスパニッシュ・ハードコアmeetsイタリアン/WRETCHED的なスピード・ナンバーがとにかく鮮烈。ギターが暴れ倒すカオティックなミディアム・ナンバー含め、現代最高峰のディストート・ハードコア!

MUS85 NOMAD/自殺(12")
遂にアメリカのバンドが日本語を使うようになったのか!と驚かされた一枚。NYC産のロウ・パンクで、サウンドもやっぱり日本のノイズ・コア/クラストを意識しているように感じられますが、とにかく日本語の歌唱が気になって仕方がない。何回聴いても"自殺"が"Discharge"に聴こえる不思議!This isチェーンソー・ノイズ空耳パンク!

MUS86 PRIMETIME/ST (7")

MUS87 LIFE/The World Lies Across Them (12")

MUS88 RAKTA/Tudo Que É Sólido (7")
ブラジル発のオール・フィーメル・ポスト・パンク・バンドの2曲入りシングルは、浮遊感と神秘性を感じさせる、どこか呪術めいた音作り。コイツと強いアルコール、あとは部屋を真っ暗にすれば気持ちよく脳内トリップできます。内容はもちろんのこと、凝った体裁のジャケットも併せて必携の仕上がり。

MUS89 CIUDAD LINEAL/El Nuevo Hombre (12")

MUS90 HANK WOOD AND THE HAMMERHEADS/Stay Home!! (12")

MUS91 HANK WOOD AND THE HAMMERHEADS/ST (7")

MUS92 PRAG/ST (7")
LVEUMのリリースとしては恐らく初となるオーストラリアのバンドで、HELTA SKELTAやNERVOUS TRENDのメンバーも在籍している模様。ハーシュ・ノイズなギターにやたらポップなベース・ライン、ドカドカのドラムに轢かれたカエルの如きヴォーカル(どんなだ?!)が合わさり、何とも形容しがたい異形の電波系パンク・サウンド!ジャケも何だかビョーキっぽくて音にピッタリ!

MUS93 RIXE/Coups Et Blessures (7")

MUS94 BARCELONA/
Extremo Nihilismo En Barcelona (12")
世界中のD-Beatマニアックスの度肝を抜いたFIRMEZA 10の女性ヴォーカルが前線復帰!良い意味でのゴミっぷり(酷い)が素晴らしかったFIRMEZA 10ですが、このバンドはしっかり進化している…のか?と疑問符がついてまわるプリミティヴさ。ちょっとは展開が凝っていますが、やっていることは不変の、ハードコアという名の騒音公害です!Bomba!!

MUS95 BLAZING EYE/ST (7")

MUS96 DISCLOSE/
Yesterday's Fairytale, Tomorrow's Nightmare (12")

MUS97 ANASAZI/Nasty Witch Rock (12")
今号の表紙を飾ったNuke Yorkダーク・ゴシック・パンク・バンド、待望の1stアルバム。CHRISTIAN DEATHがハードコア化したかの、妖しくも悍ましい音楽という名の暴力が渦巻く、真にコンセプチュアルな作品です。ブックレットやポスターといった"装飾品"も手抜かりなし。円盤が奏でる禁忌。そう、針を落とすことによって彼らの"儀式"は始まるのだ。

MUS98 THE SQUATS/Noise Overdose (7")

MUS99 THE VULTURES/ST (7")

MUS100 DAWN OF HUMANS/
Slurping At The Cosmos Spine (12")
めでたくLVEUMの100タイトル目を飾ったのがDOH、直訳すると"人類の夜明け"。ライヴ時には常に全裸でのたうち回っているヴォーカルの存在感も凄まじいが、音も素敵にトチ狂っています。予想不可能な変則と変速のパラレルに偏頭痛が止まらない。まさに熱を出して寝込んでいるときに見る悪夢そのままのSickハードコアfrom NYC!

MUS101 DISCLOSE/Tragedy (12")

MUS102 NO/Treating People Like They Don't Exist (12")





FILTHY HATE is Back!
Late 80's UK/ハードコア・ルネッサンスを体現する東京の5人組ステンチ・ハードコア・バンドFILTHY HATE。オリジナル・ギタリストであるLonely Old Manを除く全メンバーの脱退という苦難を乗り越え、現メンバーによって製作された『Mentality Parasite… Bloody Predator… "Rise Above Edition"』CDRがとにかく激烈且つ熾烈な仕上がりだ。雪崩れ込むブラスト・ビートに、メタリックなフレーズとメロディーの融合、そして無骨に攻め立てるヴォーカル&コーラス・ワーク。ハードコア/メタル/メロディックが三位一体となった、異端者たちによる真義のクロスオーヴァー・サウンドは聴く者全てを圧倒し、耳痛(earache)を引き起こす!
メンバーはChallenger Crew MU(Vo)、Lonely Old Man(Gu/ex.TANTRUM)、Fired Holy Thrasher(Gu/ex.AMPULHETA)、Hairstyle Of Emperor(Ba/ex.RETURN/ex.AGAINST THE GRAIN)、Deathcrush Camera(Dr/RETURN)。
スタジオ練習後、所用で欠席したMU以外のメンバーに話しを聞いた。 [6月7日 日高屋高田馬場店] PHOTO:西川裕也

■結成の頃から聞きたいので、(唯一のオリジナル・メンバーの)Lonelyさんにばかり話しを聞いちゃいますけど、結成って2009年か2010年くらい?

L「2009年に当時のベース(サトシ)と始めました。あの頃に俺がやっていたバンド(TANTRUM)では楽器をやっていなかったので、楽器を演奏するバンドがやりたいなと。それでサトシが"RIPCORDみたいなバンドをやりたい"って言っているらしいと聞いたので、これは誘うしかないって感じで始めたのがキッカケです」

■じゃあ、TANTRUMと並行して?

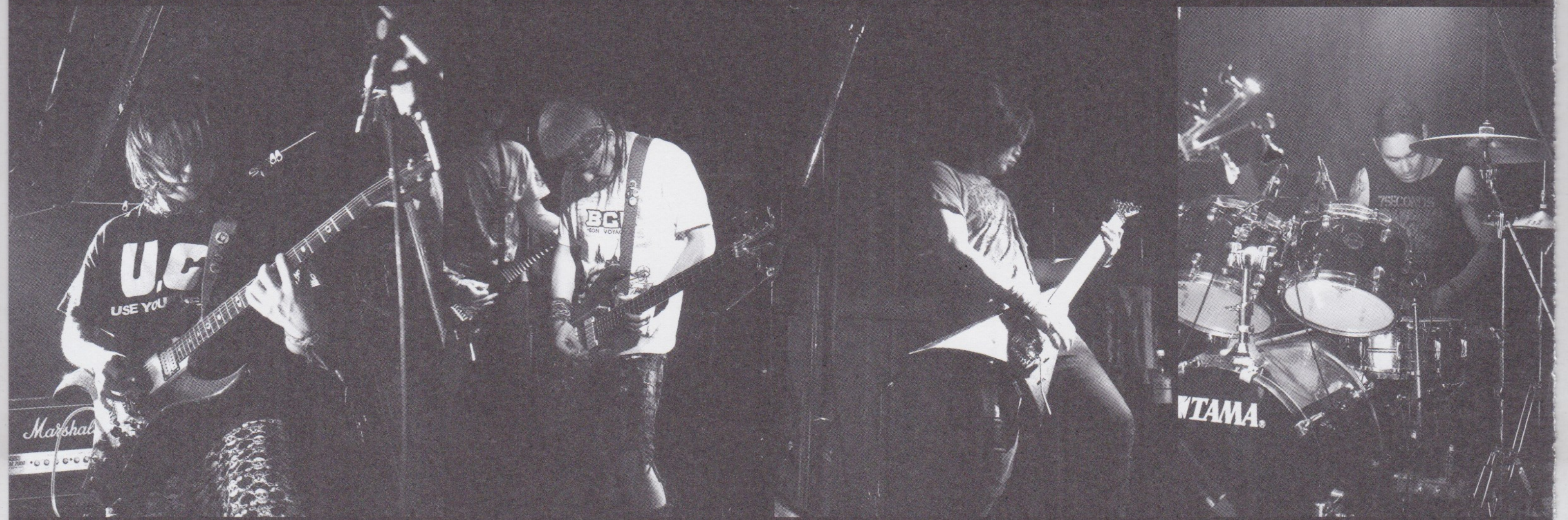
L「そうですね、サトシはISTERISMO(でヴォーカル)をやっているので、お互いに楽器をやりたいのが大きくて。その頃ちょうどDEATHTRIBEを辞めて暇していた周平(ドラム)に声をかけて、その3人で始めて」

■女性ヴォーカルが入ったのは?

L「それは全然あとで。最初に、LASTのギターで津山から出てきたばかりのノブをヴォーカルとして誘って入れまして、そのあとによくライヴにいた足立、今はRAW DISTRACTIONSでベースを弾いているんですけど、その足立をギターで入れて、ツイン・ギターの5人編成だったんですよ。それで、このバンドを始めるにあたって、元々自分たちがやっていたバンドの名前を出さずに、何の情報も出さないでまったくの新しいバンドとして聴いてもらいたかったんですよ。だから最初にライヴをやる前にデモ・テープを出したくて、ずっと練習だけをしていたんです。で、デモを作るにあたりCONCRETE SOXのイントロみたいな曲をやってみたくて。そのイントロには女の子の声が入っているので、それをやるために知り合いの女の子に"ちょっとやってみてくんない?"と頼んでみたんです。そしたら30秒もないパートなんですけど、毎週毎週熱心に練習に来るもので、メンバーも"バンドに入れてもいいんじゃない?"となって、加入することになった感じです」

■今、名前が挙がったRIPCORDとかCON

CRETE SOXっていうのは、誰のアイデアで?
L「最終的にはみんなですね。最初はRIPCORD的なものを目指すはずだったんですけどね。練習を始める際に何曲か持ち寄ってやってみたときに、サトシは結構RIPCORDっぽい曲を作れるんですけど、自分は同じような曲を沢山作れなくて、早々に"CONCRETE SOXみたいなのをやってみようかな?"ってなって。結果、色んな曲をやるようになったんです」
■それで、まずはカセット・テープをリリースして、そのあとに2枚組みのソノシート(「There Was Nothing In The Beginning...」)を。変わったフォーマットでしたよね。
L「ソノシートはEXIT HIPPIESですかね?最後に出したのは。それ以降はソノシートがなくなっちゃって(※2005年に東洋化成が日本国内でのソノシートの生産を終了し、この時点でソノシートの生産ができる業者がなくなった)。Late 80's UKのバンドってデモ・テープのあとの一発目にソノシートを出すバンドが多くて、例えばHERESYとか。それで、どうしてもソノシートを一枚目にもっていきたいというのがあって。ソノシートが作れなくなったあとも、"どこかで作れるんじゃないか?"と地道に探していたら、作れるところがあると友達から聞いて(※アメリカのプレス業者が2010年にソノシートの製造を開始した)。"これでソノシートが出せる!"と。ただ、その工場は片面しか収録できないタイプのソノシートで、それだと3曲くらいしか収録できずヴォリューム的にちょっと物足りないので、じゃあ2枚組みにしよう、と」
■普通に7インチのレコードにはしなかったわけですか。
L「どうしてもソノシートが良くて(笑)。ソノシートで出すことに意義があった、そのときは。自主でソノシートを出すのが夢でした(笑)」
■そのあとにMIDWAY STILLとのスプリット?あれはEmperorさんのレーベル(BREAK THE CONNECTION)からでしたね。
L「彼がメンバーになる前ですね、出してくれて」
E「最初のデモ・テープの頃とか、Lonelyが(FILTHY HATEを)やっていたなんて知らなくて。そのデモはYu君(SKIZOPHRENIA)のVox Populiに最初に入荷していたんだけど、そこで"Late 80's UKスタイルで、メンバーは云々〜"て書かれていたから速攻で注文したの。で、実際に手にしたら"お前(Lonely)じゃねぇかよ!"ってなって」
■"お前じゃねぇかよ!"って…(笑)。
E「それがFILTHY HATEを知った最初。一発目のドムスタ(高円寺DOMスタジオ)のライヴも行ったし、そのあとのKRIEGSHÖG企画のEarthdomでのライヴも行って。で、ちょうどまたMIDWAY STILLが来日することになって、"一緒にやったら面白いかな"と思って。LonelyはMIDWAY STILLを好きだったし、UKのバンドには、ハードコアもメロディックもごちゃ混ぜの時代があったから、Late 80's UKにこだわっているなら、それを体現したら面白いだろうと。それであのスプリットを出すことに」
L「Late 80's UKが好きな人、NAPALM DEATHとかHERESYとか好きな人はまわりにいっぱいいるんですけど、MEGA CITY FOURとかSNUFFとか、(NAPALM DEATHやHERESYと)同世代のメロディックなバンドが好きな人って、好きだけどあんまり(自分たちのバンド)活動と混ぜないというか。自分は両方好きだから、そんなバンドが来るんなら一緒にやりたいし、誘ってもらえて嬉しいから、やってみようと。一回目にMIDWAY STILLが来たときスゲーライヴが良くて、当時のメンバーはあんまりMIDWAY STILLとか知らなかったと思うんですけど、対バンしたら"格好良いじゃん!"ってなって、2回目の来日のときにスプリットを」
■FILTHY HATEとMIDWAY STILLでお互いの曲をカヴァーしていましたよね。
L「MIDWAY STILLの曲は難しすぎて自分には弾けなかったんですけど、一曲だけ格好良くて簡単な曲があったんですよ。それならカヴァーできるなと思って。MIDWAY STILLが自分たちの曲をカヴァーするなんて想像もできなかったですけど、サトシが作った"Various Cultures"て曲をカヴァーしてくれて、そのアドバンスを聴いたときに、あいつの中で火が着いて"これが本当のカヴァーだよ"ってびっくりしてましたね。元々リフ主体の曲でメロディーが全くない曲に歌メロがついて、メンバー全員度肝抜かれて。"俺たちももっと頑張らないと!"って。リフを改造して原曲から変えていって、その作業は楽しかったですね」
E「原曲を崩していたんだよ。コード進行だけは残していたけど。それをやってきたのがMIDWAY STILLで。FILTHY HATEは先に録っていたんだけど、それを聴いてから完全に変えてきて」
L「MIDWAY STILLがMY BLOODY VALENTINEのカヴァーとかしているから、自分たちは逆にハードコアがシューゲイザー的なアプローチでカヴァーしてみたらどうかなと」
■それからADA MAX、CONSOCIO SENTENCIAとの3 WAYスプリット。あれも変わった作りで。
L「あれはレーベル、Awesome Mosh Powerが提案してくれて、すごい珍しいと思うんですけど、サイズありきではなくて、収録時間ありきでああなったんです(8.93インチのアナログ盤)。収録時間がA面B面合わせて何分で、それを45回転で、一番良い音で再生できる仕様として、あの形になったんです」
■すごいやりかたですね。
L「感謝しかないですけど、相当お金がかかっていると思います(笑)」
■そのあとに女性ヴォーカルが抜けて。
L「家庭の事情とか、忙しいというのもあって。バンドを続けるのは厳しいと、抜けちゃったんですけど、それは仕方がないことで」





■その時点でメンバーは4人?

L「5人ですね」

■その5人で新たにカセット・テープを(「Possessed To Satan」)。

L「5人になってしまったときに、パワー・ダウンしたとは思われたくなかったんですよね。女ヴォーカルがなくても成立する曲と言いますか、男だけで攻める曲をイメージして、何曲か作って。ダークで太い声のほうが格好良い曲を増やすことによって、パワー・ダウンしたと思われないような曲を敢えて増やしました」

■そのカセットのあとに、Lonelyさん以外が全員脱退?

L「そうですね、カセットを出してライヴを何回かやったりしていたんですけど。話しは戻るんですが、最初は"RIPCORDみたいなのがやりたい"というのがあったのに、自分はそういう曲が作れない。で、サトシは作れるんですけど、自分とサトシしか曲を作らない中で、どうしても自分が色んなバンドが好きなせいで曲調があまりにもバラバラになるんですよね。メンバーは多分、それがイヤだったというのもあるでしょうし、あとはメンバーが他のバンドをやっていたこともあって、自然な流れで"辞めたい"と。まぁ他にも理由はあると思いますが、ただ自分は最初から"辞めたくなったら言ってくれ"と伝えていたので、喧嘩別れではなく、"今までありがとね"と」

■それでサンクス欄にも、"EX.FILTHY HATE MEMBERS"とあるわけですね。

L「今でも仲良いし、ライヴも一緒にやりますよ」

■独りになったとき心は折れなかったですか?

L「不思議と全くなかったですね。メンバーが辞めたいと話してきたときに一番最初に言ったのは、"辞めるのはいいけど、FILTHY HATEという名前と、みんなで作った楽曲を自分は気に入っているから、それを俺が好きにしていいなら、辞めてもらっても構わない"と言ったら、"いいです"と言ってくれたので。みんなで作った曲を新しいメンバーで更にパワー・アップさせたいと思いました」

■独り期間はどれくらい?

L「長かったですね。再始動するまでに1年と4ヵ月くらい。メンバーを探すところからスタートしたので」

■どういう順番で今のメンバーは入ったんですか?

L「まず、自分の中ではドラムが一番見つからないと思ったんですよ、プレイヤーが少ないので。それでTANTRUMでも手伝ってくれた人がいるんですけど、まず彼に声をかけてみました。そのあとにベースでEmperorに声をかけたんですけど、Emperorが"彼のドラムのサウンドはFILTHY HATEに合わないんじゃないか?"と言い出して(笑)。たしかに、"2バスとかメタル的なドラム・プレイとかはできるのかな?"と、それは俺もちょっと思いましてDeath crushに頼むことにしました。彼は完全にメタルの人だと思っていたらハードコアも好きで、二つ返事で引き受けてくれました。で、とりあえず3人でスタジオに入って、バックを固める練習をしていきながら、ヴォーカルともう一人のギターを探そうということになりました。ただ、一番の問題はうちをやりだしたらEmperorのRETURNへのテンションが落ちてしまいまして(笑)。RETURNに迷惑をかけてしまい申し訳ないことをしたと思っています…」

D「FILTHY HATEに入ったら覚えることがいっぱいで、RETURNではやらなかった手数の多さ、ブラストとか。FILTHY HATEで色々学ばせてもらってます」

E「FILTHY HATEに入るの一発でOKしたもんね」

D「ハードコアをやりたかったので。7 SECONDSをLonelyさんに教えてもらってハマったり」

L「メタルっぽいハードコアじゃなくて、純然たるハードコアが好きなようで、7 SECONDSとかUNITYみたいなシンプルなハードコアに一番反応していたのはびっくりした」

D「LIFE SENTENCEとかも。キャッチーでストレートなハードコアが格好良いなって」

L「今のメンバーを見ていて、メタルを聴いてた人がハードコアを格好良いと思ってくれるんだなと分かったので、我々もハードコアが好きな人の前だけで演奏するのではなく、メタルな人たちの前とかでもやって、垣根を越えて活動したいなと思いました。"ハードコア・パンクでもこんなのがいるんだな"って思ってくれる人がいれば嬉しいですね」

D「メタル・シーンの人にFILTHY HATEを見てもらいたいですね。ハードコアの良さってキャッチーなノリだと思っているので。聴かず嫌いな人もいるから、メタルのメンバーがいることによって、メタルの人たちもライヴに来てもらって」

■ちなみに、ヴォーカルのかたはバンド経験がない?

L「まったくのゼロです。彼は僕が遊びに行っているところで出会ったんですけど、たまたまFUCK ON THE BEACHのライヴを一緒に見に行くことになって。彼は(ハードコアのライヴを)見たことがなかったと思うんですけど、いきなり荷物を投げ捨ててピットに飛び込んでいく姿を見て、"こいつならいけるかもしれない"と思って。ハードコアを知らない人が、感覚と衝動だけでやることによって生まれる可能性というんですかね。それが欲しいかなというのもあって」

■ハードコアを知らずに、よくFUCK ON THE BEACHのライヴに行きましたね。

L「たまたま友達が誘ってくれたので、遊びに行こうと。それで見に行ったら、"もう我慢できない!"と暴れだしたので、"こいつ馬鹿だ"と(笑)。Firedのことは昔から知ってて、ずっと誘っていたんですけど、彼は彼でブラック・メタルのバンド(AMPULHETA)をやっていたので、"FILTHY HATEよりブラック・メタルをやりたい"と断られて」

F「ブラック・メタル・バンドをメインにやりたかったので。"サポートでもいい"と言われたんですけど、もう色々音源を出しているバンドだから、ちょい入りでやるのはいけないなと思って。FILTHY HATEの音源はもらって好きで聴いていたんで、やりたい気持ちはあったんですけど、中途半端にはできないので。メインのバンドに専念しようとずっと断っていたんです」

L「そうこうしているうちにFILTHY HATEは



現在のメンバーが一応揃って音源(「Mentality Parasite... Bloody Predator」CDR/カセット)を録音して、ライヴもやって、Firedも見に来てくれてましたね。ただ最初の「Mentality Parasite...」は、その時できることをやったと思うのでダメではないんですが、自分的にギターが物足りないと感じていまして…。それで、(Firedに)3度目か4度目になるお願いをしたところ…」

F「とりあえず一回スタジオに入ってみようと。自分のバンドも伸び悩んでいたと言うか…」

L「(笑)」

F「一回FILTHY HATEでスタジオに入って、楽しかったんです。その帰りにEmperorさんに説得されたので、"本気でやってみよう!"と入った瞬間に、メインのブラック・メタル・バンドからクビにされて」

一同「(爆笑)」

F「ちょうどいいや、と」

E「俺も前からFiredは知っていたけど、(Lonelyが誘っても)断られていたから、"どうせ断るから止めたほうがいい!"と言って、それで一回もめたのよ」

■LonelyさんとEmperorさんで?

L「俺がFiredに何度もお願いするから、Emperorが怒って」

E「メンバーにならないんだから、"Firedはもう誘うな!"ってもめて」

L「でもEmperorはヘルプ扱いなんですけどね(笑)。散々文句言っていたのに、いざFiredとスタジオに入ったら一番嬉しそうな顔して演奏してて笑いました (笑)」

E「音を出してみたら、Firedはちゃんと分かってて。練習してきていたから」

L「Emperorは人を見る目がないんですよ、これは必ず太字で書いてください(笑)」

■Firedさんはハードコアは好きだったんですか?

F「全然。ベタなIRON MAIDENとか、メタルばっかり聴いていたので。メタルっ気のあるハードコアは好きだったんですけど、FILTHY HATEに入ってから色々教えてもらって。"この曲にはこういう要素が入っている"とか」

L「Firedはメタル好きとして知り合って。当時はEmperorも"俺はメタルだから!"みたいな感じで、目の周りを黒く塗ったりしてて(笑)。元々Firedとは、とあるライヴを見に行ったときに後ろを振り返ったらAXEGRINDERのTシャツを着ている人(Fired)がいて、ビックリして話しかけて仲良くなって。バンドTシャツのいいところですよね。"このあと何するの?"って聞いたら、"RETURNのライヴを見に行く"って。"そのバンド俺の友達だよ!?"と。そうやって知り合ったんですよ。それはともかくEmperorはメタルの人だって書いておいてください(笑)」

■(笑)。Firedさんの加入が大きかったからこそ、もう一度新しいヴァージョンで出そうと(※「Mentality Parasite... Bloody Predator」を"Rise Above Edition"として新たに録り直して発売した)。

L「Late 80's UKのバンドにはメタル・テイストを取り入れたバンドが多かったと思うんですけど、メタル奏法ができる人が今までのメンバーにいなかったので。自分が思い描いていた音が、彼の加入によってできるようになりました。「Mentality Parasite...」をリリースした直後の加入で、その後しばらく音源制作の予定もないので、彼が弾いていないデモ音源をこの先売る意味がないんじゃないかと。だったら、もう一度録り直して彼も弾いている音源を売ったほうが、ライヴを見に来てくれる人とか、音源を買ってくれる人にとってもいいんじゃないかと思いました。だから、お金がかかろうがもう一回やり直そうと」

E「もう一人ギターが入ってやりたかったことがあって。彼が入る前にFILTHY HATEの復活ギグをLOW CARD de la morteが名古屋でやってくれたのね。そのときにDEATH DUST EXTRACTORが出る予定だったんだけど、解散しちゃったからMASSGRAVEが出たの。で、MASSGRAVEにDEATH DUST EXTRACTORをやっていたシンスケがギターで入って、アームを使うギターをやっていたのよ。Lonelyも前からアームを使ったメタリックなギターをやりたがっていたのに、先にやられちゃったから、それも刺激になったね」

L「先を越されたけど、音でお互いに影響を与え合うというのは一番楽しいと思うから良いね。地方にもそういう格好良いバンドがたくさんいるから、ライヴとか音源を聴いて、"俺ももっと頑張ろう"と思える」

■最近はどんなバンドから刺激を?

L「やっぱりLOW CARD de la morteとかDEATH DUST EXTRACTORはいつ聴いても格好良いし作りこみが凄いなと思いますね。CHAOTIXとDEATH DUST EXTRACTOR、あとCONSOCIO SENTENCIA、あの辺のLate 80's UK好きなバンドを集めてオムニバスを作りたいと思っていたんです。ただ、我々が復帰したタイミングで今度はCHAOTIXとDEATH DUST EXTRACTORが止まってしまって、計画は頓挫してしまったんですけど。各メンバーは新たにバンドをやっているみたいなので、彼らが前線復帰したらまた一緒に何かやりたいところです」

■曲についても聞きたいのですが、結構タイトルが分かりやすいというか。ELECTRO HIPPIESやHERESYっぽいのが。これはバンドへの愛情からですか?

L「愛情プラス、やっぱりみんなが言いたいことは同じなんじゃないでしょうか。自分もそうですけど、ユニティを大切にしたりとか。"I Am Punk Yet"に関して言うと、ELECTRO HIPPIESは"Am I Punk Yet?"で皮肉を込めていますけど、それに対する(更なる)皮肉ですよね、"俺達はまだパンクだよ"っていう。Late 80's UKバンドのイメージを大切にしながら、自分たちなりの歌詞を考えてるつもりです。あと、元々このバンドを始めるにあたって、キャッチーなのをやりたかったんですよね。タイトルがそのままコーラス部分にきて、曲名をみんなに覚えてもらえる、それでシンガロングできるやつを。"あの曲いいよね"じゃなくて、すぐにタイトルがパッと出るような」

■"Terror Home"って曲はファミコンみたいな音ですが。

L「ファミコンです(笑)。ファミコンのチープな

音が好きなんです」

■アートワークもその頃のホラーとかSFっぽくて。

L「やっぱり好きですね」

■PEGGIO PUNX(のジャケット)もアートワークで使っていますね。

L「これはPEGGIO PUNXなんですけど、Late 80's UKのバンドとかノルウェーのSO MUCH HATEとかが、"Voice Your Opinion"っていうデザインをパーカーとかパッチにして身につけているんですよ。それのパロディですね。"Voice Your Opinion"で、"お前たちの意見を言え"なんですけど、FILTHY HATEは"Voice Our Opinion"で"俺たちの意見を言う"。あとはUNSEEN TERRORの曲でも"Voice Your Opinion"というのがあって、楽曲的にはUNSEEN TERRORへのオマージュです」

■あと、Bat Man Recordsというのは自主レーベルですか?

L「元々FILTHY HATEの音源を出すときに、"レーベル名が欲しいよね"って話しになって。その当時、周平が痩せてるから皆に骨って言われてて(笑)、そこから黄金バット→Bat Man Records。アメコミのバットマンじゃないんですよ(笑)。それで何作か出してて、FILTHY HATEだけ出しているうちは良かったんですけど、RAW DISTRACTIONSとかISTERISMOも自主のデモをBat Man Recordsの名義で出してたら、レコード屋の人から周平のところに連絡が来て、"うちには入荷していないんですけど何でですか?!"と色々問題が起きて。それはそれで謎で良いと思うんですけど(笑)。仲間内で名前を使っているだけだから、実態がなくて、"誰々がレーベル・オーナー"とかないんですよ。バンドごとに制作してます」

E「要約すると、ボストンのXClaim Recordsみたいに、"誰が名前を使ってもいいよ"っていうレーベル」

■ちなみに3月には沖縄でライヴもされましたが、あれはヴォーカル(沖縄出身)の縁で?

E「あいつが実家に帰ってて、"どうせなら沖縄でライヴができたらな"っていうのがあって。それでSOW THREATのハチマン君を俺が知っていたから、頼んでみたらやってもらえることになって。で、一発だけよりは…っていうのがあったから、Lonelyのツテでライヴハウスをやっている人がいて」

L「我如古ファンクラブっていう、ファンクのバンドのヴォーカルさんがライヴハウス運営をしていて、その人とたまたま仲良くなって、"今度沖縄でライヴするんですよ"って言ったら、"(沖縄に着いた)当日は何かやるんですか?"って聞かれて、"何もないです"と言ったら、"じゃあうち空いているんでやりませんか?県外のバンドだからお金とかいいんで"って言って頂いて。それで2DAYSできました」

E「沖縄だけど、場所によって雰囲気も違ったし。2日目は(SOW THREAT企画だから)パンクだったし、初日もパンクだけど違う雰囲気で」

■初日はどんなバンドと?

E「スラッシュ(ハードコア)・バンドでBIRDHELMS。なかなかスラッシュとやる機会もなくなっていたから刺激になったね。TOMORROWとかNICE VIEWが全盛の頃って東京でも色んなバンドが一緒にやっていたけど、最近そういう機会が都内だとなくなってきているように思えて。なんで余計に楽しかった」

■Emperorさんは昔から"ジャンルの壁をぶち壊すぜ!"みたいなことを…。

E「言ってねぇだろ!」

L「言っているけど一番壁を作るから(笑)。壁作り職人だよ(笑)」

E「来週はSKIMMERが来日するんだけど、メロディック・バンドしかいない中でFILTHY HATEを誘ってもらえたのはやりがいがあるよね(※対バンはSKIMMER、NAVEL、MIDDLE、THE HUM HUMS、falls、SHIPYARDS)。"それって知り合いだからでしょ"って言われたりもするけど、やるかやらないかはバンド次第だし、ハードコアの連中に"やってよ"と言っても、まず躊躇されると思うし。それでどんどん内輪になっているのかは分からないけど」

■けどFILTHY HATEもメロディーはありますよね。ただ、それを一言で"メロディアスですね"とは言い難い、何とも言えない独特さが。

L「歌メロじゃなくて、ギターとかベースのフレーズでメロディアスな感じにしているからですかね。リフのコード数が多いので、それがメロディー的な感じになっているのかな?」

F「Lonelyさんが作る曲は、曲の中に一つは覚えやすいフレーズを入れるというか、メロディアスでもないんですけど、ポップになるというか」

E「前のノブのヴォーカルも良かったんだけど、新しいヴォーカルになって、全く彼はハードコアを知らないから、ライヴを経験して、彼なりに色んなバンドを研究して、声色を変えてやっているのが新しいFILTHY HATEの強みじゃないかな。"こうやったほうが良いんじゃない?"なんて指示もしないし。例えば、EXIT CONDITIONバリの曲を今回やっているから、"あぁ!"ってなる人もいると思う」

L「俺は曲単位でサウンドを考えているから、"全曲メロディックに"とかは考えてないですね。そんな曲の時もあるって感じです。ただ、ヴォーカルは絶叫ではなく、歌詞が聞こえるように歌ってくれとは言ってますね。歌詞カードを追っていけば分かるくらいの感じで」

E「新しいヴォーカルは大学生で英文科の専攻だから、わりと発音がちゃんとできるのも大きいかなと」

■結構このバンドは年齢差が大きい?

L「俺とEmperorが同い年で、ヴォーカルとは15歳くらい?もっと違うか。他のメンバーとも7、8歳違います。年は結構離れていますが、特に何もないですね。皆バカなので(笑)」

■最初に聴いたバンドって何です?

L「激しいやつだとNAPALM DEATH。Toy's Factoryが出してたやつを、中学の友達が持っていて、中一のときですね。聴く前からビックリして。何十曲と入っていたから(笑)」

E「俺は大学入ってから。高校のときはずっとBEATLESだったし」

■B'zって言ってなかったっけ?

E「よく覚えてるな(笑)。それは中学のときだわ!B'z→ユニコーン→BEATLES」

L「(Emperorの故郷には)ディスクユニオンもないし、ドールも売ってなかっただろ(笑)」

F「僕はX JAPANから入って、HELLOWEENで、そのあとにアンダーグラウンドなメタルへ」

■見事にバラバラですね。

L「音楽の趣味が合うかより人間性が大切で。一緒にやっていく上で、ハードコアの知識はなくても、"こんなのあるんですね!"って興味持ってレコード買ったり、色々研究してくれたほうが楽しいですね。よりエクストリームなことを!ってのがハードコアかなと個人的に思っています。未知の部分に突っ込んでいく、その探究心とかをメンバーと共有できるのが大切だと思います」

■では、バンドの今後の予定を。

L「前のデモ「Possessed To Satan」と今回のデモ(「Mentality Parasite... Bloody Predator... "Rise Above Edition"」)をカップリングしたカセット・テープがアメリカのレーベルから出る予定があって。あとは、年内にできれば単独のEPか、良いバンドがいれば3WAYか2 WAYができれば。あと企画をやります。10月18日に秋葉原の音楽館で昼12時から沖縄のSOW THREAT、仙台のCONSOCIO SENTENCIA、登戸の新しいバンド、POSSESSIONを呼んで4バンドでやります」



THE RUSTED

THE SICKのメンバーを中心に結成された津山発のパンク・ロック・バンド、THE RUSTED。彼らがリリースした1stシングルCD「Från den mörka hålan」が痺れる格好良さで実にスバラシイ。津山パンク/ハードコア・コンピ「Get Back Our Future」収録曲より更なる躍進を遂げた北欧直下型サウンドは、Umea〜スウェーデンの現行のパンク・ロック・バンドを追い求めている人のハートを間違いなく撃ち抜くことだろう。そんなわけでCDを購入後、帰宅してビール片手に再生し、5分後には"インタヴューしなくちゃ!"と、見事ハートを蜂の巣にされたワタシは、ギター・ヴォーカルのTatsukiさんに、メールで複数回に渡り質問をぶつけてみたのでした!

■まずはTHE RUSTED結成の経緯を聞かせてください。いつ、どんな風にして始まったのでしょう?ベースのTakuyaさん以外はex THE SICKですか?

「はい、Takuya以外は元THE SICKですね。THE SICKが解散後、寂しかったので、ちょうど目の前にいた彼を捕まえてバンドやろうぜーって誘いました。その流れでドラムのHanaを捕まえ、とりあえず3人でバンドをスタートさせました。はっきり覚えてないのですが3〜4年前だと思います(笑)」

■結成当時の音楽性としては、THE VICIOUS〜MASSHYSTERIというのは念頭にあったのでしょうか?それとも結成当時は全く別のスタイルでしたか?

「正直、全く考えてなかったです。ただ漠然とした考えで組んだので(笑)。70'sパンクなんてやりたいねーなんて言って、日本語歌詞の曲を作ったりSHOCKのカヴァーしたりいろいろやってみたんですが、いまいちしっくりこなかったんです。である日、これじゃダメだってなって持ち曲を全部捨てて、ただ好きだからという理由でTHE VICIOUSをイメージした曲を作ったら、面白いぐらいスラスラとイメージが湧いたんです。それから3人でTHE VICIOUSイメージなバンドとして1年半ぐらい活動してたんですが、途中からどうしてもMASSHYSTERIみたいな曲が作りたい、どうしてももう1人ギターが欲しいと思うようになってex THE SICK、ex THE GOのMoriにお願いして加入してもらいました。そこから





今のスタイルになってきました」

■THE RUSTEDのロゴ・デザインを見ると、とてもTHE VICIOUSな感じがするのですが、MASSHYSTERIよりもTHE VICIOUSが好きだったりしますか?THE VICIOUSの音の方が尖っていますし、MASSHYSTERIの後期はサーフの要素も濃くなってきたので、そこが苦手な人もいたように思います。

「3人編成の時はTHE VICIOUSだけをイメージして作ってましたが、今はTHE VICIOUS、MASSHYSTERI両方、それに他にもいろんなバンドをイメージして曲作りをしてるので"どちらが"ってのはないですね。僕自身はMASSHYSTERIは初期も後期も大好きですよ。バンド・ロゴに関しては、文字数的にちょうど良かったって理由です(笑)」

■"他にもいろんなバンドをイメージして"というと、具体的にはどんなバンドが挙げられますか?

「他には、これもスウェーデンですがALLVARET。あとはパンク?の括りとは違うかもですがMAKTHAVERSKANですね。必死に甲高く声を張り上げて歌うバンドが好きなので、女性ヴォーカルのバンドが多いですね。比べるのもおかしな話ですが僕は声も高い方ではないので、そういうのに対する憧れもあるのかな?って思ってます。男性ヴォーカルのバンドですとREFUSEDのDennisさんがやってるINVSNなんかも好きですね。あとアメリカのGENERACION SUICIDA。あのがむしゃらな感じが"自分達と近い匂いがする"と勝手に感じてます(笑)。参考とか関係なくただ好きなバンドの話しになってますね。すみません(笑)」

■ちなみに、これまでの音源としては、デモCDRとVA「Get Back Our Future」、それに「Från den mörka hålan」になりますか?デモCDRは聴いたことがないのですが、どんな内容なのでしょうか?

「一発録りの4曲入りです。ほぼ初期衝動のみで録音に挑んだので、かなり雑で荒いですね。出した後に、もっと丁寧に作ればよかったと少し後悔してます(笑)」

■VA「Get Back Our Future」に収録されている2曲だとまだ荒々しくて、THE VICIOUS〜MASSHYSTERIの影響が色濃く出ている印象があったのです。でも「Från den mörka hålan」を聴いたらすごく完成度が高くなっていて、影響を消化した上で、THE RUSTEDの音楽スタイルが確立されているように思いました。VAのレコーディング時と、「Från den mörka hålan」のレコーディング時とでは、バンドとしての意識の違いなんてありましたか?

「ありがとうございます。これに関しては、THE VICIOUSやMASSHYSTERIの他にVÅNNA INGETやTERRIBLE FEELINGS等、いろんなバンドを参考にして作曲、音作り等したからかな?と思ってます。"THE RUSTEDの音楽スタイルが確立"と言って頂いて恐縮なのですが、"ここはこう言う風にしたらよかったな"とか、"この曲はまだまだ工夫できたな"とか、思う所がまだたくさんあるので"確立"と言うにはまだ早いかな?と思ってます。まだ3〜4年そこらのキャリアも浅いペーペーのバンドなので(笑)。手応えというか、感じることは本当に多いのでこれから更にいい方向へ変化できればと思ってます」

■では、「Från den mörka hålan」をリリースしてみて、どんな手応えだったり、逆に改善点などを感じましたか?

「色々な所から声を掛けてもらったりライヴに誘ってもらったりしてるので、やはりそういう意味での手応えは感じてます。素直に嬉しいですね。改善点は、一曲一曲が少しくどいかな?と感じたので今後はパンク・バンドらしくもう少しタイトにしようと思ってます(笑)。あと実は今回の音源ですが、当初の予定では"4曲入りのepで出そう"って話しだったんです。ところが、"最初は絶対アナログがいいよね"って話してたのにいざ4曲出来上がってみると、収録分数が全然足りないことに気づいたんです。それで急遽CDに変更。CDに変更するならもう一曲増やそうってことで今回の5曲入りCDになったんです。なので今は、ちゃんとメディア側の都合も考えて作曲することも心がけてます(笑)」

■タイトル及び1曲目の「Från den mörka hålan」、調べてみたら"From the dark dungeon"という意味らしいのですが…、合ってますか?どんな意味を込めてこのタイトル

にしたのでしょうか?また、歌詞はどんなことを主に歌われていますか?THE SICKのときは日本語詞の曲もありましたが、THE RUSTEDではスウェーデン語一本でいこう!という感じですか?

「まず最初の曲の"Från den mörka hålan"ですが、直訳で"暗い地下牢から"です。

"壁を叩いても
いくら叫んでも
暗い地下牢からは誰にも聞こえない"

と歌っています。歌詞中に地域や年代などをはっきり明記してるわけではないですが、19世紀、黒人の農奴を酷使して奴隷反乱にあい自分の屋敷の地下牢に幽閉されてしまうある農場主の、自業自得とは言え悲痛な叫びを曲にしています。他の曲もだいたいこんな感じで、家も財産もなくしたけど本人は何の努力もせずに救いの手を待つだけの弱者の愚痴だとか、自らの傲慢や怠惰が元で不幸を招く話だとか救いようのない暗い歌詞が多いですね…。次からはもう少し明るい歌詞も作るようにします(笑)。次にスウェーデン語の歌詞に関してですが、しばらくはこのままスウェーデン語で頑張っていこうと思ってます」

■そういう内容の歌詞だったとは驚きました。そんな視点の歌詞、着眼点も面白いと思うのですが、何かバックグラウンドになっているものってありますか?音楽や本、もしくは映画だったりとか。

「バックグラウンドと言われると少し難しいですが多分、映画が多いと思います。映画の中だと、最終的に不幸になる奴はだいたい本人に原因があるのでそこを歌詞にしてみようと」

■「Från den mörka hålan」のアートワークはメンバーさん自身によるものですか?テーマなどありましたら聞かせてください。やはりスウェーデン～北欧的な、雰囲気のあるアートワークですね。

「ありがとうございます。廃退的でどこかコミカルな、というイメージで作りました。もともと写真を編集して画像を作ったりするのが好きなので、自分達のバンドのジャケを作るのは楽しかったです」

■「Från den mörka hålan」の海外への流通や、海外のレーベル/バンドとコンタクトをとったりはされていますか?

「今の所全く何もしてないですね(笑)」

■これまでにもファンジンなどで、幾度となく津山のシーンは取り上げられていますが、2015年の現在、シーンに対してはどういった感情や印象をお持ちですか?

「僕が高校生の頃、初めて津山K2にパンクのライヴを見に行ってからだいたい11～2年。上下関係もへったくれもなく、DJブースで大合唱してたり、嬉しそうに地べたに座って皆でワイワイしてたり、やたら腕の立つ料理人がいたり、それでいてライヴは各々のバンドが本当に真剣にやってるこの感じが、ずっと変わらないなと思います。人やバンドは減ったり増えたりしてるんですが、この雰囲気だけは本当に変わらないなと。僕らは津山バンドの中では一応若手になるんですが、彼らがというか先頭に立って活躍してる先輩バンド達が変わらずいてくれてるから僕らも好き勝手に楽しくバンドができるっていうのはあるなと、ここ最近実感してます(笑)」

■今後の予定や抱負などありましたら聞かせてください。

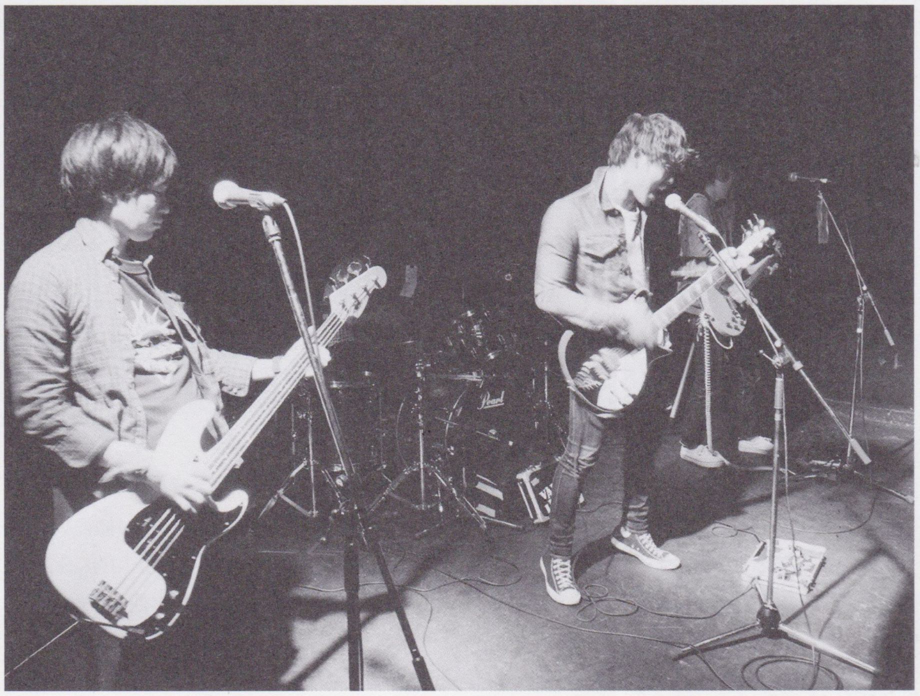
「Overthrow Recordsさんに声を掛けて頂いて、リリースに向けて着々と準備を進めてる所です。まだ偉そうに言える程形になってはいませんが、多分良いものが出来ると思ってます」

■えー、Overthrowからですか?!たしかにモーリーは最近MASSHYSTERIや、ex MASSHYSTERIのRobertがやっているHURULAとかも聴いているって言っていましたが…。連絡があったとき、正直どう思いましたか?"話しが無駄に長いなぁ"とか、やはり思われましたか(笑)?あと、どんな形でのリリースか(7インチで何曲入りなど)、決まっていることがありましたら教えてください。

「ただただ驚きましたね。"Overthrowて名盤ばっかりじゃん、そこに並ぶの?"って(笑)。森下さんとは電話でやりとりしてて色んなバンドの話をするんですが、国内外問わず本当に熱心にパンクを聴いてる人だなと。THE RUSTEDのリリースについても楽しそうに話してくれるので、本当に嬉しいですね。そうこう話してたら確かにいつも電話も一時間超えてますが決して、決して無駄に長いなんて思ってません(笑)!現段階で決まっていることは、7インチで3曲、できれば4曲入りですね。まだ時間はかかると思いますが、少しずつ形にはなっていってるのでどうか楽しみにお待ちください(笑)。僕が一番楽しみにしてます」

■最後に、THE RUSTEDというバンド名ですが、"Rusted"で、"錆ついた"みたいな意味ですよね?どんな想いを込めてこの名前をつけられたのでしょうか?

「バンド名に関してですが、THE SICKを解散してHanaとTakuyaにバンドしようって声を掛けた後、僕個人の事情で半年以上彼らを放置してたんです。で、彼らにケツを叩かれて初めてスタジオに入ってみたらコツとか全部忘れたのかってぐらい、そらもう酷い有り様で(笑)。なので"錆びついて使い物にならない"って意味でTHE RUSTEDにしました。大して深い意味はないですね(笑)」





北欧と南米と岡崎(?!)が栃木で激突する奇跡!ex TAKAHASHI GUMI、AMNESEA、THEパンパース〜現MARVELOUSのメンバーによる噂の"BIZARRE HARDCORE"バンド、FÖRTVIVLANが1st 7インチ「KAOTISKA-EP」をドロップ!
世界各地のハードコア・パンクを嚥下&昇華し、キャッチーさと切迫感を同居させたサウンドに、転がり回る怒濤のスウェーデン語ヴォーカル。これを聴いて燃えないヤツは不能だぜ!というわけで、"インタヴューしたいな〜"と思っていたところにギターのなおきっき(キキキ)君からちょうど連絡が来るという奇遇もありつつで、今回のインタヴューと相成りました!
メンバーはshiva:シ(ドラム)、saji:サ(ヴォーカル)、mie:ミ(ベース)、キキキ:キキ(ギター)の4人。メールで送った質問に全員が答えてくれました。

■メンバー皆さんそれぞれにバンド歴があると思いますので、FÖRTVIVLAN以前にやっていたバンド、あと、並行して現在もやっているバンドがありましたら教えてください。
シ「以前にはTAKAHASHI GUMIというバンドでギター・ヴォーカルをしていました。でも、FÖRTVIVLANではドラムをやっています」
サ「並行してMARVELOUSでギター・ヴォーカルをやっています。以前はshivaとCHAOTIC DISCONFUSEでギター、キキキとTHE CONVICTEDでドラムをやっていましたがどちらも活動期間は短かったです」
ミ「AMNESEAでギターをやっていました」
キキ「過去になおきっき名義でやってたのはWASTED LIFE、THEパンパース、それとTHE CONVICTEDってバンドではライヴの度に毎回メンバー・チェンジしていて、TAKAHASHI GUMI企画で一回だけsajiがドラムでライヴをやったけど、激しいドラムを叩いて腰を痛めてそのままヘルニアで入院ってこともありました(笑)!!そのバンドの初期の曲の音源だけでも残そうかなと思っています。現在では並行して八月の秘密というバンドに参加させてもらっているところです」
■FÖRTVIVLANの結成はどんな風に?対バンしたりで、お互いに知り合い/友達だったのですか?経緯を聞かせてください。
シ「僕とsajiで何かライヴを見に行った帰りにバンドやりたいねーって話しになって、それでキキキを誘って3人でスタジオ入ったんですけど、そのスタジオにmieも来てたから、mieちゃんにベースをお願いしてみたら、やってくれました。それが、きっと3年半くらい前ですかねー」
キキ「shiva、sajiとは2009年に地元のライヴでそれぞれ知り合ってて前のバンドでも対バンしていたけど、自分のバンドが止まっちゃってフラフラしていた2011年夏に声を掛けてもらって、2人とも他のバンドでギターをやってる(た)ので、初のスタジオ練習の時にギターとベースを持って行った記憶があります(笑)」
■バンド名もスウェーデン語ですし、結成当初は"スカンジ・ハードコアをやろう!"って感じでしたか?当時、念頭にあったバンドや方向性はどんなものでしたか?
シ「はじめは東日本ってBRISTLESに影響されてるバンド少ないんじゃない?ってなって、BRISTLESスタイルを目指してカヴァーとかもやってたのですけど、saji君の声が曲と合わないかなーってなったり、あと技術が追いつきませんでした(笑)。それから、ちょっとずつ軌道修正していって一番しっくりくる感じだったのが今のスタイルですね」
サ「SKIZOPHRENIA、BRISTLES、スカンジナビアだったと思います」
キキ「バンド名に関してはアルファベットの上に‥が付くウムラウト記号があった方がいいってこともあり、バンド名を決める際になんとなく頭に浮かんだ"絶望"ってのをスウェーデン語で調べてみたらFÖRTVIVLANがヒットしました!!」
■これまでの音源はカセット・テープが2本

と、6月に発売された「KAOTISKA-EP」7インチで全部ですか?他にもありますか?
一同「そうですね。YOUTUBEでライヴの映像が観られるぐらいです」
■このタイミングで、自主で7インチをリリースしたのには、何か特別な理由や意図があったのでしょうか?
シ「最初の音源だし自分達で作ろっかーって流れになって、やっぱり単独音源を作るなら7inch出したいねってことで自分達でのんびりやってたら今のタイミングになっちゃいました(笑)」
キキ「機は熟した!!!」
■「KAOTISKA-EP」に掲載してあるメンバー写真を見ても、mieさんがGERMS、shivaさんがASTA KASKとSTREBERS、sajiさんがH.H.H.のTシャツを着ていて、キキさんが鋲ジャンと、皆さん見事にバラバラですよね。サウンドもスウェーデンのTrallからMangel、更にイタリアンに南米のハードコアも混ざったような、色んな要素が絡み合ったものに感じます。自分たちの好きなパンクをどんどん吸収/融合していって、今のスタイルになった感じですか?
シ「そうですね。曲は僕とsaji君で作ってるのですけど、スウェーデンや南米とかに限らず良いバンドの音はどんどん吸収できていけたらなって思ってます。世界各国のパンクのレコードを聴いていると、どのバンドもカッコ良くてスグに影響受けてしまうので、なかなか○○直系的なスタイルにはならなかったです。これからも良い音楽はどんどん吸収してFÖRTVIVLANならではの音を作れれば良いと思います」



サ「まさにそんな感じですね。最初はスカンジやトラルなんかのメロディーを意識して曲作りをしていたのですが、各メンバーが出来ることとバンドでやりたいことがつり合わなくなっていきました。みんなほぼ初心者だったので(笑)。その辺からshivaが南米というキーワードを出してきて巻き舌を取り入れていった形ですね。で現状辿り着いたのが南米プラス北欧の南北スタイルです(笑)。あと忘れちゃいけないのが岡崎のTOMORROW!」
キキ「写真がなかったので昔やってたバンドの写真なのでベースを持っちゃってる(笑)。自分の核はUKと日本のポゴ・パンクですけど、2人にお任せしちゃってます。ファッションなんかは最近では気にせず着たいものを着てます」
■色んな国、色んな年代のパンクが好き!というのが、音やアートワークからも伝わってきます。すごく根本的な質問で答えづらいかもしれませんが、パンクのどんなところに一番惹かれますか?
シ「僕は単純に聴いていて気持ちが熱くなれるとこです」
サ「混沌!毒々しさ!SHORT SHARP SHOCK!」
キキ「一言で云えば、ただ単純にカッコいいから」
■ちなみに、「KAOTISKA-EP」のアートワーク、旗を持ったドクロのジャケはRATOS DE PORAOの「Crucificados Pelo Sistema」のオマージュですか?
サ「はい、まずshivaのアイデアでジャケは赤紙に黒印刷という案があったんですよ。で、紆余曲折ありまして自分がジャケを描くことに







混沌!毒々しさ!SHORT SHARP SHOCK!

なったのですが、頼まれてから入稿まで時間がほぼありませんでした。焦るばかりで全くイラストのアイデアがなく、南米関連のジャケを参考に勢いで描いて出来たのがこのジャケです。そーですね、オマージュですね(笑)」

■そのドクロが持つ旗、「Crucificados Pelo Sistema」だとピース・マークだったのが放射能マークになっていて、あと歌詞でも放射能に言及していますよね。ジャケの内側全面にプリントされている廃墟のような写真も、"福島第一原発の写真なのかな?"とか、"ドクロが出てきた(座っている?)箱に書かれた"DAIICHI"という文字も、福島第一原発を指しているのかな?"と色々推測したのですが…、実際のところはいかがでしょうか?

サ「はい、DAIICHIは福島第一原発のことを指しています。もともと原案はドクロが放射能の旗をもって福島第一原発に座っている絵でした。絵を修正していく過程で原発はDAIICHIの文字のみで表現することになり、最終的にはDAIICHIの文字は消すことになったんですが、shivaが消し忘れて印刷に出してしまいました(笑)。廃墟の写真はshivaの案で、原発は関係ありません。繊維工場だかなんだかの写真だそうです。やはり自分達は日本に住んでいるし、栃木県は福島県の真下にあります。そんな場所でも原発事故、放射能汚染の風化は起こっています。自分の生活でももっと気にしなければいけないことがないがしろになっているのが現状です。日本人はこの先何十年も放射能と生きていくという意味や、政府への怒りを歌詞やアートワークに取り入れて表現しました」

■歌詞カードは藁半紙のような紙質で、こういう細かいこだわりも嬉しかったりします。これは誰のアイデアで、どんな意図から?

シ「これはsajiのアイデアですね。僕が歌詞カードの編集をしていたら、この感じで藁半紙だったら最高ですね!って言われてスグに藁半紙に決めました」

サ「やっぱりこの粗さでしょうか!」

■裏ジャケの隅、バンド名の下に"BIZARRE HARDCORE"とありますが、"Bizarre"って"異様な"とか、"奇怪な"って意味ですよね。どういう意味を込めて"BIZARRE HARDCORE"と書かれたのでしょうか?

シ「"BIZARRE HARDCORE"は、saji君がFÖRTVIVLANのライヴ・スケジュールのフライヤーを作って来た時に"BIZARRE HARDCORE"って書いてあって、奇怪なとか奇妙なって言葉とバンドの曲の感じが合ってるなって思いました。スウェーデン語で唄っているんだけど、イタリア、スペイン、南米の要素も入っていてみたいな。そんな感じが"BIZARRE HARDCORE"ってピッタリだなって思いました」

サ「あと大好きな『JOJOの奇妙な冒険』ですね(笑)」

■"BIZARRE HARDCORE"の隣と、あと盤面にも"HARDCORE ASHIKAGA"とありますね。足利で自主企画もされていますし、足利～栃木のシーンを盛り上げたい!という気持ちはありますか?

シ「もちろん盛り上げたいって気持ちはあります!足利は、とにかくパンク好きな人が少ないので一人でもたくさんの人にパンクを好きになってライヴハウスに遊びに来てもらいたいって日々試行錯誤しています。いつか、津山や岡崎のように全国の人が知っている街になれれば良いなって思います」

キキ「自分だけ宇都宮在住で、2000年頃から地元の大御所バンドのPLUTONIUMさん達と知り合って"一緒に"なんていったらおこがましいですけど、世界が変わってアツい時期を過ごせたので、足利だけじゃなくてまた当時のように宇都宮も盛り上げたいと思ってます。不定期ですが宇都宮で個人企画をやってます」

■同じ栃木県内でも足利と宇都宮だと、パンクの状況とか雰囲気とか、かなり違いがありますか?あと、宇都宮での個人企画というのはどんな内容ですか?

キキ「今は足利のバンドの方がいい意味でギラついているように感じます。安く借りられるライヴハウスもできて企画をやりやすくなったってのも大きいかなと思います。足利は革ジャン鋲ジャン率は低いです(笑)。宇都宮ではポゴ・パンク好きな20歳前後の若い子達も出てきたので期待したいです!!個人企画では自分が好きなバンドを集めてハードコア・パンクのバンドばかりにならないようにやっていきたいと考えてます。ジャンルの違いって壁じゃなくて、自由に出入り出来る扉みたいな方がいいなと思って、あまり頭を堅くせず柔らかくいきたいですね」

■けど、栃木にこもるわけではなく、東京含め色んな場所でライヴをされていると思います。最近、対バンしたりでライヴを見て、刺激や衝撃を受けたバンドはありますか?

シ「僕はACUTEを見ると毎回凄い刺激を受けます。僕にとっては永遠の憧れですねー(笑)」

サ「SIN ORDEN!ISTERISMO!それと神奈川のWITCHCRAFT ACTは毎回刺激を受けていますね!メロディーに楽曲、スペイン語の語感と全てにおいて最高なバンドですね!クサメロ、トラル好きにも大推薦のバンドです!」

キキ「最近初めて観て衝撃を受けたのはEL NUDO、独りノイズ・インダストリアルなGLOPTIN、もう解散しちゃったけど地元の男女シューゲイザー・バンドのThe Vanities、あと福島のSTRANGE FACTORYはメンバーが10代の頃から対バンしたり観てきてるので刺激を受けます」

■最後に、今後の野望、展望、予定などなどありましたら教えてください。

シ「東京とかからも足利にライヴを見に来てもらえるように頑張りたいです。あと、まだまだ先の話だと思うのですけど、いつかはアルバムも出したいです」

サ「自分達の活動がパンク・シーン、地元シーンの活性化に少しでも役にたてれば嬉しいですね!」

ミ「セカンドEP出したい!」

キキ「これから始まるレコ発ツアーで47都道府県に行きたいっすね!」

ライヴ告知はTwitterアカウントにて!
@Fortvivlan_



Janez
(ATENTAT NA SLUH)



ユーゴスラビア・ハードコア今昔

2012年にヨーロッパなどを旅行していたときに、セルビア人のJanez(ヤニス)という、皮肉屋の面白いパンクスと知り合って、ギリシャ〜マケドニア〜セルビアで一緒に遊んでいた。ベオグラードのカレメグダン公園で毎晩ダラダラと色んなことを話しながら、バルカンのひと夏を過ごしたのはいい思い出だ。
今回ヤニスにメールでインタヴューを行い、改めて今のセルビアやユーゴスラビア時代の生活、バンドについて聞いてみた。セルビアの辿った過酷な歴史や、「自主管理社会主義」の成功例と見られることもあったユーゴスラビアをパンクスがどのように生きていたかなど、あまり情報が得られないこの地域の一側面を物憂げに語ってくれた。

文:鈴木智士

■ではまず自己紹介をよろしく。

「ヤニスと言います。ATENTAT NA SLUHというセルビアのノイズコア・バンドのヴォーカルで、HC Recidiveという小さなレーベル/ディストロもやってるよ」

■ベオグラードについて簡単に教えてくれる?90年代のセルビアは戦争がいくつかあってかなり大変な時代だったと思うけど、ヤニスはどんな生活を送ってた?

NATOによる空爆



「ベオグラードはセルビアの首都で、約3万人が住んでいるよ。ベオグラードはサヴァ川とドナウ川という2つの大きな川が合流する地点にあるんだ。ここには金持ちや汚い権力者もいれば、その裏側には貧乏人や虐げられた人たちもいる。いい生活をと仕事を求めて来る人も多いから、人で溢れかえってるね。ベオグラードはいつも西と東の交差点だったから、旅行者も多いし、移民も多いし、来てはまたどこかに行っちゃう人もいるよ。ここに住むのは楽じゃないね。仕事はほとんど見つからないし、月曜から土曜まで毎日働いても生活するのに十分な収入が得られない人だってたくさんいる。よくあることだけど、政治家が権力を持ってて、そういう人たちを足蹴にしてるわけだよ。90年代は血に塗れてたね。戦争、インフレ、警察からの抑圧…、とにかくめちゃくちゃな状態だった。俺は10代だったけど、毎日道端で酒飲んで吐いてただけだよ」

■コソボ紛争時の、1999年にNATO(北大西洋条約機構・アメリカ合衆国を中心とした、西ヨーロッパ諸国との軍事同盟)がユーゴスラビア連邦共和国を空爆した時は、ヤニスはどこにいた?

「1999年の空爆の時は、ロズニツァというセルビア西部の小さな町にいたよ。空爆は72日間続いたんだ、毎日止むことのない警報と空襲を想像してみてよ。人々は地下や核シェルターに逃げ込んでいた。NATOはよく橋を爆破していたから、シャツにターゲットマーク(的のマーク)を貼ったりプリントしたりして橋の上に立って、爆撃されるのを待ってた人もいたね。NATOはセルビアの主要都市のほとんどに爆弾を落としていったよ、橋、テレビ局、アンテナなんかにね。一般市民や子供たちももちろん犠牲になったし、NATOの空爆による正確な死者の数ってのは今もわかってないよ。NATOは無数の死体と、劣化ウランを残していったのさ。NATOの作戦は「慈悲深き天使」と言って、その行動を正当化するために、西側メディアに「悪玉セルビア」のイメージを植え付けたんだ」

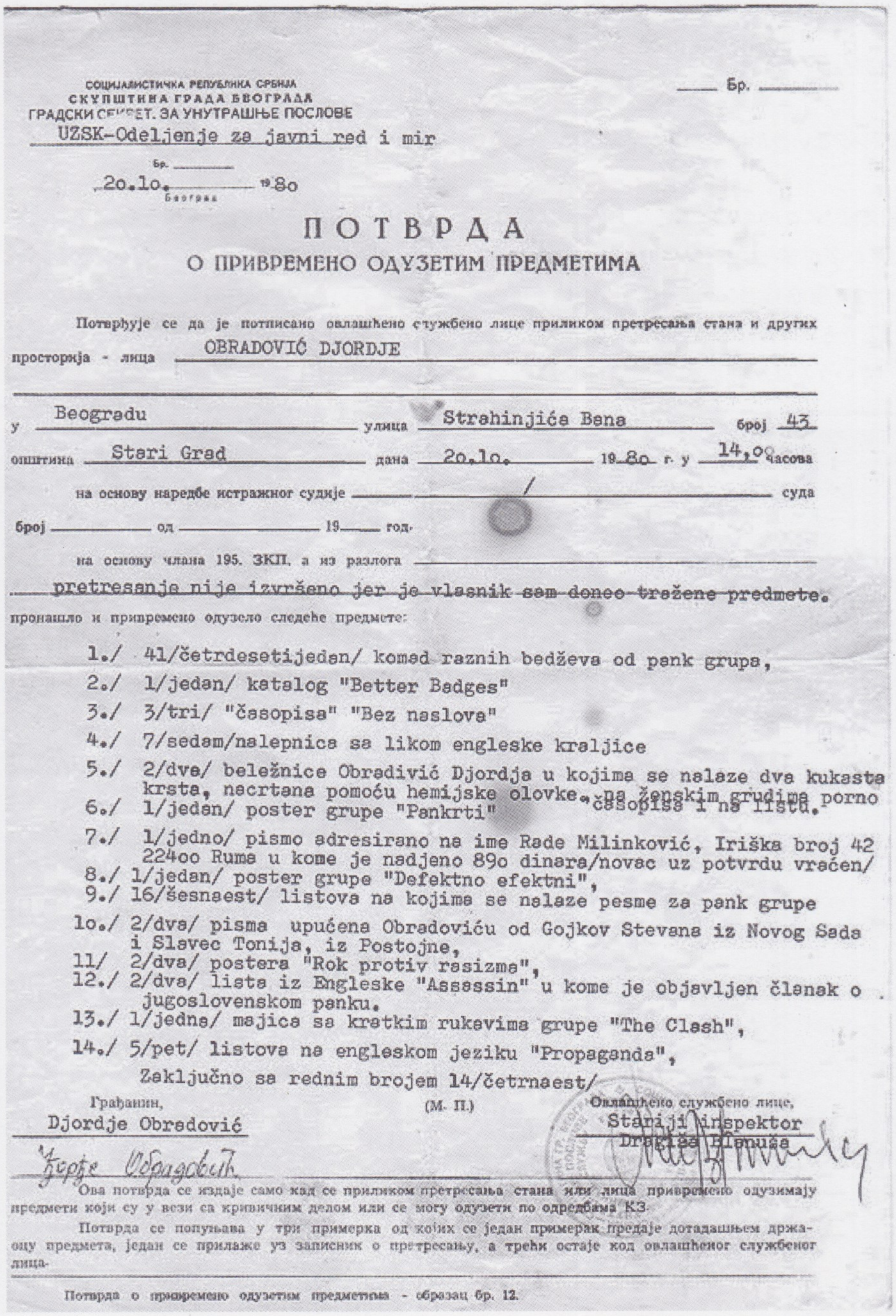
■西側メディアにベッタリの日本でも「セルビア=悪」という視点の報道ばかりだったのを覚えてるよ。さっき少し話が出たけど、ユーゴスラビア時代の生活やバンド、バンドを取り巻いた状況について教えてくれる?

「旧ユーゴは両極端だったと思うね。一方でいい生活水準があったけど、他方ではたった一つの政党による全体主義的なレジームがあったんだよ。「いいハードコア」ってのは、普通は、若者がその自由を縛る鎖に対して声を上げるような、抑圧された国から出てくるもんだけど、ユーゴスラビアは世界的に見ても豊かなパンク、ハードコアのシーンがあったんだ。怒りや憂鬱、皮肉に彩られた、ユニークでダークな音を出すバンドがたくさんいたし、「鉄のカーテン」が作り出す当時の空気感というのが感じられた。80年代のフィンランドのハードコアに憂鬱さやヒステリーを感じることができたり、当時の南米のバンドに途轍もなくロウな怒りや暴力性を感じられるのと一緒だよ。

当時はバンドのメンバーってのはよく逮捕されてたみたいだね。ジンやポスター、レコード、バッジなどの私物は警察に押収されたり、簡単に疑いをかけられるように、そのサブカルチャー全体を「ナチ・ムーヴメント」呼ばわりしてたっていう話もあったみたい。ベオグラードの警察署には「Punk」ってラベルのついたファイルがあって、そこには地元のあらゆるパンクに関わることが書かれていたらしいよ。

その警察に私物が押収された話の一例がここにある。この書類(押収令状の写真)について説明するね。

1980年10月20日、警察はGvido(後にARHIVA、NECROPHILIAや、その後にはCRISTやBRAINSTORMのヴォーカルを務めた人で、初期のベオグラードのパンク・シーンでジンをやってた主な人たちのうちの一人)を呼び止めて、彼のパンクに関わる14の私物を押収したんだ。 この書類はベオグラードのスタリ・グラードという地域のDragiša Blanušaという警官によってサインされている。こいつは後にベオグラード中央刑務所のトップになった男だよ。この書類に書かれている押



СОЦИЈАЛИСТИЧКА РЕПУБЛИКА СРБИЈА
СКУПШТИНА ГРАДА БЕОГРАДА
ГРАДСКИ СЕКРЕТ. ЗА УНУТРАШЊЕ ПОСЛОВЕ
UZSK-Odeljenje za javni red i mir

Бр. ______

Бр. ______
20.10. ______ 1980
Београд

ПОТВРДА
О ПРИВРЕМЕНО ОДУЗЕТИМ ПРЕДМЕТИМА

Потврђује се да је потписано овлашћено службено лице приликом претресања стана и других просторија - лица OBRADOVIĆ DJORDJE

у Beogradu улица Strahinjića Bana број 43
општина Stari Grad дана 20.10. 1980 г. у 14,00 часова
на основу наредбе истражног судије / суда
број ______ од ______ 19___ год.
на основу члана 195. ЗКП, а из разлога
pretresanje nije izvršeno jer je vlasnik sam doneo tražene predmete.
пронашло и привремено одузело следеће предмете:

1./ 41/četrdesetijedan/ komad raznih bedževa od pank grupa,
2./ 1/jedan/ katalog "Better Badges"
3./ 3/tri/ "časopisa" "Bez naslova"
4./ 7/sedam/nalepnica sa likom engleske kraljice
5./ 2/dva/ beležnice Obradivić Djordja u kojima se nalaze dva kukasta krsta, nacrtana pomoću hemijske olovke, na ženskim grudima porno časopisa i na listu.
6./ 1/jedan/ poster grupe "Pankrti"
7./ 1/jedno/ pismo adresirano na ime Rade Milinković, Iriška broj 42 22400 Ruma u kome je nadjeno 890 dinara/novac uz potvrdu vraćen/
8./ 1/jedan/ poster grupe "Defektno efektni",
9./ 16/šesnaest/ listova na kojima se nalaze pesme za pank grupe
10./ 2/dva/ pisma upućena Obradoviću od Gojkov Stevana iz Novog Sada i Slavec Tonija, iz Postojne,
11/ 2/dva/ postera "Rok protiv rasizma",
12./ 2/dva/ lista iz Engleske "Assassin" u kome je objavljen članak o jugoslovenskom panku.
13./ 1/jedna/ majica sa kratkim rukavima grupe "The Clash",
14./ 5/pet/ listova na engleskom jeziku "Propaganda",
Zaključno sa rednim brojem 14/četrnaest/

Грађанин,
Djordje Obradović
Ђорђе Обрадовић

(М. П.)

Овлашћено службено лице,
Stariji inspektor
Dragiša Blanuša

Ова потврда се издаје само кад се приликом претресања стана или лица привремено одузимају предмети који су у вези са кривичним делом или се могу одузети по одредбама КЗ.

Потврда се попуњава у три примерка од којих се један примерак предаје дотадашњем држаоцу предмета, један се прилаже уз записник о претресању, а трећи остаје код овлашћеног службеног лица.

Потврда о привремено одузетим предметима - образац бр. 12.

1980年10月、ベオグラードのパンクスへの押収令状

収物というのは、パンクのバッジ41個、英語のパンク/ロック雑誌何冊か、Gvidoが作ってた「Bez Naslova」というジン3部、パンク・バンドの歌詞が書いてある紙16枚、ポスター何枚か、他のパンクスからの手紙何部か、あとTHE CLASHのTシャツとかだね。もちろん警察は押収した物をGvidoに返却しなかったし、それどころか彼に脅迫みたいなことをしたらしい。刑務所には入れられずに済んだみたいだけど。あとその時には警察は他に30人のパンクスに事情聴取を行ったらしいよ。そのパンクスの多くは後に、グラフィティとかライヴのポスターを壁に貼ったとかいう軽犯罪で告訴されたんだ」

■当時はどうやって情報交換してたの?

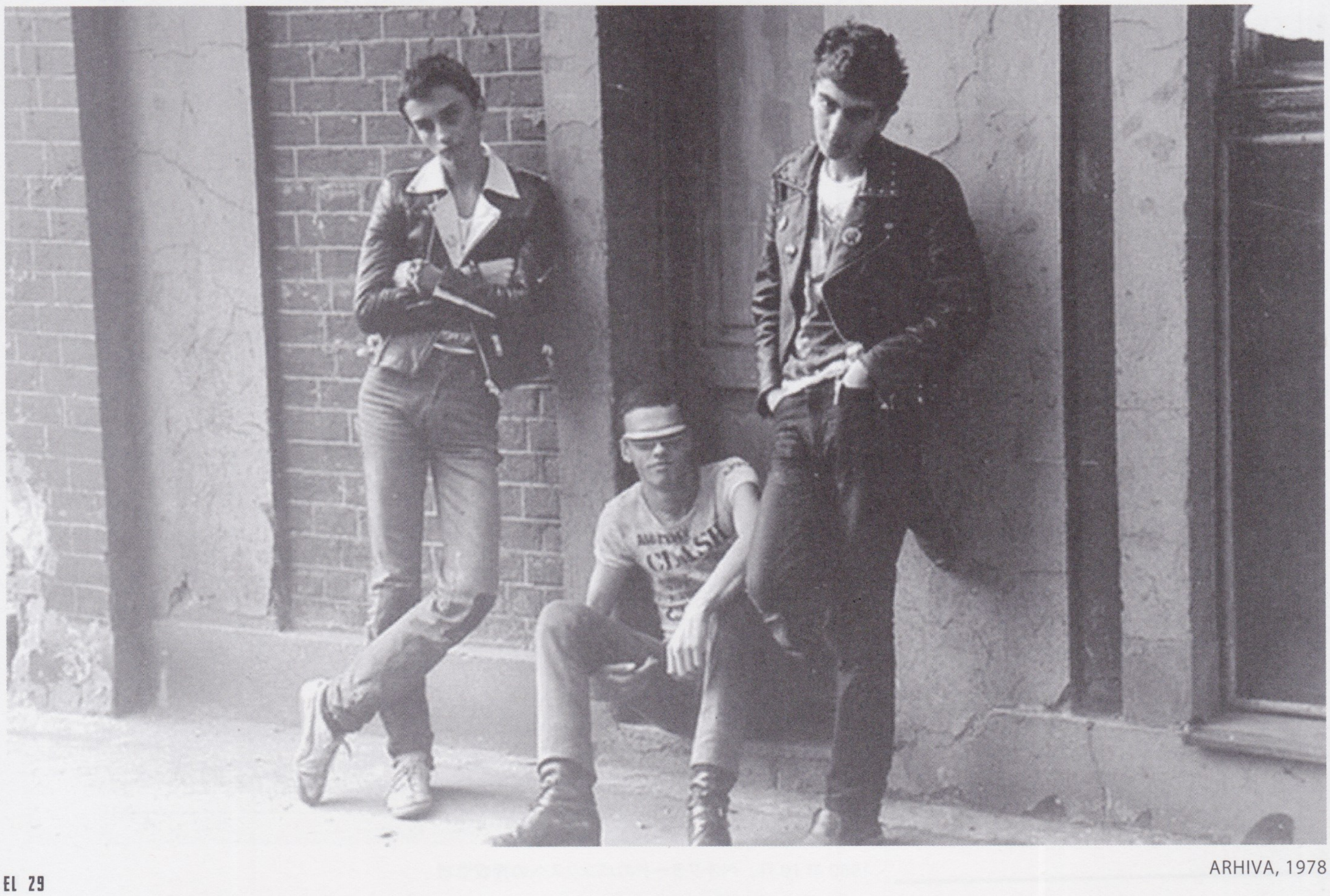
「電話やら、道端で会ったときに直接話したり、ベオグラードだとパンクスはSKC(学生文化会館)の裏でよくダベってたらしいよ。毎日そこに集まっていたから、情報は自然と回っていったんだろうね」

■パンクというだけで警察に捕まった?

「例えば、スロベニアのあるパンクスのバッジに鉤十字が載ってて(シド・ヴィシャスみたいなやつ)、警察はパンクとナチとの関係を疑ったりしたというのはあったみたい。当時のパンクっていうのは反共産主義で、チトー主義の共産主義下に生きていたから、パンクというのは支配システムに対する直接的な抵抗だったんだよね。当時はチトーに対して何か文句を言うのは許されなかった。もし何か言ったものなら、Goli Otok(アドリア海に浮かぶ島で、政治犯が連れていかれた収容所)に行き着くだけだったんだ。政治的に「不要」な考えを持つ人々というのは、そこに連れてかれて強制労働させられていたんだ。ちなみにユーゴスラビアは第二次世界大戦ではナチス・ドイツに対して戦ってて、クロアチアにはナチの強制収容所もあったんだ。ヤセノヴァツという、無数のセルビア人が亡くなったところとかね。まあチトーは、大衆をどうやって操作するかということには間違いなく長けてたんだけど、実はフリーメイソンで、カバラなんかにも精通してたとか、チトーは2人いた、なんて話もあるみたいなんだけどね。まあこれはまた別の機会に…。ユーゴスラビアというのはすべてが人工的なプロジェクトで、その歴史には幾重にも重なる層があるんだよ」

■当時のユーゴスラビアにはどんなバンドがいた?

「当時のセルビアには、あまり有名じゃないし、レコーディングすることすらできなかったバンドもいるけど、いいバンドがたくさんいたんだ。NECROPHILIA、DISTRESSやSOLUNSKI FRONTなんかがベオグラードで最初にハードコアをやったバンドだけど、最近「Buka i urlik」っていう当時のテープのコンピレーションがLPでようやく再発されたよ。当時のバンドの名前を挙げていくと、ARHIVA/ARHIVSKA ZABAVA、CIVILI、DISINFECTや、何年か後にTHRASFOBIA、NEVER AGAIN(この2バンドは後にTHRASHAGAINを結成)、TUTTO COLORI、ORTHODOX CHRISTIANS、CODEX OF DEATH、KZV、ŽENMIN ŽIBAO、CRISTなんかはすべてベオグラードのバンドだね。
ノビサドには2 MINUTA MRZNJE、FEAR OF DOGがいたし、北部のスボティツァにPROCES、GIUSEPPE CARABINO、NADE IZ INKUBATORAというバンドがいた。
セルビア中央部のクラグイェヴァツにはKBO!などがいたよ。
スロベニアだとSTRES DRŽAVNEGA APARATA、U.B.R.(UPORNIKI BREZ RAZLOGA)、EPIDEMIJA、TOŽIBABE、GUZ(GRDI, UMAZANI, ZLI)、HAVE A NICE DAY、POLSKA MALCA、ODPADKI CIVILIZACIJE、S.O.R.(SISTEM ORGANIZIRANE REPRESIJE)、QUOD MASSACRE、MASAKER、DEPRESIJAなんかがいたね。
クロアチアにはPATARENI、MOTUS、LOŠE PONAŠANJE、EUFORIJA、GOLA JAJA、Z.R.M.(ZONA RANE MASTURBACIJE)、BLITZKRIEG、GENERALIなどがいたね。
俺はこういった昔のバンドの音源をレコード



ARHIVA, 1978



で再発したいんだけど、今の給料ではレコードを出すなんてできるわけもなくて……。DISTRESSの「Izdaja Ljudskih Prava・30th Anniversary Edition」は少しお金を出したり絵を描いたりで関わったんだけどね。今まで聴いたこともないライヴ音源が見つかって、それをオリジナルの7インチに追加したんだ」

■では現在のセルビアのハードコア・パンク・シーンについて教えてくれる?何かおすすめのバンドはいる?

「今のセルビアのシーンはデカくはないね。でもいいバンドはいくつかいるよ。大体のバンドはワナビーで、テレビに出て商業的に成功したいのが多いけど、ほんとそういうのはクソだね。ATENTAT NA SLUHはセルビアで唯一無二のノイズコア・バンドだよ。デモやリハーサル・テープをいくつか出して、コンピにいくつか参加して、EPが一枚出てるよ。KALOはノビサドのバンドで、80年代の旧ユーゴスラビア時代のバンド―最高の時代だね―、を彷彿させるようなサウンドだよ。何本かデモ音源があって、一枚のスタジオ・アルバムと、セルビアの北西の町・シドのATOMSKI RATとのスプリットが出てるよ。ATOMSKI RATはテープとCD-Rが何枚か出てて、80年代のフィンランドみたいなうるさくてノイジーなバンドだよ。メンバーの一人がMUTABOと掛け持ちで、そのバンドは80年代後半のUKみたいなダークなメタル/パンクのクロスオーヴァーをやってるよ。彼らはインドネシアのバンドともうすぐスプリットの12インチを出すんだ。MUTABOにはDAŽD(Vol.8にインタヴュー掲載)のメンバーもいるよ。DAŽDはここ10年くらいものすごく活動的にやってるステンチコア・バンドだね。DAŽDは7インチが何枚かと、LP一枚、あと未発表のLPがあるよ。INTOXはクラグイェヴァツの若手D-Beatバンド。80年代前半のフィンランドのバンドや旧ユーゴのバンドに影響を受けている。テープが一本と、あとリハーサル音源がいくつかあるよ。DISHUMANITYもクラグイェヴァツのバンドで、ダークなD-Beatサウンドだよ。CD-Rとテープがいくつか出てる。EMETICAもまた別のクラグイェヴァツのバンドで、メタリックなグラインド・コアをやってるね。今、アルバムを録音してるみたい。AUTOKASTRACIJAやULICNI BATINAŠIは速くてノイジーなハードコアで、デモやリハーサル音源が出てる」

■他の旧ユーゴのパンクスとの関係はどう?交流はある?バンドについても教えて。

「旧ユーゴのパンクス同士は仲いいよ。同じ言語を話すし、ライヴもよく一緒にやったりしてるよ。スロベニアにEXTREME SMOKE 57ってバンドがいて、もうすぐセルビアでライヴをやるんだ。彼らはスロベニアで最初のグラインド・コア・バンドで、近々新しいレコードとテープが出るみたい。スロベニアで今一番活動してるバンドじゃないかな。クロアチアにはNONSENSEというクラシックなバンドがいて、あとHELLBACKっていうダークでメタリックなクラスト/ハードコア・バンドもいる。どっちのバンドもデス/グラインド・バンドのDISLIKEとメンバーがかぶってるね。あとはPATARENIだね。マケドニアのULTIMATUMはまだ音源はないけど、KILSLUGとかFLIPPERみたいなドゥーミーなパンクのバンドだよ」

■最後に、今後の展望とかはある?

「目下、ATENTAT NA SLUHでリハーサルできる場所を探してるよ。レコーディングがしたいね。未発表の曲や新曲もあるし、リリースの話もいくつかもらってるけど、この地での生活は日に日にめちゃくちゃになっていってるからどうなるかわかんないね。レーベルも同じだね。面白いユーゴスラビア時代のバンドを、レコードか、少なくともテープでリリースしたいんだけどね」

インタヴュー中に名前の挙がったバンドのyoutube音源や、セルビア、ユーゴスラビアに関する動画などを掲載してあります:
焰と煙霧 http://tower.void-server.net/el-zine-bands-in-yugoslavia/



TEXT:Christina P

PUNK IN AUSTRALIA

+++ PARt 2 +++

前号に引き続きオーストラリア・パンク・シーン、パート2をお送りします!
今回は世界一住みやすい都市にも選ばれたメルボルンです(あとパース、シドニー、タスマニア編が…)。ドウゾお楽しみください!

メルボルン Melbourne

音楽の中心地であるメルボルンに暮らす人々は、本当によく苦渋の選択を迫られている。だってここではいつもショーが行われているから。

ショーの選り好みをしたり、億劫になって行ったり行かなかったりするのも簡単。だけどそんな贅沢は、他のどのオーストラリアの都市でも叶わないわよ。

とは言え、それほど多くのスクワットやウエアハウス、ハウス・ショーがあるわけじゃないの。気難しいニッチが好んでいる音楽にも融通を利かしてくれる会場がいくつかあるだけ。

この10年くらいの間には、長く続くことのなかった、短命のDIYスペースもいくつかはあったんだけどね(Nat's WarehouseにIrenes Warehouse、Batman Park、Loopholeなどなど)。だけど今も続いている唯一のDIYな会場と言えば、Essendonスクワットとメルボルン北部にあるBlack Goatだけ。どちらもこの数年でどんどん良くなってきているわ。それと、Gasoが続いてくれていれば良かったな。約3年くらいは生き延びていた幅広い層を受け入れるパンク・パブだったんだけど、昨年に閉店してしまったの。

それにBendigo Hotelを加えた4つの会場が、ロウ・パンクやクラスト、ハードコア・パンクといったジャンルのバンドのショー、その大部分を引き受けていたのよ。

時折、この手のスタイルの1、2バンドが西部でのショーにギャラをもらって出演することがある。そういうのって、近頃はほとんどがストリート・パンクのショーね。シーンに馴染んでいる大抵のパンク・バンドとは違って、ストリート・パンク・バンドってシーンに居場所がないのよ。メルボルンのパンク・シーンとほとんど関わりを持っていないからね。

確かにストリート・パンクは商業的なメディアからは注目を浴びているわ。パンクの典型的な立ち居振る舞いだからね。だけど残念なことに、彼らの作り出す音楽は退屈なパンク・ミュージックよ。

Yeapのやっていたバンドで最も知られているのはPISSCHRIST。あとは今やっているKROMOSOMでしょうね。彼はレーベル、Hardcore Victimも運営していて地元のロウ・パンク・バンドやその手のジャンルのバンドを色々とリリースしているわ。彼のバンドでもあるKROMOSOMもそうだし、BLOODY HAMMERやHAVITTAJAT、UNKNOWN TO GOD、LAST CHAOS、NUCLEAR SEX ADDICTなどね。そしてもうすぐSCAB EATERの7インチがBlow Bloodとの共同でリリースされるはずよ(※現在はリリース済み)。個人的な意見だけど、SCAB EATERのデモ・テープは2013年に発表されたオーストラリアのデモ音源としてベストな一本だったわね。もし彼らのライヴを見るチャンスがあったらぜひ足を運んでみて。怒りと実直さ、そしてロウなエナジーに充ち溢れているから。彼らは2ヵ月にも及んだ東南アジア・ツアーを終えたばかりよ。

KROMOSOMの初期メンバーだったMattは、今ではフィニッシュ・パンク・バンドのHAVITTAJATでヴォーカルを担当しているわ。活動資金が全然ないおかげで何をするにも遅々として進まないバンドでね、デモをリリースした後にギタリストのRyanはサイド・プロジェクトのRIP FUCKERを始動させてそこで歌い始めちゃった。このバンドもテープを出していて、近々Hardcore Victimから7インチをリリースする予定。クラストからの影響が大きいノイジーなハードコア。

RIP FUCKERにはPATHETIC HUMANというハードコア・パンク寄りのパワーヴァイオレンス・バンドをやっていたメンバーも在籍している。PATHETIC HUMANはメルボルンが誇る素晴らしいバンドだったけど、数年前に解散しちゃった。それとダーク・ポスト/ピース・パンクのMASSESをやっているメンバーもいて、このバンドは今年の初めにオーストラリア・ツアーを敢行、1st 7インチも出す予定よ(メルボルンのBlow Bloodとシアトルのrust & Machineによる共同リリース)。あとはSPLIT TEETHというパワーヴァイオレンスのバンドのメンバーも在籍しているわね。

DEBACLEは古くから活動しているクラスト・バンドだけど、ANSIAやGRAVEYARD ORBIT、それにPUTKAHといった若手のクラストも出てきているわ。OF PREYやLAST MEASUREなんてバンドもいたけど最近解散してしまった。

SEWERCIDEはこういったクラスト・バンドと、時々だけど共演している唯一のスラッシュ・メタル・バンドね。他のバンドはメタルかストリート・パンクのシーンでしかプレイしないもの。SEWERCIDEはオーディエンスが5人だろうが500人だろうがおかまいなしに激しくヤリまくるし、誰と一緒にプレイするかなんてことも重要視していないの。BLACK JESUS(※メルボルンのデス・メタル・バンド)のCDのレコ発にだって出演したしね。そのレコ発にはPISSBOLTとオーストラリアで人気のハードコア/ラッド・フュージョン・バンド、RORTも出演したわ。

●MELBOURNE

RORTも最近LPをリリースしてレコ発をBendigo Hotelで開催したわ。共演したのはUSツアーを終えたばかりのオーストラリア最強のグラインド・バンド、INTERNAL ROT。それにTHORNS、VICIOUS CYCLE、BLOOD RULEといったストレートなハードコア・バンドたちよ。

US/EUROツアーから戻ったばかりのWHITEHORSEのレコ発にはDEAD、PISSBOLT、HEADLESS DEATHが共演したわね。HEADLESS DEATHにはRORTのヴォーカルであるFil、VELVET WHIPのLachie、INTERNAL ROTのChristophが在籍しているわ。ちなみにChristophは6つのバンドでドラムを叩いている。彼のおかげもあって、メルボルンには世界でも有数のグラインド・シーンがあるってわけ。

他に言及すべきキラーなグラインド・バンドと言えば、SUPER FUN HAPPY SLIDEとTHE KILL。レーベル/ディストロで言えばBlastasfuk Grindcoreかしら。

色んなジャンルのショーがメルボルンではたくさん開催されている。Christophが叩いているバンドは確かにグラインドではあるけれど、パンクやポスト・パンク、シンセ、ハードコアといったバラバラなジャンルとも溶け込

んでいるのよね。

彼のバンドでまだ言及していなかったけどチェックすべきなのが、まずはUNNATURAL BIRTH。彼らはデモにとりかかっているところ。DOUBLED OVERはアメリカのHEMDALEとスプリット7インチをリリースするために再結成した(けどそれから両バンドともまた解散しちゃったけどね)。PREGNANCYはデモ音源が7インチとして再発されて、今はLPにとりかかっている。Christophは CONTAMINATEDというバンドにも新たに加入したけど、在籍していたTRENCH SISTERSというバンドがその代わりに解散したわね(何度か″ラスト・ショー″をやった後にね)。

TRENCH SISTERSにはEXTORTIONのRohanと、最高にオススメのクラスト・バンド、EXTINCT EXISTのErleが在籍していた。EXTORTIONはこの2年間というものリリースもしなければショーもしていないんだけど、結成から10周年を迎えたわね。新しいLPのレコーディングにとりかかるべくようやく目覚めたようだから、ショーもやってくれるよう願っているわ。

『Bad//Teeth』というフォト・ファンジンはこの手のバンドのライヴ写真をたくさん記録しているんだけど、それだけじゃなく旅行中に出会った色んな景色なんかも掲載している。

老舗の『Distort』ファンジンは様々な理由からその7号以降、パンク系からもっと雑多でロックンロールなアンダーグラウンド・ミュージック系へと明らかに姿勢を変えてしまったわ。

Daniel、またの名をDXはまだSTRAIGHTJACKET NATIONでプレイしていて、彼らが出演するショーはいつだって強烈で最高なこと請け合い。結成から10年目を迎えようとしているわ。つけ加えておくなら、彼らは昨年のTotal Attackの出演に際して、サンプル曲をいくつか収録したテープを発表したの。STRAIGHTJACKET NATIONの新しいLPのために耳をかっぽじっておくべきね。

DXは他にもヨーロッパ・ツアーから戻ったばかりのUV RACEでドラムを叩いてて、TOTAL CONTROLではヴォーカルを担当しているわ。ただ、はっきりしない噂だけど、TOTAL CONTROLは休止しちゃうみたい。STRAIGHTJACKET NATIONのベーシストであるAlは、UV RACEとTOTAL CONTROLのメンバーでもあるんだけど、他にもいくつかのバンドに関わっていて、それらはもっと陽気な、オーストラリアの現代的ポスト・パンク・サウンド。DICK DIVERとEASTLINKというバンドよ。

メルボルンには昔の作品だったり、オブスキュアなもの、あとはパンクではないレコードを探すのであれば、行く価値のある良いレコード店がいくつもあるわ。時にはレア盤にも巡り合えるかも(あなたがオーストラリア人じゃないなら真に受けないでね。他の国と比較してあまりにも高値だから)。でも、もし最近のパンクを探しているのなら、地元のレーベルかディストロに向かうのが正解よ。

最初のうちはSTRAIGHTJACKET NATIONみたいなオーストラリアのベテランのバンドに感化されて、それから現行のNYCのバンドみたいな、刺激的なハードコア・サウンドへと移っていく。

だけどCool Death Recordsはマニアックなスタイルを復活させたわ。1970年代のオーストラリア、あの当時のパブ・ロックンロールというスタイルをね。

Cool Death Recordsは2012年に設立された。自分たちのサウンドとシーンを創り出し、地元や州外のバンドに刺激を与え、その名を海外へと轟かせている。このレーベルの旗のもとに集いしバンドが、まずはDRIBBLE。ライヴ・テープとデモを出しているわ。LEATHER LICKERSとGUTTER GODSはデモ・テープとLPを、VELVET WHIPはデモ・テープ、POWERはカセット・シングルをそれぞれリリースしている。

Cool Death RecordsはMaggot Festの開催にも協力しているわね。メルボルンのアンダーグラウンド・パンク・フェスで、オー



STRAIGHTJACKET NATION Photo by Sigheil

ストラリアの中でもベストなパンク、ガレージ、ハードコア・バンドが集うものなの。時々ヘッドライナーとして海外のバンドが来ることもあるのよ。

この手のショーに定期的に足を運んでいる女の子たちによって作られたファンジンが『Teenage Fantasies』。新しいパワー・ポップのファンジンで、第一号はミックス・テープ付きで発売されたわ。

Blow Bloodは2013年の中頃に始まったレーベルで、ピッツバーグのEELのテープ「Live In Cleveland」をリリースしている。それ以外は全部地元のバンドをリリースしていて、MASSESの7インチEPにSUBSTANCE ABUSEのデモ・テープ、UNPEOPLEのデモ・テープ、それにHardcore Victimとの共同リリースでSCAB EATERの7インチね。このレーベルは『Stitches In My Head』というパンク・ファンジンをやっていて、地元から海外のバンドまでカヴァーしているわ。4年間くらい続いているわね。

Jamesは南部の町から来た若いパンクスなんだけど、Unwound Recordsを主宰している。IDLE MINDS、HALT EVER、WORLD AT A GLANCE、それにDIPLOIDといったバンドの音源をリリースしているわ。DIPLOIDとWORLD AT A GLANCEはポスト・パンクにも通じているスクリーモ・ハードコアで、DIPLOIDのScottは『Homo Gestalt』ファンジンを創刊したの。第2号にもすでにとりかかっているわ。

WHITE WALLSは人気に火がついてフォロワーも増えてきているバンド。Poison City Recordsがリリースしたデビュー LPは入手すべきね(けど、このレーベルが手掛ける音楽とレコードって、上位中産階級のためのパンクとハードコアなのよ。トレンディで洒落た感じのやつね)。HALT EVERなんかはこの手のファジーなロウファイ・ポスト・パンク・サウンドから影響を受けているように思うわ。

RobertとMichaelという双子によるLife.Lair.Regrets Recordsはオール・エイジのストレート・エッジ・ハードコア・レーベル兼ディストロ。彼らは数多くの素晴らしいショーを企画していて、海外のバンドを引き連れたツアーも行っている。とても活動的だし凄腕ね。それに、シーンをサポートしたり音楽と関わるよう、他の人たちにも発破をかけているし。彼らのリリースをぜひチェックしてみて。MAN HUNTにFROZEN OVER、IMPACT ZONE、IRON MIND、LIFE'S FATE、STARVATION、NEGATIVE REINFORCEMENT、他にももっとね。

Homeless Recordsは"良質なガレージ、パンク、トラッシュ・ロックンロール、スカッズだけを専門にリリースする"レーベル。CUNTZの1st LPをアナログでリリースしたから、私のアンテナに引っかかったのよね。このレーベルが最初にリリースしたのはBITS OF SHITの「Cut Sleeves」LPで2010年のことだった。メンバーは40代のパンクスなんだけど、やっているのがクソみたいなティーンエイジ・パンクで、国中で暴れまわっていたわ。

それからHomeless Recordsは、前述したような音楽スタイルの、地元のバンドをリリースするようになった。THE STABSやGENTLEMEN、それにSEWERSとかね。

そしてこういったサウンドをうまく市場に売り込んでいるのがAarght! Records。彼らは最近、日曜の午後にポスト・パンクとガレージのショーをCopacabanaで開催しているわ。このレーベルの設立は2007年。OOGA BOOGASやTOTAL CONTROL、UV RACE、CUT SICK、EDDY CURRENT SUPPRESION RING、AUSMUTEANTS、NUNといったバンドのリリースを経て、今ではオーストラリアのポスト・パンクを相当数リリースしている。

歳を食ったパンクスへと至る道をこのまま突き進むと("音楽の玄人"と言った方がいいかしら)、Lexicon Devil Recordsのような国際色豊かなロックンロールだったり、Aztec Recordsのような古いオーストラリアのロックンロール・ミュージックだったり、もしくはそれらの要素をミックスしたShortfuse Recordsがリリースするレコードに注目するようになっていくのよね。Shortfuse RecordsはSTRAIGHTJACKET NATIONの2ndと最新LPをリリースしているんだけど、それも今では6年も前の話し。

Vacant Valleyは盟友とも言えるレーベルをオーストラリア国内にいくつも持っている。それはEternal Soundcheckであったり、Bedroom SuckやRough Skiesであったり。こういったレーベルは一様にポスト・パンクやローファイ、アンビエント・ノイズ、そしてアンダーグラウンド・ポップなどなどのバンドを前面に押し出しているわ。Vacant Valleyの20タイトルにも及ぶリリースは、ディスコグラフィーをリリースしたバンドも含めれば、POP SINGLESにPSY ANTS、CURED PINK、そしてPER PURPOSEにまで及ぶ。

Nihilistic Orbsというレーベルは、主宰者のShaun自身がやっているバンド、CHROME DOMEと共にdregs-of-humanityシンセという新たなシーンを創り出した。それはKRAFTWERKやその手の音楽にも通底する、陰鬱なダンス・トランスであったりシンセ・ポップ、ミニマリスト・ビーツといったサウンドから派生しているわ。Nihilistic Orbsの最初のリリースはJONNY TELAFONEの「Ceremony/The End」7インチで2011年の9月に発売された。その後すぐにテープもリリースされたわね。Shaunは自身のCHROME DOMEの「Cut Ties」7インチもリリースし、オーストラリア中のシンセやゴス・グラム、ポスト・パンク・バンドのリリースがその後に続いていった。REPAIRSにSKY NEEDLE、FORCES、WHITE HEX、NUNといったバンドよ。

やがてNihilistic Orbsが停滞すると、It Recordsが代わりに台頭してきた。より静謐で洗練されたシンセ・サウンドだから、結局シンセ・シーンにはパンクの欠片もなくなっちゃったわ。

最後に、私がオススメしたいローカルなパンク本がリリースされている。『Noise In My Head:Voices From The Ugly Australian Underground』がそれよ。製作に5年もかけられてて、オーストラリアのアンダーグラウンド・ロック・ミュージックのここ10年間を幅広く取り上げているの。

[以下、次号に続く]



NUN
Photo by
Glan Schenau

"FINLAND BOMBS AGAIN!" from POLAND

ポーランドの老舗ファンジン:PasazerのスタッフであるGrzesterがフィンランドのハードコア・バンド:VIVISEKTIOのインタヴューを寄稿してくれました。このバンドを知っている人は多くないかもしれませんが、80年代のフィンランド・シーンの秘話が盛り沢山ですこぶる面白い内容なのです。ただ、一気に読むにはちょっとキツいくらいに長かったので、前編・後編に分けてお送りします。北極圏にほど近い小さな村で生まれたハードコア・バンドの軌跡、ドウゾお楽しみください。
ちなみに、Grzesterは今後もオブスキュアなフィンランドのバンドのインタヴューを送ってくれるらしいので(多分)、乞うご期待!



VIVISEKTIO

VIVISEKTIOはフィンランドのラッピ州北西に位置するアカスロンポロ(Äkäslompolo/北極圏から北に約130キロ)という小さな村出身のハードコア・パンク・バンドだ。彼らは80年代に短期間のみ活動し、世紀を跨いだ眠りを経て2008年に復活を果たした。2011年には待望のLPをリリース、フィンランド国内はもとより、海外でも精力的にギグをこなすようになると、彼らの名前も知られるようになっていったんだ。一昨年にはEPを発表し、そのレヴューはMRRの376号にも掲載された。僕はフィンランドの昔のバンドはどれも好きだし、VIVISEKTIOも大好きさ。ポーランドのPasazerジン、その31号に掲載するためにインタヴューを行ったんだけど、ポーランド語が分かる人なんて極僅かだから、"みんなが読めるよう"、インタヴューをここにも掲載したい。このバンドはチェックする価値が本当にあるよ。そして望むべきは、彼らのギグを企画してもらいたいね!

INTERVIEWED:Grzester [grzester12@poczta.onet.pl]

■フィンランドの北の果てで突如としてパンク・バンドが結成されたなんて、にわかには信じられないね。誰が始めたんだい?そんなイカれた決定をくだしたワケは?

「そうだね、アカスロンポロはスウェーデン国境の近く、ラッピ州の北西にある小さな村さ。北極圏より更に北へ、約130キロも行ったところにある。

そうだな、それは突然のことだったよ。俺はティーンエージャーのときからパンクだった。1979年頃だね。1980年になると、俺はいとことパンク/ニューウェーブ・バンドを結成しようとしたんだ。だけどダメだった。俺たちと一緒にプレイしたがるキッズなんて皆無だったからだよ。俺は村で最初のハードコア・パンク・ロッカーだったんだ。1980年当時、俺はUK SUBS、DEAD KENNEDYS、COCKNEY REJECTS、それにLAMAといった荒っぽいパンク・バンドに夢中だったね。パンクがニューウェーブに鞍替えするのは受け入れがたかったけどさ。1981年になるとDISCHARGEやDISORDER、TERVEET KÄDET、KAAOS、あと、初期のアメリカン・ハードコア・バンドを発見した。こういったバンドのレコードを買う金なんてなかったんだけど、P. TuotantoのVote Vaskoが何百枚ものパンクのレコードを俺や他のパンク・キッズのため、カセット・テープにダビングしてくれたんだ。そうして俺とPekkaは1981～82年頃だったかな、ハードコア・パンク・バンドの結成を改めて企てた。だけど1983年になるまで実現しなかったよ。ドラマーとヴォーカルが全然見つからなかったからね。それに、あの頃の俺たちなんてサイテーのミュージシャンだったしな」

■アカスロンポロには当時、パンクスは何人住んでいたの?村の人口は?君たちみたいな

Photos by Heli Kaulanen







冬なんてマイナス40度になるくらい寒かったから 鋲ジャンなんて全然暖かくなかった

バンドは、村には他にいなかったよね…。

「80年代初頭のアカスロンポロに住んでいたのは、年間を通して200人だけさ。でも春になると何千人もの旅行者がスキーをしにやってくるんだ。君には通じるだろうけど、ポーランドのシュクラルスカ・ポレンバ(Szklarska Poręba)って村に似ているよ。当時、ティーンエージャーは村に15人。だけど、いくつか理由があって、そのうちの10人がパンクだったんだ!そして、君の言う通り、アカスロンポロに他にパンク・バンドなんているわけないね。普通のロック・バンドだっているわけない。アカスロンポロの近くのもっと大きな村には、1979～81年頃にはニューウェーブ・バンドが2つだけいたけどさ。けど、たしかにVIVISEKTIOはここいらじゃ最初のハードコア・パンク・バンドだったよ」

■村でパンク・コンサートが開催されたことはあるのかな?RATSIAやEPPU NORMAALIといったバンドがやって来ることは?

「いや、当時はアカスロンポロでロックのコンサートなんてありえなかった。村から40キロほど離れたところのコラリ(Kolari)には会場があって、そこでならEPPU NORMAALIやRATSIA、VAAVI、PELLE MILJOONAなどといったバンドが演奏していたよ」

■当初はVENDETTAっていうバンド名だったけど、どうして名前を変えたのかな?VARAUSがVENDETTAに改名したせいかな?って、後になって思ったんだけど…。

「うん、最初はVENDETTAだったんだけど、1984年の初頭にVIVISEKTIOに変えたんだ。VARAUSはスピード・メタルになった後に、バンド名をVENDETTAに変えていたよね。俺とPekkaは1985年に開催されたヤコブスタード(Pietarsaari)でのパンク・フェスでVENDETTAのベーシストに会ったんだ。そのとき、俺たちのバンド名は元々VENDETTAだったって話しをしたんだけど、彼は何だか気に喰わない様子だった。俺たちがふざけていると思ったんだろうね」

■パンクのギグに行ったり、パンクスと会ったりはしていた?ロヴァニエミ(Rovaniemi)やオウル(Oulu)とかでさ。

「コラリやペッロ(Pello)では1979～81年頃、パンクやニューウェーブのギグがあったよ。ティーンエージャーの間で、ニューウェーブが人気を博していたときさ。ティーン向けの雑誌で取り上げられていたりね。けど1981年になってその人気に陰りが見えると、もう何もありゃしない。パンクのギグなんて滅多になかった。今でも覚えている。ハードコア・パンクのギグは、ロヴァニエミやオウルでは一年間を通してたったの2回だけしかなかったんだ。それが当時のフィンランドだ!今とは全然違うのさ。

2、3ダースくらいの数のパンクスがラッピ州北部の小さな村に住んでいたから、彼らと連絡を取り合ってはいたね。けど、多くのパンクスが仕事や学校の関係で、ラッピ州北部からロヴァニエミやオウルへと引っ越していった。1987年には、ラッピ州にはシーンなんてなくなっていたよ」

■何年活動していたんだい?多分、"普通"の格好はしていなかったよね?親や教師は君たちにどう対処していた?アカスロンポロの人たちは、君たちのことを変な目で見ていなかった?

「バンドを始めた1983年当時、俺たちは15～17歳だった。80年代初期、俺は"herbert"なスタイルだったけど、他の奴らはハードコア・パンクスでモヒカンだったり、スパイキー・ヘアー、破れた服に鋲ジャンって感じだったんだ。けど冬なんてマイナス40度になるくらい寒かったから鋲ジャンなんて全然暖かくなかったな。俺たちはここいらじゃ初となる、ヘンテコな見た目のハードコア・パンクスだったからみんな驚いていたし、怯えてさえいたよ。モヒカンの女の子なんて、それまで見たこともなかっただろうからね。最初のヴォーカルだったKirsiは、北極圏で初となるモヒカンの女性だったと確信しているよ。親や教師のうちの何人かは理解を示してくれていたけど、何人かはそうでもなかった。ラッピ州は保守的で男っぽいところだからね。80年代当時、若い奴らは18歳になるとロックなんて聴かなくなるんだ。旅行者にこう言われたことがある。"慌ただしいヘルシンキからのどかなラッピ州へせっかく来たっていうのに、君たちみたいな人をこんなところで見たくなかったよ"ってね」

■最初のコンサートのことは覚えている?いつ、どこで、誰とプレイしたのかな?そのイヴェントのポスターは持っている?

「1985年の2月、コラリでだったね。ギグは自治体の青年委員会が企画して、俺たちの地区からは3バンドが出演した。俺たち以外に

パンク・バンドはいなかったよ。4曲だけやったけどひどいもんだった。俺たちは酔ってもいなかったし、外はマイナス30度だったしな」

■コンサートは多くなかったし、ほんの数回、パーティーでプレイしただけだよね。でも君たちにとっては大きな出来事だったはずだ。オーディエンスの反応はどうだった?ポゴ・ダンスは起こったのかな?

「80年代には8回しかギグをやっていないんだ。そうだな、それでもあのギグは大事だったよ、何せ初めてだったから。オーディエンスにパンクスはいなかったし、ポゴ・ダンスなんてありえなかったな」

■ヤコブスタードのフェスは有名だし君たちも出演したよね。素晴らしいバンドの組み合わせだったし、語り草になっている。実際のところ、誰が企画してどれだけの人々がやってきたのかな?

「VIVISEKTIOは80年代当時、ものすごく無名だった。だから名の通ったバンド、RATTUSやTERVEET KÄDET、KAAOSと一緒にプレイできたのは素晴らしかった。Vox Populiがこのフェスを企画したんじゃないかな。80年代後半に、彼らはギグやフェスをいくつか企画していたからね。リエート(Lieto)のパンク・フェスとかね。ヤコブスタード・フェスにはINFERNOやDISORDER、CHAOS UKも呼ぼうとしていたけど全部叶わなかった。INFERNOのドラムは足を骨折して、CHAOS UKは旅費を銀行から捻出できず、DISORDERはフィンランドまで来たけど税関で止められて入国できなかったんだ。古くからの港湾地区であるヤコブスタードには、数百人ものパンクスが集まっていた。フェンスの裏から、多くの普通の人たちがジロジロとパンクスを見ていたよ。まるで動物園の動物を眺めるような感じさ。ヤコブスタードは田舎のとても小さな町だから、みんなこんなに多くのパンクスをそれまで見たことがなかったんだ。俺たちのギグは散々だった。酔っ払っていたし、技術的な困難もあったしね。それでも多くのパンクスは気に入ってくれて、ポゴ・ダンスも巻き起こったぜ」

■その頃のポーランドでは、LPをレコーディングするなんてまず無理な話しだったよ。多くの人たちはコンサートやリハーサル時の音をカセットに録っていたんだ。フィンランドではこんなことしていなかったよね?

「いや、テープに録るのはフィンランドでもよくやっていたよ!80年代のフィンランドでもレコードを作るのはすごくお金がかかったからね。俺たちも、多くの他のバンドがやっていたことを真似たよ。リハーサルをカセット・テープに録音して、それを色んなところに送りつけたのさ。ちっぽけなフィンランドのハードコア・バンドにとって、コンピレーション・テープやジンてのは大きな存在だったからね。VIVISEKTIOはかなりの数のコンピレーション・テープに関わったし、4曲入りのデモ・テープを2本作ったんだ。高校の音楽の先生と一緒にね。けどクソみたいな仕上がりだった。あの先生はVIVISEKTIOのサウンドを、忌々しいDIRE STRAITS(※イギリスの有名なロック・バンド)みたいにしようとしていたんだ!」

■80年代のフィンランドのパンクスはコンサートで飲んだくれていたってよく聞くけど、君たちも同じ問題を抱えていた?

「うん、いつものことだったね。バンドもオーディエンスもひどく酔っ払っていた。けどすべてのバンドが飲んでいたわけじゃない。プロフェッショナルなバンド、RATTUSやTERVEET KÄDETは酔っていなかったし、キチンとしていたな。俺たちはアルコールのせいでいくつかのギグを台なしにしたことがあるし、シラフでやったギグもいくつかあったよ」

■バンドのメンバーには女の子がいたよね?意識的に探していたの?それともアカスロンポロでは必然だったのかな?

「あぁ、バンドには女の子が2人いたよ。Kirsi(ヴォーカル)とSatu(ドラマー)だね。VENDETTAは全員男のバンドだったんだけど、ドラマーとヴォーカルが抜けたんだ。それで女の子と一緒にVIVISEKTIOを始めた。KirsiとPekkaは双子なんだよ。意図的に女性のメンバーを探したわけじゃない、ただ俺たちと一緒にやりたがる奴なんて、アカスロンポロには他にいなかっただけさ。女性のメンバーがいたおかげで俺たちのサウンドはオリジナルなものになったと思っている。ちなみに、VIVISEKTIOには再び女性のメンバー(Maria)が加わっているぜ」

■君たち以外で、メンバーに女の子がいたバンドってRUTTOとPYHAKOULUくらいじゃないかな。他にもいたの?

「その2バンドはよく知られているよね。俺が覚えている限りじゃ、ミエヒッカラ(Miehikkälä)のPRAVDAのベーシストが女性だったくらいだね。PRAVDAは格好良いデモを1985年に録ったんだけど、レコードとしてリリースされることはなかったな」

[以下、後編に続く]

1986年4月　チェルノブイリ原子力発電所事故の数日後にヘルシンキで行なわれた反原子力デモの様子

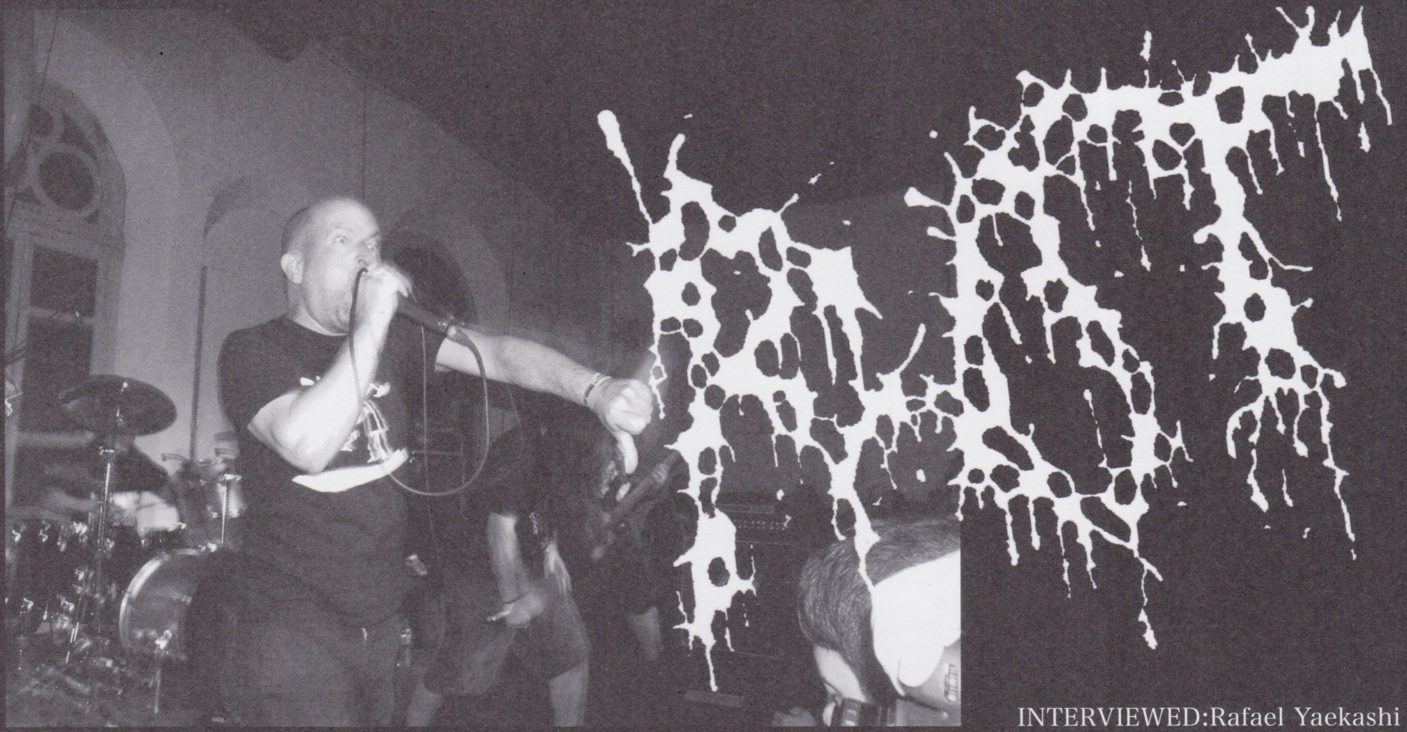




RAFA returned EL ZINE!

愛知〜岐阜を中心にN.E.KやDARGEで活動していたブラジリアン・パンクス、Rafa。幣誌の初期の頃にも寄稿してくれていた彼から先日、数年振りとなるメールが…!

現在はブラジルに帰国し結婚もしたそうですが、レーベル:Karasu Killerは変わらず続けている模様。そして、「また原稿書くよ!」と、以前と変わらないノリで言ってきてくれました。そんなわけで、RafaのEL ZINE復帰戦第一弾となる今回は当地のグラインド・コア・バンド、ROTへのインタヴューです。ただ、既に他のバンドの記事にもノリノリでとりかかっているようでして…。果たして、ブラスト・ビートばりの彼の執筆速度に、幣誌の発行はついていけるのでしょうか(汗)。



INTERVIEWED:Rafael Yaekashi

80年代前半からサンパウロ州のオザスコのアンダーグラウンド・シーンで活動してきたMendigo(ギター)、Marcelo(ヴォーカル)、Rogers"Babú"(ベース)、そしてJúlio(ドラム)の4人が集まり、ROTをスタートさせたのが1990年10月のこと。彼らはそれまでの経験を活かし、他のバンドやプロジェクトと頻繁に手紙のやり取りをしては(インターネットが主流になる以前、それはとても重要な活動だった)、コンサートやファンジン、テープ・トレードに関わっていた。

そうして世界各地のアンダーグラウンド・シーンで活動している、ノイジーで新しいバンドたちと常に連絡を取り合うことにより、ROTのサウンドもまた急速に発展していった。メンバー全員が当時、パンクとハードコア、デスとスラッシュの変化・先鋭化・過激化していくのを聴いていたし、それらから衝撃と影響を受けていたのだ。

歌詞は彼らにとって常に重要な位置を占めており、身の周りで起こる、とても個人的な事柄が主に書かれている。その多くはひどく懐疑的且つ悲観的な傾向にあった。

しかし、BabúとJúlioが1991年の終わりにバンドを去ったため、この最初期のラインナップは一年と少ししか続かなかった。MendigoとMarceloは活動を続けるために新しいメンバーを見つけなければならなかったのだが、この不安定な状態は長年に渡り恒常的なものとなってしまう。

メンバー・チェンジを経ながらもバンドは活動を続けた。数多くのギグに練習、そして世界中のインディペンデント・レーベルを通じて、自分たちのレコードをディストリビューションしていったのだ。

また、1996年から2002年までの間、彼らは3度にも及ぶヨーロッパ・ツアーを敢行している。ドイツやベルギー、フランス、チェコ、スロヴァキア、イタリア、スペイン、オランダ、ハンガリー、オーストラリア、スイス。こういった国々をツアーすることによって、彼らは各国のシーン、そして文化に触れる機会を得たのだった。2008年には様々な理由によりバンドは解散してしまう。しかし4年間の停止期間を経て、再び彼らは共にビールを酌み交わし、対話と練習を重ねていくようになる。そうして2013年、遂に彼らの復活ギグが行われたのであった。

現在のメンバーは以下の通り。Mendigo(ギター)、Marcelo(ヴォーカル)、Rafael(ドラム)、Alex"bucho"(ベース)、Marcolino(ヴォーカル)。

■出身はどこかと人に聞かれたら、僕は"ROTの国の出身だよ"って答えているんだ。僕に最も影響を与えたミンチ・グラインドの一つだからね。だからインタヴューできてすごく嬉しいよ。機会をくれてありがとう。やぁ、Marcelo。調子はどうだい?

「ハハハ!いいぜ、Rafael!サッカーにサンバ、カーニヴァル、汚職にSEPULTURAはどんな感じかな?なんてね。とにかく、俺たちのことを思い出してくれて、そしてインタヴューしてくれてありがとう。ベストを尽くすぜ」

■4年間の休息を終えて、2013年に復活したのはどうしてなんだい?

「MendigoとRafaelが再び一緒にやりたがったから、というのが理由だね。何度か新しいバンドをやる可能性についても話し合ったんだけど、それならROTで復帰したほうがいいってことになったのさ。俺たちはまずAlex"bucho"に声をかけた。奴はすぐに了承してくれたから、Marcolinoが加入するまでの間、ずっとリハーサルができたんだ。全ては急いでやったことではなく、自然に起こったことなのさ。復活してからというもの、俺たちはショーをこなして新しい曲も書いているぜ!」

■現在のROTのメンバーは誰なの?もっとラインナップについて聞かせてよ。

「Mendigo(ギター)と俺(ヴォーカル)が1990年から残っているオリジナル・メンバーで、Alex(ベース)は1995年から2002年の間も俺たちと一緒にやっていたんだ。Rafael(ドラム)は2004年からのメンバーで、Marcolino(ヴォーカル)がROTにとっては唯一となる新顔さ。だけどMarcolinoはDESECRATIONやDEADMOCRACYといったバンドでも活動していたからベテランでもあるね。このフォーメーションはちょうどいいバランスなんだよ。MendigoとAlex、そして俺は40歳を超えてて、RafaelとMarcolinoはまだ30代。ユーモアのセンスがある奴もいれば、あけすけで不躾な奴もいるし、真面目で凝り性の奴もいる。そういった要素のどれもが作曲だったり、何か決定を下さないといけないときの助けになっているんだ」

■歌詞のテーマは何なのかな?どういう過程を経て書いているの?

「作られた楽曲をもとに、歌詞を組み込んでいくのさ。歌詞を書くのに適した機会が訪れたとき、サウンドに合うように書いていく。おかしな話しに聞こえるかもしれないけど、俺にとっては唯一の最良の方法なのさ。テーマは基本的に変わらない。正気を失った世界、人類が存在する潜在的な必要性、人生における別離と再会、反抗と俺たちの状況の不一致、等だな…。もっと日常的な内容の歌詞もあるけどね」

■もうすぐリリースされるROTの2枚組CD『Old Dirty Grindcores II』について聞かせてよ。

「このアルバムは4つのレーベルからリリースされるんだ。Karasu Killer Records(君のレーベルだね)とEquivokke Records、Power It Up Records、それにGive Praise Records。150トラック、152曲入りの2枚組CDになるだろうね!どの曲も1991年から2007年の間にスタジオでレコーディングされたものだよ。でもこいつはROTのディスコグラフィーとは違うんだ。収録しきれずに漏れた曲もたくさんあるからね。だけど、1991年のデモに初期の7インチ2枚を丸ごと収録して、更に『Old Dirty Grindcores』には収録できなかった(収録スペースが足りなかったんだ!)楽曲も追加して、できる限りの曲をこの2枚のCDに詰め込んだ。発売は今年の9月か10月を予定しているよ」

■『Old Dirty Grindcores II』以外に予定しているリリースは?

「ポーランドのSelfmadegod Recordsが、ROTのアルバムCDが3枚入ったボックス・セットをリリースするよ。全てリマスターされて、いくつかのオマケもついて、ボックスとジャケットのアートワークはオリジナルなものになるんだ。それと、12曲ほど新曲をレコーディングしてある。ブラジルではAbsurd Recordsから7インチとして、ヨーロッパではSelfmadegod RecordsからミニCDとしてリリースされる予定さ」

■君たちはバンドで生活しているのかな?それとも"生業"を持っているの?ブラジルでバンドをやるにあたって、何が最大の困難になっている?

「俺たちは自分たちのやれることをやるまでさ!Alexはドライバーとして働いてて、ツアーの時には運転してくれるんだ。仕事としては、みんなを空港やホテルなどに連れていっているよ。つけ加えるなら、彼はレーベルもやっている。Bucho Discosというレーベルだよ。Mendigoは教師で、Marcolinoは病院で働いている。俺はAbsurd Recordsというレーベルを18年間、そしてExtreme Noiseというレコード店を12年やっている。みんな、どうにかして生き延びている感じだね。Rafaelだけが唯一失業中なんだ。ここでバンドをやるのはいつだって大変さ。だけどみんな悩んじゃいないよ。ずっとバンドをやってきたから、ROTに通俗的な意識なんて持っていないからね!」

■バンドとして最近ショーはやっている?ブラジルや海外へのツアーの予定は?

「新しいEPのレコーディングが完了するまでショーはやらないんだ。ツアーの予定もないな」

■現在のブラジルは新しいグラインド・バンドをたくさん輩出しているよね。この復興についてどう思っている?君たちにとっては意外な出来事だったりするのかな?

「率直に言えば、グラインドは俺が聴き、そして追い求めたサウンドなんだ。新しいバンドの波が来ているのは分かっている。その多くが才能に溢れていて、正確無比で"現代的"なスタイルさ。俺は何だか追いやられている気分になるよ。今起こっていることをどう評価すべきか分からないしね」

■ブラジルのバンド以外だと、どんなのが好きなのかな?

「年寄りじみているけど、俺は基本的に昔のバンドを聴くのが好きなんだ!」

■読者に何かメッセージはある?

「読んでくれて、そして興味を持ってくれてありがとう。そしてRafaelのサポートにも感謝しているぜ」

コンタクト　www.rot-official.com







LASHING SPEED DEMONS VOL.19

EL ZINE的に振り返るグランジ・イヤーズ

はい、なんか最近、ロックの歴史をたどるみたいな連載になってきましたが(笑)。グラム・ロック、New Wave Of British Heavy Metal、LAメタルと来て、今度はグランジです。何を今更という感じもあるし、カート・コベイン(NIRVANA)が死んでから21年とタイミング的にも中途半端だが、むしろNWOBHMやLAメタルよりもずっとEL ZINE向きと言えましょう。グランジといえば、何しろハードコアとの結び付きを外しては考えられない音楽だし。

TEXT:大越よしはる

グランジは1日にして成らず

グランジあるいはグランジ・ロックと言って、ほとんどの人が真っ先に連想するのはやっぱりNIRVANAじゃないだろうか。そしてカート・コベイン(Cobainを"コバーン"とは読めないぞ)と、彼が着ていたフランネルのシャツ(いわゆるグランジ・ファッション)。

…確かにNIRVANAはグランジを代表するバンドだし、グランジを超越してロック史上に残るバンドにもなったが、当然のことながらある日突然NIRVANAが出現してグランジというジャンルを作り上げたワケではない。NIRVANAがブレイクを果たすまでに様々な流れがあったし、当時もそれ以後もグランジの渦中や周辺に様々な動きがあった。

NWOBHMについて"パンクのフィルターを通過したハード・ロック"みたいな言い方があったが、それに倣ってもの凄くざっくりした言い方をしてしまえば、グランジというのは"ハードコアのフィルターを通過したハード・ロック"ということになると思う。もちろんそうとばかりは言い切れないバンドも多かったが、ともあれハードコアとハード・ロックは、グランジを理解する上での大きな要素と言えるだろう。

ただ、NWOBHMがパンクの時代を通過しながらもあくまでハード・ロック/ヘヴィ・メタルのサブジャンルであったのに対して、グランジは元々ハードコアやパンクを演っていたような連中がハード・ロックのようにも聴こえる音楽を演り出した、というべき音楽で、従来のハード・ロック/ヘヴィ・メタルの亜種ではなく、基本的にパンクの流れにある音楽だった。だからグランジ系のバンドがヘヴィ・メタル専門誌で取り上げられることはあまりなかったし、むしろDOLLなんかに載ることの方が多かったワケだ。

ハードコアとハード・ロックがクロスした…という点でグランジの源流として挙げられるのは、なんと言ってもBLACK FLAGだろう。凄まじいエナジーと疾走感溢れるハードコアを演っていた1stアルバム『DAMAGED』(1981年)から一転、2nd『MY WAR』(83年)で彼らが見せた世界は、ハードコアとBLACK SABBATH(あとTHE STOOGESも)をポスト・パンク的な感覚で融合したような、ヘヴィでカオティックなモノだった。NIRVANAをはじめ、グランジと呼ばれた多くのバンドがBLACK FLAGの影響を標榜している。

BLACK FLAGがグランジに及ぼした影響は、音楽面のみに留まらない。BLACK FLAG…というか、ギタリストでありリーダーだったグレッグ・ギンが主宰していたレーベル・SSTの存在も非常に大きなモノだった。BLACK FLAGと並んでグランジあるいはオルターナティヴ(一般に"オルタナティヴ"と表記されるが、ここでは発音記号に近い"オルターナティヴ"とします)に多大な影響を与えたHÜSKER DÜを擁し、更にはSONIC YOUTHやDINOSAUR Jr.、SOUNDGARDEN、SCREAMING TREES、SKIN YARDといったバンドをリリースしたSSTは、サブ・ポップやアンフェタミン・レプタイルといった"グランジ・イヤーズ"を代表するレーベルが勃興する以前に、グランジ隆盛への道筋を付けたレーベルと言える。J・マスシス(DINOSAUR Jr.)がバンド結成当初、SSTからリリース出来たらいいなと思っていた、というのは有名な話だ。

もうひとつの源流は、ニール・ヤングだろう。マイナー系のワビサビに満ちたメロディと轟音ギターの組み合わせ…という点では、後のグランジ/オルターナティヴの遙か先を行っていた人物だ(もちろん轟音だけの人ではないんだが)。

これまたJ・マスシスを引き合いに出すと、DINOSAUR Jr.の音楽性自体、ニールとハードコアの合体のようなモノをイメージしていたという。SONIC YOUTHとツアーしたり、PEARL JAMとアルバムを作ったりと、ニール自身グランジ/オルターナティヴ系のバンドとの交流は深かったし、1991年のライヴ盤『WELD』は、まさにニール版グランジ・アルバムとも言うべき爆裂ぶりを聴かせる。

そして、ハード・ロック。BLACK FLAGが取り込んでみせたBLACK SABBATHはもちろんのこと、カート・コベインがフェイヴァリットに挙げていたAC/DCや、SOUNDGARDENを聴けばその影響は明らかなLED ZEPPELINなど。LAメタルでもなくDEEP PURPLEなどの様式派ハード・ロックでもなく、R&Rをベースに拡散的な破壊力をふるうようなハード・ロックからの影響が、グランジを形成する一要素だった。NIRVANAの1stアルバムでエンジニアを務めたジャック・エンディーノ(SKIN YARD)は、同時期にBLUE CHEERをプロデュースしていたりも。

ともあれ、グランジと呼ばれたバンドの多くは、ハード・ロック的なラウドさをまとうことになる。それは様式としてのハード・ロックではなく、文字通りの"ハードなロック"として。かつてルー・リードはTHE VELVET UNDERGROUNDの2ndアルバム『WHITE LIGHT/WHITE HEAT』を"ヘヴィ・メタル"と呼んだが、それと同じようなベクトルで新たなハード・ロック/ヘヴィ・ロック/ラウド・ロックが形成され、それらは"本流"のハード・ロック/ヘヴィ・メタルにも影響していくことになる。そしてその流れは、他にも幅広く伝播していくことに。

今更ながらひとつ言っておくと、パンク由来のラウドでエクストリームなロックが、ハード・ロック/ヘヴィ・メタルに接近していた…というのは、グランジの専売特許ではなかった。言うまでもないことだが、80年代半ばにはDRIをはじめとして、ハードコアがスラッシュ・メタル的な要素を取り入れてクロスオーヴァーと呼ばれる動きが盛んになっていたし、DYSやSSDやGANG GREENやPOISON IDEAといった多くのハードコア・バンドも、活動を経る毎にハード・ロック色を強めて行った。この頃BLACK FLAG同様にハードコアとBLACK SABBATHを融合さ

せる試みをしていたバンドの代表格として、CORROSION OF CONFORMITYを挙げておこう。

元BLACK FLAGのヘンリー・ロリンズや元MISFITSのグレン・ダンジグなど、ハードコアのバンドでフロントを張っていたシンガーたちが、自身のバンドでは多分にハードコアではなくハード・ロック/ヘヴィ・ロック的なアプローチを見せていたのも興味深いし、エレクトロ・ボディ・ミュージックに発したMINISTRYのようなバンドさえも、活動を続けるうちにメタリックなギターを取り入れていたり。ハード・ロックやヘヴィ・メタルのエッセンスを取り入れてラウドでエクストリームなロックを創造していく…というのは、グランジに限らず時代が求めていた流れだったと言える。

逆にハード・ロック/ヘヴィ・メタルのサークル内でも、ハードコアの影響を取り入れたスラッシュ・メタル勢はその速さとノイジーさを研ぎ澄ましていた。一方、BLACK SABBATHを拡大解釈することで様式的なメタルから逸脱して行ったドゥーム・メタル勢も見逃せない。

そして、ハードコア。NIRVANAに多大な影響を与えた、グランジの祖とも言えるバンドのひとつに、ワシントン州アバディーン出身（カート・コベインと同郷）のMELVINSがいる。一般にスローでヘヴィな音楽が特徴とされているMELVINSだが、結成当初の彼らはハードコアをプレイしていたという。

DINOSAUR Jr.のJ・マスシスがボストンのハードコア・バンドDEEP WOUND（MINOR THREATとDISCHARGEの影響を受けていたとか）でドラムを叩いていたこと、NIRVANAのドラマーとなったデイヴ・グロールが後期SCREAMに在籍していたことは有名だ。そのデイヴはNIRVANA解散後にFOO FIGHTERSでブレイクするが、末期NIRVANA～初期FOO FIGHTERSにはGERMSのギタリストだったパット・スメアが参加していた（GERMSがいわゆるハードコアかというとちょっと違うが）。グランジ系の中ではガレージ寄りと目されていたMUDHONEYもTHE DICKSの「Hate The Police」をカヴァーしていた。一方でパワー・ヴァイオレンスの祖たるNEGATIVE APPROACHのヴォーカリストだったジョン・ブラノンは、バンド解散後にグランジ寄りのLAUGHING HYENASを結成している。

…そういった具合に、グランジ/オルターナティヴのバンドのメンバー、あるいはそれらに影響を与えたバンドのメンバーが、音楽活動の初期にパンク/ハードコアをプレイしていたという例は多い。いわゆるグランジに限らなければ、メロコアの祖とも言えるHÜSKER DÜも、活動につれてルーツ・ロック的な側面を露わにして行ったTHE REPLACEMENTSも、1stアルバムの時点では激速ハードコアだった。80年代後半～90年代アメリカのラウドなロックは、音楽性の差異こそあれ多くが根底にパンク/ハードコアのスピリットを持っていたと言える。

パンク/ハードコアの影響についてもうひとつ挙げておくと、80年代のアメリカン・ハードコア勢が、UKハードコア勢と違ってカジュアルなファッションだったこと。いわゆる“グランジ・ファッション”がその流れを受け継いでいたことは、間違いないだろう。

1988：THE YEAR GRUNGE BEGAN

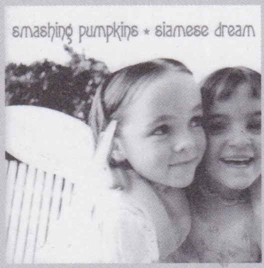
BLACK FLAGが『MY WAR』をリリースしたのは1983年。NIRVANAが『NEVERMIND』をリリースしたのが91年。8年の間に、様々な

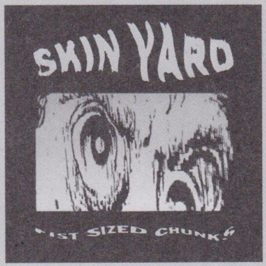




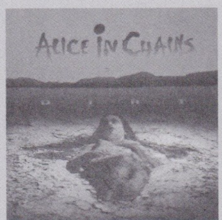


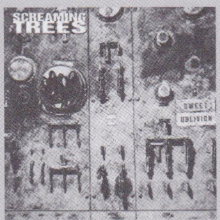


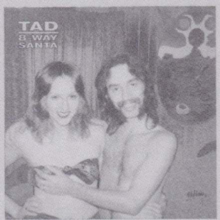


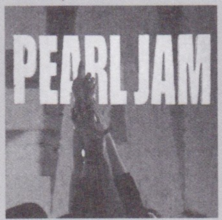




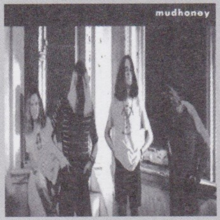












モノが醸成されていった。

個人的に、アメリカでなんだか新たな動きが起こっているぞ、と思わされたのは、80年代前半〜半ばのことだった。ニューヨークのSWANSの2ndアルバム『COP』(84年)、シカゴのBIG BLACKの1stアルバム『ATMIZER』(86年)、ニューヨーク(結成されたのはワシントンDC)のPUSSY GALOREの編集盤『GROOVY HATE FUCK』(87年)といったあたりか。そしてテキサスのBUTTHOLE SURFERS(このバンドも初期はハードコアを演っていたらしい)や、もちろんニューヨークのSONIC YOUTHも。音楽性は様々で、このあたりの全部が直接グランジへの流れにあったワケではないが、後のグランジ勢に通じる要素として共通していたのはその突き抜けたノイジーさだった。80年代にこういったバンドが一種地ならしのような役割を果たしたことで、その後に出てきたグランジは単なるハード・ロックの焼き直しではないサウンドをまとうことにもなった、と思う。

特にドラムが打ち込みだったBIG BLACKは、ハードコアとグランジの橋頭保となったばかりではなく、MINISTRYを筆頭としたインダストリアル/エレクトロ・ボディ・ビートとヘヴィ・メタルを股に掛けるような連中に大きな影響を与えることに。更にBIG BLACKのスティーヴ・アルビニは、NIRVANAやJESUS LIZARD、PIXIESなど、グランジとその周辺のバンド群のプロデュースやエンジニアリングを数多く手掛けることになる。

そしてボストン出身のDINOSAUR Jr.が(念願かなって)SSTからリリースした2ndアルバム『YOU'RE LIVING ALL OVER ME』(87年)が、個人的には決定打だったと思う。ダルな歌唱に反したスピード感、マイナー調ながらキャッチーなメロディに、とんでもなくノイジーで野放図なギター。リアルタイムでグランジの前夜を感じた人たちはそれぞれにきっかけがあったと思うが、俺にとっての切り口はDINOSAUR Jr.だった(SONIC YOUTHの88年作『DAYDREAM NATION』を筆頭に挙げる人も多いだろう)。

そして1988年。SSTからSOUNDGARDENの1stアルバム『ULTRA MEGA OK』がリリースされる。このアルバムこそがグランジの起点だった…ということに異を唱える人は少ないだろう(もっとも、当時まだ"グランジ"という呼称はなかったが)。音楽性自体は限りなく往年のハード・ロックに近かったが、そこにはポスト・パンク的な感覚と、80年代アメリカン・アンダーグラウンド勢が醸成してきたノイジーさ…が時代に即して組み込まれていた。アルバム・タイトルがIGGY & THE STOOGESのライヴ・アルバム『METALLIC K.O.』を連想させたのは、偶然ではなかっただろう。

同じ88年には、伝説的なプレ・グランジ・バンドGREEN RIVERから派生したMUDHONEYが、サブ・ポップからミニ・アルバム「SUPER FUZZ BIGMUFF」でデビュー。日本ではSONIC YOUTHと交流があるバンドとして注目されたが、他のグランジ/オルターナティヴ勢ほどのラウドさやヘヴィネスはなく、ガレージ・パンクとハード・ロックを混ぜてブルーズを放り込んだようなアクの強い音が特徴だった。

そんなワケで、88年こそがグランジの起点といえるだろう。この年には、NIRVANAもサブ・ポップからデビュー・シングル「Love Buzz」(「Venus」で有名なTHE SHOCKING BLUEのカヴァー)をリリースしている。

…サブ・ポップはもちろん、グランジ・ブームを押し上げたシアトルのレーベル。しかし最初にファンジンとしてスタートしたのは1979年で、歴史は意外と古い。

活動初期よりファンジンにカセットテープを付けたりしてきたサブ・ポップだったが、80年代半ばからはレーベルとしても機能するようになる(GREEN RIVERをリリースするためだったとか言われている)。86年にはスティーヴ・アルビニ、SONIC YOUTH、NAKED RAYGUN、SCRATCH ACID、WIPERS他…といった、いかにもグランジ前夜な顔ぶれを収録したオムニバス『SUB POP 100』をリリースしている。そしてグランジ起点の年たる88年にはNIRVANA、MUDHONEY、SOUNDGARDEN、GREEN RIVER、TAD、SCREAMING TREES ら錚々たるメンツが収録された『SUB POP 200』をリリース。そしてこの頃から、アンダーグラウンドな存在だったそれらのバンド連中が急速に注目を集めて行くことになる。

そして1989年。SOUNDGARDENがアルバム『LOUDER THAN LOVE』でA&Mからメジャー・デビュー。グランジ系のバンドがオーヴァーグラウンドに浮上した瞬間だったとも言える。

同じ89年にはMUDHONEYもサブ・ポップから1stアルバム『MUDHONEY』をリリースし、NIRVANAもサブ・ポップから1stアルバム『BLEACH』をリリース。ALICE IN CHAINSが活動を開始したのもこの年だった。

この時点で、これらのムーヴメントにはまだ名前がなかった。そして、このあたりの動きに最初に注目したのはアメリカではなくイギリスのメディアだった。グランジがブームとなるきっかけとなったのは、当時のシアトル周辺のバンド群を"Grungy"と表現したMELODY MAKER誌の特集記事だったらしい。

そして1990年。80年代初頭から活動し、NIRVANAをはじめとするグランジ勢に絶大な影響を与えてきたSONIC YOUTHが満を持してメジャー契約、DGCからアルバム『GOO』をリリースする。

91年1月、『GOO』に伴って2度目の来日を果たしたSONIC YOUTHを渋谷公会堂で観た。確かにノイジーだったし、サーストン・ムーアのロック・スター然としていないたたずまいには彼がパンクの根っこを持っていることを感じた。一方で印象的だったのは、彼らのノイズが実に見事にコントロールされていたことと、サーストンがニューヨークのあんちゃん風のたたずまいでありながら強烈なカリスマ性を放っていたことだった。

そしてSONIC YOUTHらに多大な影響を受けたグランジ勢も、ただノイジーなだけではなかった。パンクな衝動を大事にしながらも、その衝動を単なるノイズとして垂れ流してしまわずに、絶妙にコントロールしていたバンドが多かった。その代表格がNIRVANAだったと言える。カート・コベインはギターをノイジーに鳴らす怒れる若者であると同時に、極めて優秀なポップ・ソングライターであり、そして類まれなカリスマ性を持っていた。

華美なヘア・メタル勢やMTVポップではなく、疲弊したアメリカ(当時のアメリカといえば、湾岸戦争の時期)のリアリティにふさわしい、等身大でかつエクストリームな音…後に"ジェネレーションX"(ビリー・アイドルのバンドではない)と呼ばれることになる当時の若い野郎どもが待ち望んでいたのは、そういう音だったのだと思う。そしてそんな時代の中に、秀逸なソングライティングとコントロールされたノイズで斬り込んでいったNIRVANAは、見事に時代の風をつかむこととなる。

1991:THE YEAR PUNK BROKE

地元シアトルの盟友SOUNDGARDENによって、道は出来ていた。大先輩SONIC YOUTHの後押しもあった。そしてSONIC YOUTHと同じDGCと契約したNIRVANAは、1991年にメジャー・デビュー作と

なる2ndアルバム『NEVERMIND』をリリースする。全米チャートで1位を獲得したこのアルバムと、シングル「Smells Like Teen Spirit」については、もう多くを語るまでもないだろう。

改めて繰り返すが、グランジ勢の根っこにはパンクがあった。…大半が衝動任せだった70'sパンクは、小国イギリスでは瞬時に一大ムーヴメントとなったが、広いアメリカではシーンを覆い尽くすような大きな波にはならなかった。しかし15年ほども経って、衝動に発するノイズをコントロールする術を身に付けた若い野郎どもが、それでもパンクの根っこは持ったまま、アメリカで全国規模の商業ベースに乗っかる時がやってきたワケだ。70年代末からシーンを見続けてきたサーストン・ムーアは、91年を"The Year Punk Broke"と呼んだ。サーストンにとって91年とはグランジ・ブームの年ではなく、パンク・ムーヴメントが遂にアメリカを席巻した年…だったのだと思う。

『BLEACH』以前はSOUNDGARDENやMUDHONEYの後に出てきた後続バンドのひとつ、みたいに見られていたNIRVANAだったが、1991年からは一気にシーンの中核となったばかりか、グランジを超越して各方面から注目されるようになる。一方で、グランジと呼ばれるバンドが続々と浮上することに。

GREEN RIVERから派生したもうひとつのバンド・MOTHER LOVE BONEがエディ・ヴェダー（ヴォーカル）を迎えてPEARL JAMと改名し、1stアルバム『TEN』をリリースしたのも91年だった。他のグランジ勢に較べると生真面目なハード・ロックという感じだったが、すぐに人気を得る。

そして同じ91年、SOUNDGARDENは3rdアルバム『BADMOTOR FINGER』を、MUDHONEYも2ndアルバム『EVERY GOOD BOY DESERVES FUDGE』をリリースしている。そしてこの頃には、以前から活動していたバンドも含め、TAD、SKIN YARD、SCREAMING TREES、LOVE BATTERY、ALICE IN CHAINS、COFFIN BREAKといった連中が音楽雑誌やファンジン、フリーペーパーの誌面を賑わせるようになる。

NIRVANAをはじめとする多くのグランジ・バンドがシアトル及びその近郊の出身で、かつサブ・ポップからリリースしていたせいで、グランジといえばシアトルでサブ・ポップ…なイメージは広く流布した。しかしもちろんそれだけではなかった。一連の動きは既に全国規模だったし、ALICE IN CHAINSやPEARL JAMのようにいきなりメジャーからデビューするバンドも出て来ていた。91年にはシカゴ出身のSMASHING PUMPKINSも1stアルバム『GISH』をリリース、その後人気バンドへと成長していく。

そして、当然ながらグランジの影響は周囲に波及し、拡散した。従来ならパワー・ポップ/ギター・ポップの範疇に収まっていたであろうマシュー・スウィートは、アルバム『GIRLFRIEND』（1991年）で豪放かつノイジーなギターと甘酸っぱいメロディを同居させることに成功している。コレなどはグランジとの共鳴なくしてはあり得なかったと思う。遠くスコットランドからも、英国パワー・ポップとDINOSAUR Jr.あたりの影響を融合したTEENAGE FANCLUBが登場している。一方で、NIRVANAに多大な影響を与えながらポップさなどはかけらほども持ち合わせていなかったMELVINSも、この頃にはメジャー契約を果たしている（その後ドロップするが）。

それらの動きが単なる流行への便乗ではなく時代の必然だったことは、スラッシュ・メタルの代表格だったMETALLICAがアルバム『METALLICA』（91年）をリリースしたことに象徴されていると思う。それまでのスラッシュ一直線から大幅な方向転換を果たした『METALLICA』がグランジの物真似ではなかったことは、このアルバムがNIRVANAの『NEVERMIND』よりも半年近く前にリリースされていたことからも明らかだ。BUDGIEやDIAMOND HEADといった英国ハード・ロック/ヘヴィ・メタルをカヴァーする一方でKILLING JOKEやANTI NOWHERE LEAGUEをカヴァーしていたMETALLICAにとって、この頃の音楽性の変化は変節でも何でもなかったに違いない。

当時、多くのヘヴィ・メタル・バンドも時代の音を取り入れようとグランジ寄りのアプローチを試みたが（DOKKENやDIOあたりまでも…）、成功したバンドはほとんど皆無で、新しいファンもつかめず、旧来のファンからも酷評された。根っこにパンクがない連中がスタイルだけ真似ても、元々パンク/ハードコアが好きだったMETALLICAのようになれるはずもなかったのだ。

MUDHONEYのメンバーは後に別プロジェクトでTHE SONICSのカヴァー・アルバムを作ったりもしているが、ガレージ・パンク勢の一部もこの時代にはグランジに近い所にいた。サブ・ポップがSUPERSNAZZやビリー・チャイルディッシュなどのガレージ勢をリリースしていたことも大きかったと思う。代表格はワシントン州ベリンガムのMONOMENだろう。一般的にはガレージに分類されることが多いバンドだが、実のところかなりグランジ寄りの音を出していた（92年に来日した時のライヴを観たが、音の馬鹿デカさが印象的だった）。

THE DAYS AFTER

1992年にはALICE IN CHAINSが2ndアルバム『DIRT』をリリースしてブレイク。MUDHONEYも3rdアルバム『PIECE OF CAKE』で遅ればせながらリプリーズからのメジャー・デビューを果たしている。

続く93年にはPEARL JAMが2ndアルバム『Vs.』を、SMASHING PUMPKINSが2ndアルバム『SIAMESE DREAM』を、そしてシーンの中核たるNIRVANAは3rdアルバム『IN UTERO』をリリースして、それぞれ高い評価を得る。

更に94年にはSOUNDGARDENが4thアルバム『SUPERUNKNOWN』をリリース。90年代前半、グランジ/オルターナティヴ勢はアメリカのロック・シーンを席巻していた。

しかし、本来文字通りオルターナティヴであったはずのノイジーなロックがメインストリームに躍り出たことによって、その主役（？）だったはずのカート・コベインは、衝動と商業の狭間であまりにナイーヴな神経を焼きつかせてしまっていた。そして94年4月、消耗の果てにカートが選んだのは、ショットガンによる自殺というあまりにも衝撃的な末路だった。

カート・コベインの死を境に、ブームとしてのグランジは終わったと言ってもいいのかも知れない。そしてカートが亡くなった94年、グランジに対する反動のような形でブレイクを果たしたのがGREEN DAYの『DOOKIE』であり、OFFSPRINGの『SMASH』であり、RANCIDの『LET'S GO』だったのでは、と思う。それらの音楽は、グランジに（特にNIRVANAに）顕著だった過度とも言える内省とは無縁だった。

SOUNDGARDENをはじめ、先に名を挙げたバンド群もその多くが解散してしまっている。しかしグランジ・ブーム以降、アメリカのロック・シーンが様変わりしたのは確かだ。相変わらずの一てんきとも言えるポップスがチャートの上位を占めることが多いのはまあ当然と言えるのかも知れないが、一方でラウドなロックは一定の支持を集め続けている。それは、パンク/ハードコアを通過したグランジ/オルターナティヴの影響がアメリカのロック・シーン（そして聴き手の意識）を変えてしまったから…という気がしないでもない。

CROSSING THE RIVER

密入国体験記

前号で掲載させてもらったNYのラティーノ・パンク・バンド、DISCHAKA。そのメンバーでメキシコ出身のLuisが、自身の密入国体験記を寄せてくれました。とても興味深い内容です。
情報も物流も、人の移動もとっくにワールドワイドになっていて、今後は増々、国や国境という概念が希薄になっていくのでしょう。それに伴うメリットとデメリット/利潤を貪る側と使い捨てられる側…なんて愚にもつかないことをボンヤリと考えさせられました。
読んだ方がそれぞれに、何かを考えるキッカケになれば幸いです。



Nadie es ilegal

違法だからなんだ

TEXT:Luis　TRANSLATED:ヒロシ　PHOTO:Jjca



俺の物語はメキシコ・シティから始まる。俺はそこで生まれたんだ。初めて国境を渡ろうとしたのは、俺がかなり若かった頃の話しさ。そんな俺も今や、33歳になった。

俺の家は、メキシコではよくある大家族だったよ。どこの家にも、5人も6人も子供がいて、ストリートは子供たちで溢れかえっていた。そしてそのほとんどは貧しい家庭の子供たちだった。

俺はイスタパラパという凶悪犯罪と貧困で知られた地区の出身なんだけど、子供の頃は街は危険だから夜はほとんど外に出なかったな。地元の新聞社の車がいつも街を走り回っていたのを覚えているよ。強盗があったとか、なんか事件が起きたとかでさ。実際、俺の近所でも、事件に巻き込まれて殺された人もいたし、誰かを殺したヤツもいた。

そんな環境で育ったから他の子供たちと同様に、ヴァイオレンスな場面を目にすることもあったけれど、俺たちは思いっきり遊ぶことで厳しい現実を忘れようとしていた。

そんな頃、Sekoっていう地元の友達の一人がEl　Chopoっていうパンクのフリーマーケットを教えてくれたんだ。一日中たくさんの人が出入りしていて、そこでたくさんのパンクス、メタルヘッズ、ロッカーズを見て、俺は完全に心を奪われたな。

とにかくもっとパンク・ロックについて知りたかったから、俺もしょっちゅうテープを買いに行っていた。そこで新しい友達もたくさんできたし、毎週土曜は音源を買ったりトレードしたあと、ショーにも行っていたよ。その頃のショーはすごく激しくて、剥き出しだったね。

その当時、進学したり仕事を見つけるのはメキシコではすごく難しかった。メキシコの所得はその頃とても低くて(今もだけどね)、みんながみんな学校に行けるような状況ではなかったんだ。メキシコで教育を受けるのはものすごく金がかかるし、子供を学校に通わせる余裕があるのなんて、一部の人たちだけなのさ。

俺も、何年か仕事を探そうとやってはみたけどうまくいかなくて、このままメキシコにいてドラッグに溺れてしまう前に、アメリカに移住することを考えた。アメリカに移住するってことはすべてを捨てることになるし、それは簡単なことじゃない。でも、家族の何人かはニューヨークに移住していたし、自分もそこに行きたかったんだ。俺は決めた。

とはいえ、メキシコ人がアメリカのビザを取得するのは不可能に近い。ビザを取るためにはアメリカ政府の要求を満たさないといけないからね。例えば、銀行口座にはたくさんの預金がなければいけないし、もしくは、持ち家があるか、自分でビジネスをやっているか、そんなことを証明しなければならないんだ。

俺の家族や俺自身、そんな基準には何も達しちゃいないから、俺は別の手段でアメリカに渡ることに決めた。そう、イリーガルな手段で。

俺の家族の何人かはすでにアメリカに移住していたから、まずは彼らに、信用できる人間を紹介してくれるよう頼んだ。しばらくして、俺は信頼できるコヨーテ(一緒に砂漠を歩いてアメリカまで案内してくれる人物)を見つけた。コヨーテはメキシコ・シティから少し離れた田舎町にいたんだ。その辺りはさらに貧困がひどくて、仕事なんて尚更ないような場所だから、コヨーテたちはそんな町に客を探しに行くんだよ。

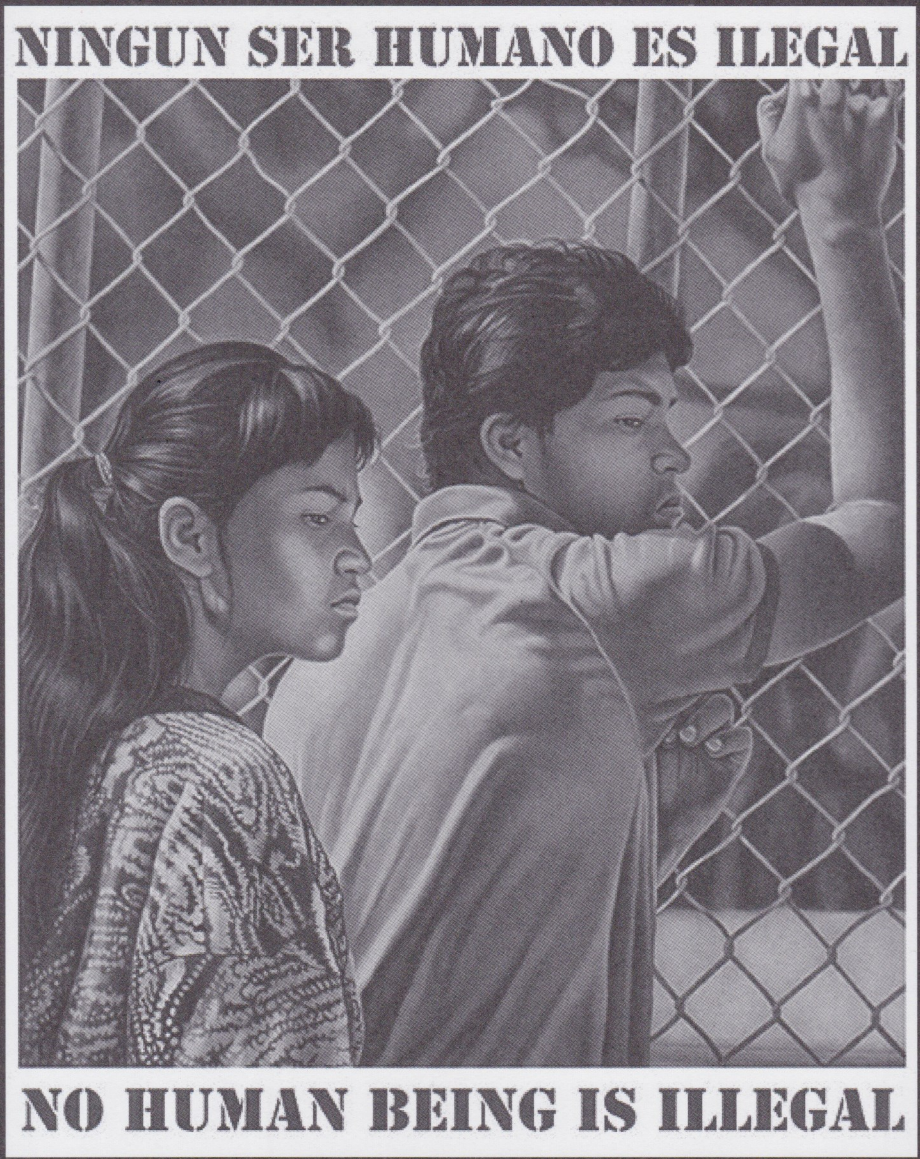
コヨーテの提示してきた条件は$2,000。それでアメリカ国内まで案内してくれるという。アメリカに入ったところで半分の$1,000を、最終目的地であるニューヨークに着いた







El Chopo



ところで残りの$1,000を払うことになった。悪くない取り引きだったよ。

出発の日、メキシコ・シティ空港で俺はコヨーテと落ち合い、他のクロスボーダーたちと共にメキシコのソノラへ飛んだ。ソノラからはコヨーテの指示に従い、何組かに分かれ、別々のルートを取ることになった。Bebeってあだ名の男と俺はバスターミナルへ行き、カボルカという国境近くの町に移動した。カボルカの町に着いてバスのドアが開き外に出た瞬間、そこには自分とコネのあるコヨーテのところに連れて行こうとする、たくさんの客引きが待っていたよ。

そいつらは俺たちの後をついてきて、俺たちを無理やり車に乗せようとしたんだ。俺は拒んだけど、Bebeはそいつらの車に乗せられてしまった。俺は車を追いかけて、どうやったのかは覚えていないけど、Bebeを車から引きずり出したんだ。そうして、俺たちはバス停に戻った。そこがそのあたりでは唯一安全な場所だったし、そこからどうやって移動するかを考える必要もあったから。しばらくして、バス・ステーションの外でタクシーを見つけた。ここから去り、そして同じグループのみんなが待っているホテルまで移動するチャンスだったよ。ホテルに着いて、"今週は国境を越えるにはヤバい。一週間待て"と伝えられた。やることは何もなく、時間の経つのがとても遅く、人生で一番長い一週間だったよ。

翌週、2人の男がタクシーでホテルにやってきた。俺たちをカボルカの国境近く(アメリカ・アリゾナ州ツーソンの反対側)に連れて来るように指示を受けたらしく、"国境に行くぞ"と告げてきた。

夜になって俺たちは車に乗り込み、高速道路の近くまで連れて行かれ、そしてコヨーテと共に車から降ろされた。

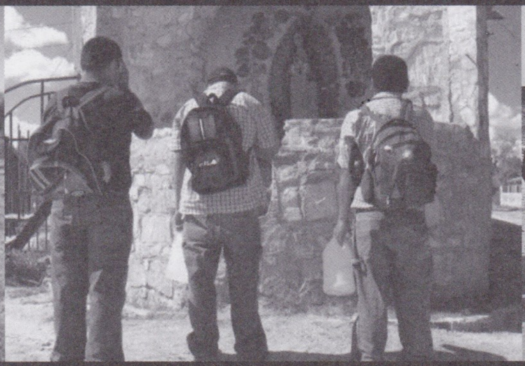
あたりは真っ暗闇で、俺たちは一列になって歩いたんだ。コヨーテは俺たちに、"誰かにつけられてる可能性もあるぞ"と警告した。グループの全員がビビッていたけど、俺たちはとにかく国境に向かって歩き続けた。俺たちはどこを歩いているのかも分からなかったし、はっきり言ってすごく怖かった。

ありもしないものが見えたり、幻聴が聞こえたり、まともな精神を保つのも難しい。自分でも信じられないことだけど、歩いている最中に俺たちの後ろから死神がついてくるのを見たんだよ。グループの他のヤツに話したかったけど、笑われるだけだから俺は黙ってた。しばらく歩いて国境の近くまで来たところで、俺たちは他のグループに遭遇した。彼らは焚き火をしていて、"ここで夜を越す"と言っていた。また、彼らはアメリカの国境警備隊に目撃されており、"国境警備隊は俺たちがここにいることも掴んでいる"とも。だから俺たちは、その晩の国境越えを諦めたんだ。高速道路まで歩いて行き、ホテルへと引き返した。

ホテルに戻り、再びいくつかのグループに分かれ、俺たちは別々のルートをとることになった。俺はピエドラス・ネグラスという、カボルカからそう遠くない街へ移動して別のコヨーテと会うことになっていた。このルートだと3日間も歩くことになる。ただしコヨーテが言うには、"その代わりこのルートは安全で国境警備隊もいない"とのことだった。コヨーテには砂漠で必要になる食べ物と水を十分に準備しておくようにも言われた。グループは全部で20人はいたかな。何人かは南米からここまで来ていた。

俺たちはバスに乗り込み砂漠へと向かっ


密入国する人々





た。途中、メキシコ軍の警備に止められて、賄賂をねだられた。"ここを通りたきゃ、金を払いな"ってね。メキシコの腐りっぷりがよく分かる話だろ。

バスは宗教とロウソクが似合う山あいの、道の行き止まりで停車した。そこはクロスボーダーたちが砂漠を歩く前にお祈りをする場所なんだ。俺たちはそこから歩き始めた。コヨーテは俺たちの先頭を歩きながら、俺たちにいつも指示を出していた。しばらく歩いたところで、武器を持った2人組みの男に俺たちは止められた。俺たちは"有り金を全部出せ"と、要求されたよ。もし金を隠せば撃たれるだけ。俺は持っていたいくらかのコインを出したけど、ヤツらはコインなんか受け取らなかった。周りのみんなはもうビビッちゃって、ただ言われるがままに金を出していた。ヤツらは金を巻き上げて去って行ったよ。そして俺たちも再び歩き始めた。国境の近くまで来たところで、反対側に国境警備隊がいるのが見えた。ヤツらは俺たちには気づいていないようだったし、ひとまずそこで夜を明かすことになった。真夜中にはものすごい冷え込みで、俺たちはみんなで体を寄せ合って暖め合おうってことになったけど、あまり効果はなかったな。俺の人生の中で、一番寒い夜だったよ。

夜が明けて、俺たちは国境を越えた。国境警備隊が日中は眼を光らせているから、国境からさらに2時間歩いて、とりあえず木陰で休むことにしたんだ。俺たちみんな、もうこの旅が上手くいったもんだと信じていたから、持ってきた食べ物をその日に食べつくしちゃったよ。

夜になって、再び砂漠を歩き始めた。生き物の気配なんてまったくないし、何も見えない。真っ暗闇の中を俺たちはとにかく歩き続けなきゃいけなかった。数時間歩いた所で休憩を取ることにした。俺はヴィニール袋を持っていたから、それを地面に敷いて寝たよ。自分が一体どこにいるのかも分からなかったし、次に何が起こるかなんてことも分からない。とにかく暗闇と寒さがあるだけだった。

次の朝、俺はすごく腹が減っていたけど、もう食べ物は残っていなかった。他の人たちも前日に食料をすべて食べつくしてしまっていた。そうしたら、一人のお年寄りがバッグからパンを出してみんなに分けてくれたよ。日中、俺たちはいろんなことを話し、休息をとった。日も落ちかけた頃、ヘリコプターの音が聞こえて、俺たちは木の下に伏せて隠れた。コヨーテが"モスキートだ!(ドローンの隠語)"と言った。ドローンは俺たちを探してたようだったけれど、しばらくして離れていった。あの時ドローンに見つかっていたら、どうなっていたのだろう。

夜になってまた歩き始めた。そのうち灯りが見えたり、車の音が聞こえたりするようになってきた。街は近い、国境を越えたんだ、アメリカに入れたんだ、ということを実感したよ。俺たちはコヨーテの指示に従って物陰に隠れ、コヨーテは携帯電話で誰かに連絡を取り始めた。"目的地まで着いたから、迎えに来てくれ"って。

そこで2時間くらい待っていたかな、"俺たちは勝った"と思っていたよ。国境警備隊が俺たちを取り囲むまでは…。

逃げられなかった。俺たちは捕まってしまった。まさかヤツらがここに来るとは、誰一人思っていなかったんだ。みんな本当に悲しそうな顔をしていたよ。3日間も歩いたのに、すべては失敗に終わった。国境警備隊のボスに、"アリゾナやアメリカの他の州も昔はメキシコのものだったんだぞ"と吹っかける人もいたけど、相手にもされず、俺たちはメキシコを出てからずっと見張られていたこと、そして、俺たちをここで待ち構えていたことを告げられたんだ。俺たちはトラックに乗せられると、国境警備隊の施設に連れて行かれ、メキシコへと帰らされた。

メキシコに戻って俺たちは再びいくつかのグループに分かれた。俺はホテルに向かい、そこでコヨーテからの連絡を待った。そこのホテルでは5人で一部屋をシェアして、何日か休んだおかげで疲れも癒えた。また再び国境越えに挑む準備は整った。

ホテルの部屋にはたくさんのコヨーテが営業に来たけど、どいつもこいつも信用できなかった。俺はもう投げやりになっていたようなところもあったし、本当にもう一度チャレンジできるか、自分でも分からなかった。ようやく俺の雇ったコヨーテから連絡があり、ノガレスの国境のすぐ近くにいる仲間に連絡を取ったとのこと。俺はそこへバスで向かったよ。今回は上手くいくことを願いながら。

ノガレスのホテルではRobertoって男に会った。ヤツは俺に食べ物と寝床を与えてくれたよ。ドアを開けて開口一番に、"腹減ってるだろ?テーブルには食べ物があるから、まずは食べて休めよ"と言ってくれた。本当にありがたかったよ。ヤツはアリゾナにいる家族に会うため、国境を渡るんだと言っていた。食事を済ませると、誰かから電話がかかってきた。Robertoは、"電話の主は俺たちのコヨーテで、仲間に俺たちの様子を見に来させる"って話しだと思っていた。しばらくすると男がやって来たから部屋に入れた。そいつは金について色々と聞いてきて、何かおかしいな、とは思ったけど、気がついたときにはもう手遅れだったんだ。俺たちは、また金を巻き上げられた。電話してきたのは俺たちのコヨーテじゃなかったし、仲間なんて寄越していなかった。でも、どういうわけか、そいつは俺たちの名前も、俺たちがどこに行こうとしているかも知っていたんだよな。そいつは金だけ取って、去って行ったよ。

それからの数日間、もう一度実行に移すときを待ちながら、Robertoと一緒にノガレスの国境近くで過ごした。ノガレスでは、いろんな怪しいものを見たよ。ドラッグ・カルテルはいろんな方法でドラッグを密輸しようとしているし、メキシコ政府の腐敗っぷりも見ることができる。それに、いかにクロスボーダーたちがカモにされているかってことも。

ノガレスで見たものは、俺の状況とはとにかくかけ離れていた。アメリカ人の旅行者はメキシコに土産物を買いに来て、その日の内にアメリカへと帰っていく。クロスボーダーたちはアメリカに入る為、命をかけて砂漠を歩く。不公平以外の何ものでもない。











Photo by Jjca

最後の日、俺はノガレスの公園に行ったことを憶えているよ。3人のパンクスがパッチとシャツを売っていて、少しだけ話したな。夜には国境を越える予定だったから、準備のためにRobertoと俺はホテルへと戻った。コヨーテが部屋に電話をしてきて、近くのスーパーマーケットで待つように言われた。指定の場所に行くと、車が止まっているのが見えたよ。車の中には男が2人いて、俺の名前を呼んだ。車に乗るように言われ、国境のすぐそばの、小さな街に向けて車は走り出した。そこは家が鉄クズと木でできてて、電気も通っていないような場所だった。すごく怖かったよ。彼らは、"深夜になったらやるぞ"と言った。

水を用意し、歩く準備を整えた。砂漠を歩き、アメリカを目指す。それがすごく辛いということはもう分かっている。でも、やらなきゃいけないんだ。俺たちはその夜の第一グループだった。一時間くらい歩いたところでコヨーテが"止まれ!隠れろ!"と言った。近くに国境警備隊がいたんだ。赤と青のサーチライトがトラックから照らし出されていた。俺たちは幸運にも、なんとか見つからずに済んだけど、俺たちの後ろのグループは捕まってしまったんじゃないかな。

俺たちはとにかく歩き続けた。明かりは月明かりだけ。真っ暗闇の中、動物の鳴き声だけが聞こえる砂漠。何が起こるかなんて、誰にも分からない。国境越えではたくさんの人が死んでいる。俺は歩いてる間中、ずっと恐怖に包まれていた。

俺たちの進路には、岩や倒れた木がそこいら中にあって、歩くのは一苦労だったし、鉄条網も越えなきゃいけなかった。俺は何度も転んだけど、Robertoが助けてくれた。俺たちのグループの8人(男も女もいたな)は夜が明けるまで一晩中歩き続けて、アメリカ側での最初の目的地までもう少しというところまで来たんだ。

俺たちは、目的地である家に車が待機しているのを見つけると、すばやく飛び乗った。車は俺たちを他の仲間が待つ、安全な場所まで連れて行ってくれた。そこからまた休む間なんてなく、旅は続いた。みんなとにかく国境からできるだけ離れたかったからね。車は俺たちを国境から更に離れた場所まで連れて行ってくれた。俺はそこでようやく、この旅がうまく行ったことを実感したんだよ。

そこから俺はニューヨークの家族に電話して、無事アメリカに入れたことを伝えた。

でも、そこからニューヨークまではさらに一週間以上の旅になるんだ。なぜなら運転手はそこから乗客を一人ずつ、ニュー・メキシコ、カリフォルニア、コロラド、ネブラスカ、イリノイといった具合に、それぞれ違う場所で降ろしていくから。乗客を降ろすために立ち寄った家々では、食べ物を差し入れてくれたりと、とても親切にしてくれたのを覚えてるよ。

ニューヨークまで行くのは俺一人で、俺がこのバスの最後の乗客だった。約2週間もアメリカを一緒に旅した運転手とはずいぶん仲良くなったよ。ようやくニューヨークに着いて、俺は彼に最大級の感謝を伝え、俺の家族は彼に金を支払った。そして彼はまた国境へ向けて帰っていったよ。

この旅は俺の人生を変えた。ニューヨークで俺は建設現場の仕事を見つけた。安定した仕事にありついてからは、友達と一緒にEN LA OLLAってパンク・ロック・バンドを始めたんだ。俺はヴォーカルで曲も書き始めたよ。移民がどう扱われているかについてね。伝えたいことはたくさんあったし、それを表現するのに音楽は最適な方法だったんだよ。

俺の作った"They know where you are"っていう曲は、テクノロジーによって人々の居場所が暴かれてしまうことを歌っている。"Crossing the river"って曲は、より良い未来と家族のために、人々がどれほどのリスクを背負っているかについて歌っているんだ。LOS CRUDOSにはすごく影響を受けたよ。彼らの歌詞は移民であることについてたくさんのことを歌っているから。メキシコのSOLUCION MORTALもそうだね。EN LA OLLAはボストンのCZOLGOSZというバンドとスプリット7インチをリリースして、あとは日本の友達(Persona Unknown Records)がリリースした2枚組みの7インチ・コンピにも参加しているよ。ただ、EN LA OLLAはライヴを何回かして、数年プレイした後に解散してしまった。今は大工の仕事をしながらDISCHAKAでギターを弾いてるんだ。

近い将来、俺はメキシコに戻りたいと考えている。日本のパンクスのみんなには、中南米で何が起きているのかを知ってもらいたいと思っているよ。俺が越えたのは一つの国境だけだけど、人によってはアメリカに入るために3つかそれ以上の国境を違法に越えてくるんだ。クロスボーダーになったのには、みんなそれぞれの理由がある。俺にも俺の理由がある。不法滞在して生きていくことには困難がつきまとうよ。みんなと同等の機会なんて得られないからね。

いつの日か、誰もが自由に生きるチャンスを得られ、国境なんてものがなくなることを俺は本当に願っているんだ。

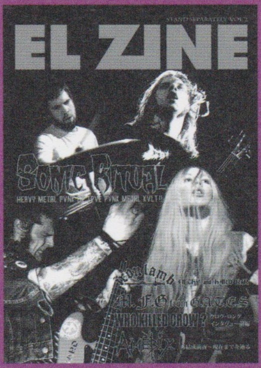
Contact:enla_olla@hotmail.com



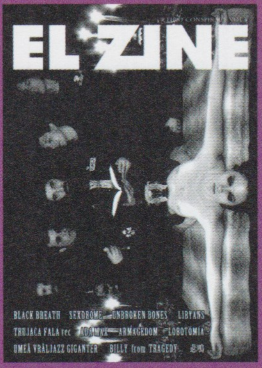
Photo by Jjca

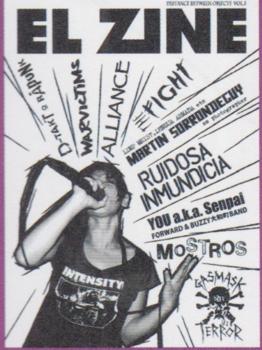


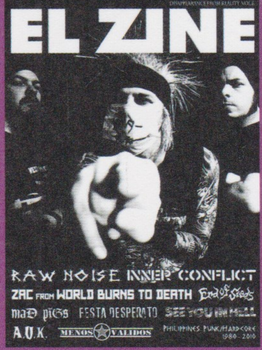


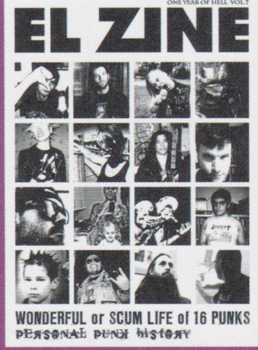


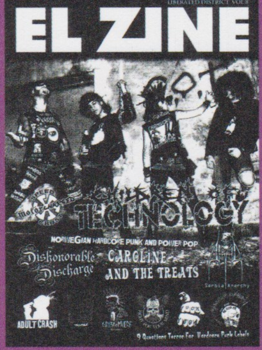


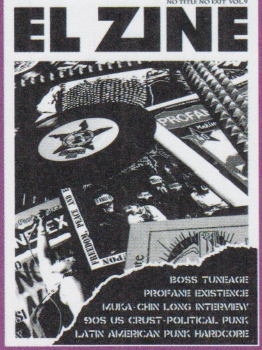




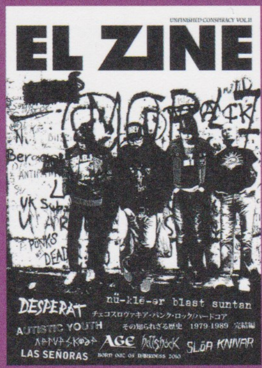


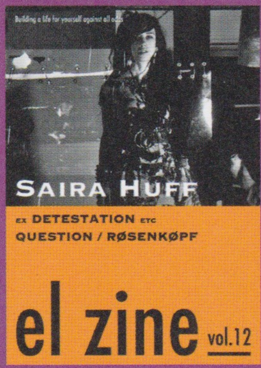


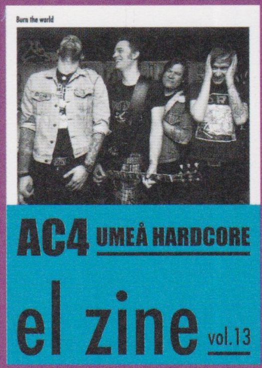








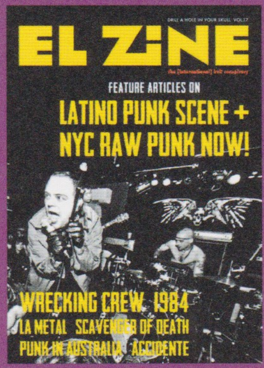












VOL.0, VOL.1, VOL.2, VOL.3, VOL.13
ARE SOLD OUT! THANKS FOR READING!
FOR PUNKS! BY PUNKS!

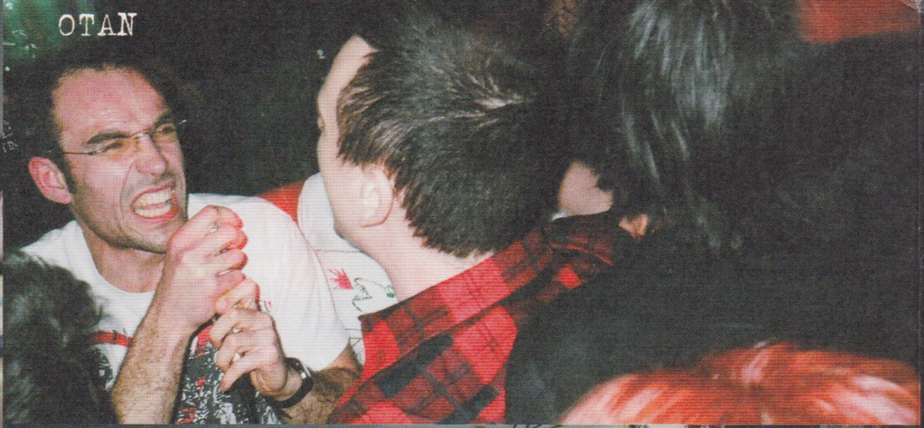
editor's notes

今号は、"記事が集まり過ぎて全然収まらない"というレア・ケースが生じました。そんなワケで、回答を送ってこない海外のバンドにはあえて催促の連絡をせず、オーストラリアのシーン・レポートをメルボルン編のみに変更し、VIVISEKTIOを前編/後編に分け、更に自分のディスク・レヴューをカットするなど、組み終えていたレイアウトを大幅にやり直すことになりまして、何が言いたいのかと言えば、"今号はとっても面倒臭かった"ということです(笑)。けど、LVEUM特集とかユーゴの話し、密入国体験記にグランジ、更にはポーランドの人がフィンランドのバンドにインタヴューしていたりと、多様性がてんこ盛りの内容になりました。記事のストックが結構あるので次号は早いペースで出せるかもね。ほんじゃ!

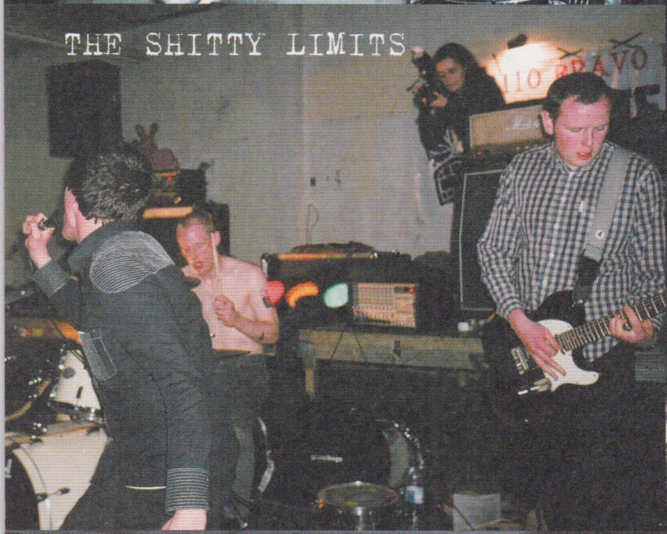
※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した
EL ZINE vol.18　2015年7月31日発行　E-MAIL　unno13@gmail.com

※バック・ナンバーはパンク/ハードコア取扱店　又はhttp://www.juzasha.comにてお求めになれます

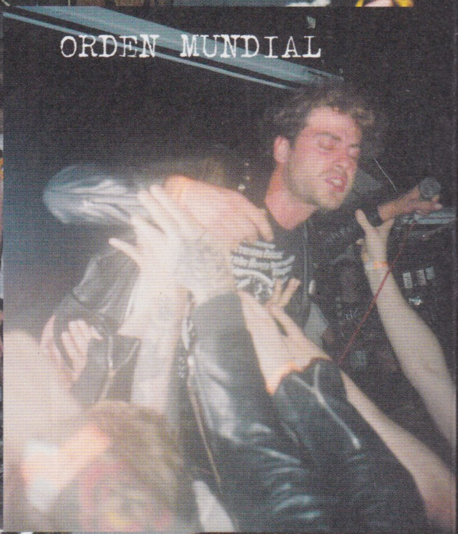












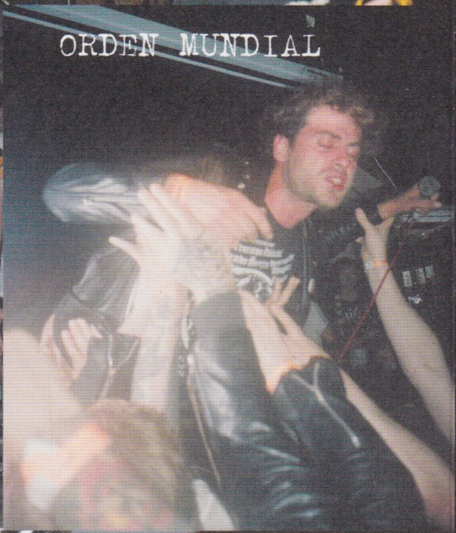


the (international) kraft conspiracy EL ZINE NUKE YORK IS EVERYWHERE VOL.18











Photos by Alejandra Núñez

the [international] kvlt conspiracy EL ZINE NUKE YORK IS EVERYWHERE VOL.18

EL Z



ANASA

LA VIDA ES UN MU

FILTHY HATE THE RUSTE

FÖRTVIVLAN VIVISEKTIO

PUNK IN AUSTRALIA ROT

JANEZ:ATENTAT NA SLUH

CROSSING THE RIVER GRUNGE